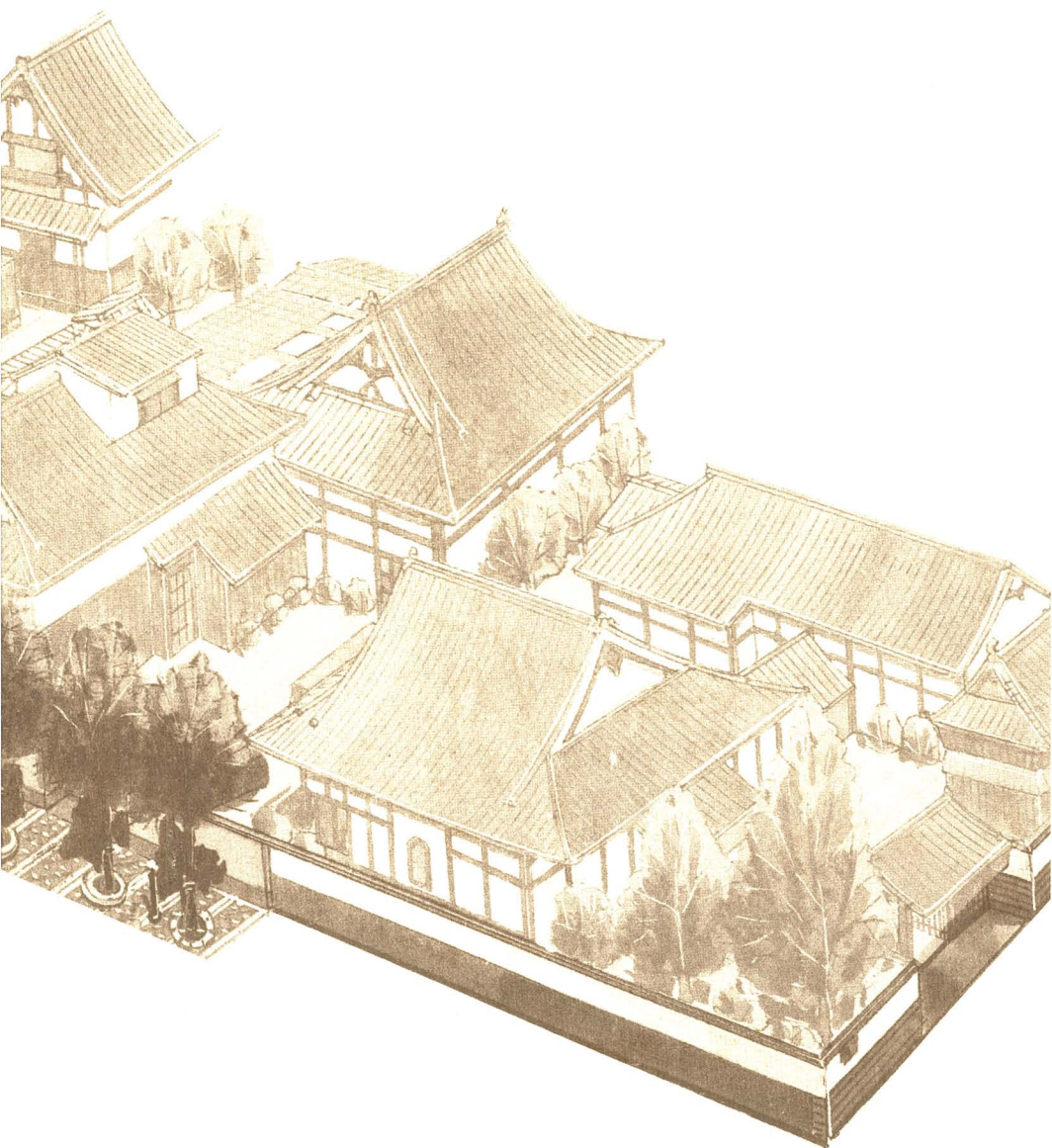


有岡城跡・伊丹郷町 III

——三軒寺前プラザ建設に伴う発掘調査報告書——



1994. 3

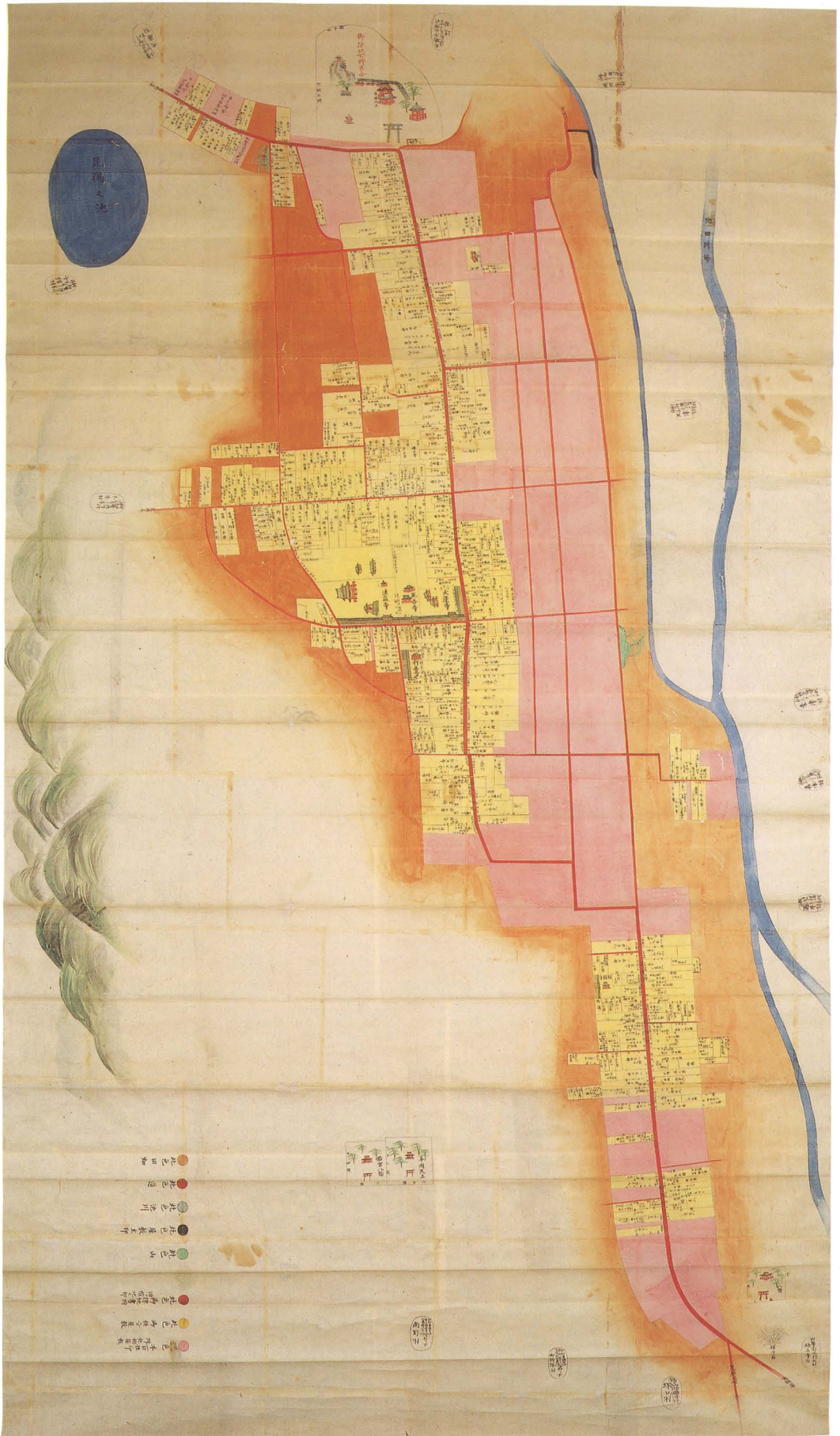
伊丹市教育委員会
大手前女子大学史学研究所

有岡城跡・伊丹郷町III

——三軒寺前プラザ建設に伴う発掘調査報告書——

1994. 3

伊丹市教育委員会
大手前女子大学史学研究所



伊丹市立博物館所蔵 (272.8×157.7cm)



I-A区・I-B区 第1次面全景（南より）



I-C区 第2次面全景（南西より）



S E03



SK114



序

本書は、有岡城跡・伊丹郷町遺跡内の「歩行者専用道路及びイベント広場の建設」に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する報告書であります。

伊丹の地は、伊丹台地と武庫川・猪名川によって形成された沖積平野から構成されており、そのところどころには、弥生時代から古代・中世の遺跡が存在し、古い文化を伝えております。

その昔、伊丹台地は、日本の城郭史上はじめて惣構をもつ城として知られている荒木村重の居城「有岡城」がありました。

今回の発掘調査により、伊丹郷町を襲った元禄大火の跡など貴重な遺跡が発見されました。

市内に点在する埋蔵文化財は、開発によって失われていくため、遺跡を調査し、記録保存を行い後世に残すことは、私たちの大切な使命であります。

このたびの発掘調査は、昭和62年4月「中心市街地整備構想」に基づく事業を対象に実施したもので、大手前女子大学学長日比野丈夫先生を委員長とする大手前女子学園有岡城跡調査委員会に調査をお願いしました。

末尾になりましたが、今回の調査に当たってご尽力いただきました日比野丈夫学長をはじめ、藤井直正教授、発掘調査を担当されました前川 要・小笠原典子両氏およびこの調査に参加された皆さま方のご労苦に対し、深甚なる敬意と感謝の意を表し、序文といたします。

平成6年3月

伊丹市教育委員会 教育長 乾 一 雄

序

『有岡城跡・伊丹郷町Ⅲ』と題するこの報告書は、伊丹市中央2丁目の三軒寺前プラザの建設に関して行われた、考古学的発掘調査の成果である。

有岡城とは、いうまでもなく天正2年(1574)、荒木村重によって築造された、惣構えをもつ日本最古の都市城郭であった。伊丹市では、市街地再開発事業を進めるに当たって、同市教育委員会が有岡城跡及び伊丹郷町の調査を実施することとなり、大手前女子大学にその一部が委託され、昭和61年から62年にかけてJR福知山線伊丹駅前について宮ノ前地区市街地の調査が進められ、三つ目として三軒寺前プラザの調査が行われたのである。

調査報告書は、まずJR伊丹駅前に先立つ三井パークマンション建設に伴うものを昭和62年に『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』、JR伊丹駅前に関するものを平成5年に『同Ⅱ』第1分冊・第2分冊として出版することができた。本報告書はこれに次ぐものである。

三軒寺前プラザは市民の憩いの広場として、古寺と新しいビルに囲まれたすばらしい環境を作っている。再開発された伊丹の町のシンボルといってもよいであろう。しかも、ここは郷町の中心を占め、三寺のうち法巖寺の創建は荒木氏の築城以前に溯るのだから、この付近こそ伊丹郷町最古の歴史をもつ由緒ある土地なのである。考古学的調査によるその地下の解明が、多くの市民から注目され、調査報告書の出版が学界から待望されていたのはいうまでもない。

今回の調査及び報告書の作成については、主任として中心的な働きをされた本学の藤井直正教授をはじめ、これに協力された前川 要(現富山大学人文学部助教授)・川口宏海(大手前栄養文化学院助教授)ら諸氏の労苦を多とするものである。事業の当事者である伊丹市教育委員会はもとよりのこと、兵庫県教育委員会その他諸機関、学会から時に応じてさまざまな指導・助言をいただいたことを感謝しなければならない。それとともに私にとってとくに嬉しいのは、本学の卒業生、在学生たちが、終始変らずこの事業に協力し、大きな成果を挙げて下さったことである。

平成6年3月

大手前女子大学学長 日比野丈夫

例 言

1. 本書は、兵庫県伊丹市による市街地再開発事業のうち三軒寺前プラザ建設に伴って、伊丹市中央2丁目において実施した、有岡城跡と伊丹郷町の発掘調査報告書である。
2. 現場における調査は、大手前女子大学日比野丈夫学長を委員長とする「有岡城跡調査委員会」の指導のもとに、大手前女子大学史学科教授藤井直正を調査担当者として、大手前女子学園が伊丹市の委託による事業として実施した。なお、これにかかる経費は委託料として伊丹市より支出を受けた。
3. 現場における調査は、昭和62年4月24日から7月1日までの期間で実施した。なお、発掘調査面積は608㎡である。
4. 現場における調査は、調査担当者である藤井直正の管理・指導のもとに、主任調査員として、前川 要（当時、大手前女子大学研究嘱託、現在、富山大学人文学部助教授）が専従した。また、調査員として大手前女子大学卒業生の小笠原典子、事務員として下野暢子を充ててこれをたすけ、大手前女子大学史学科所属学生のほか、多数の学生諸君の参加・協力を得、調査補助員とした。これらの参加者の名簿は巻末に掲げた。
5. 調査資料ならびに出土の整理作業は主任調査員前川 要と、その指導のもとに、調査員小笠原典子・赤松和佳（大手前女子大学卒業生）、事務員として平井千保（大手前女子大学卒業生）によって、現場の終了後逐次、これも多数の学生諸君の協力を得て進めて来た。これらの参加者の名簿も巻末に掲げた。
資料整理および本報告書作成に向けての作業は、改めて平成4～5年度に、伊丹市教育委員会より委託を受けた。なお、整理作業と報告書の作成は、平成元年5月以後、学内調査組織の整備に伴い、大手前女子大学史学研究所文化財調査室、有岡城跡・伊丹郷町調査部に引き継いで実施したことを付記する。
6. 本報告書の作成は企画段階で、藤井の指導・助言のもとに、主として編集作業は主任調査員前川 要が担当し、小笠原典子・赤松和佳が学生諸君多数の協力によって進めたが、川口宏海（大手前栄養文化学院助教授）・藤本史子（大手前女子大学研究嘱託）の助言を得た。報告書原稿の執筆分担については、目次に明記した通りである。
7. 遺構写真は前川 要、遺物写真は小笠原典子がそれぞれ撮影した。
8. 遺構表示記号は、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
9. 位置の記載は、平面直角座標系Vによる、建設省基本点・基準点、および伊丹市公共基準点を使用し、記載している数値は、X・Yともm単位で、水準はO.P（大阪湾中等潮位）である。
10. 土層・遺物の色調については、『新版・標準土色帖』（農林省農林水産技術会議事務局、昭和51年）を併用し、すべて肉眼観察によって比定した。
11. 現場における発掘調査の実施に当たっては、伊丹市教育委員会の教育長以下、担当部局各位の懇切なご指導ご配慮を得た。

また、株式会社染の川組、西村興業株式会社、その他多くの機関と多数の方がたの援助を受けた。

さらに、大手前女子学園藤井健造前理事長（平成3年2月10日逝去）、現福井秀加理事長、大手前女子大学日比野丈夫学長、企画・運営委員会委員諸先生には、調査の進行から本報告書の刊行に至るまで指導・助言と各方面にわたってご配慮を得たことを付記する。

12. 今回の調査および報告書作成にあたり、多くの方々に種々ご協力・ご教示賜ったが、ここに関係各氏の芳名を載せ、謝意を表する。なお、敬称は略させていただいた。

稲垣達郎（伊丹市文化財保存協会）大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）亀島重則（大阪府教育委員会）佐久間貴士（大阪府教育委員会）白神典之（堺市教育委員会）瀬川芳則（関西外国語大学教授）坪之内 徹（奈良女子大学）橋本 久（大阪経済法科大学教授）村川行弘（大阪経済法科大学教授）和島恭仁雄（伊丹市立博物館）

調査参加者名簿

■外業の部

大手前女子大学	角田あゆみ	(18期生)
	青山美和 泉本美奈 應原千鶴 高橋里美 谷 のりえ 松田公見子	(19期生)
	惣田早苗 高比良 恵 竹安智美 橋本和実 榎本亜佐 松本有加子 山口 薫	(20期生)
	磯部敦子 川嶋由紀子 東口智子	(21期生)
	安藤周子 石田幸子	(22期生)
大阪商業大学	平本雄士 松田 研	
大阪産業大学	山口 裕	
大阪学院大学	伊藤秀樹	

■内業の部

大手前女子大学	山崎晴世	(24期生)
	津山詩乃	(25期生)
	山崎美恵 渡邊晴香	(26期生)

本文目次

序	伊丹市教育委員会教育長 乾 一雄.....	i
序	大手前女子大学学長 日比野丈夫.....	iii
例 言		v
第1章 調査の経過	(藤井).....	1
第2章 調査の概要		6
第1節 はじめに	(前川).....	6
第2節 調査区の設定	(前川・小笠原).....	6
1. I-A区の遺構と遺物.....		6
2. I-B区の遺構と遺物.....		10
3. I-C区の遺構と遺物.....		12
4. II-A区の遺構と遺物.....		27
5. II-B区の遺構と遺物.....		37
6. III区の遺構と遺物.....		47
第3章 結 語	(前川).....	54
第4章 付 編		55
元禄七年伊丹郷町絵図からみた検出屋敷地の性格	(前川).....	55

図 版 目 次

卷頭図版 1 元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図	1 I-C区SK38	
卷頭図版 2 遺構全体写真	2 I-C区SI01	
I-A区・I-B区第1次面全景	3 I-C区SI02	
I-C区第2次面全景	4 I-C区SI02	
卷頭図版 3 出土遺物	5 II-A区第3次面全景	
卷頭図版 4 三軒寺前プラザの現状	6 II-A区第3次面北側全景	
図版 8 遺構(8)		
図版 1 遺構(1)	1 II-A区第2次面全景	
1 法巖寺・正善寺・大蓮寺全景	2 II-A区第1次面全景	
2 I-A区全景	3 II-A区SA01	
図版 2 遺構(2)	4 II-A区SE01	
1 I-A区SX01	5 II-A区SD03	
2 I-B区第3次面全景	6 II-A区SK57	
図版 3 遺構(3)	図版 9 遺構(9)	
1 I-B区第2次面全景	1 II-A区SK80	
2 I-B区第1次面全景	2 II-A区SK83	
図版 4 遺構(4)	3 II-A区SX07・08・09	
1 I-B区SK23	4 II-A区SD04	
2 I-B区SK26	5 II-A区SK67	
3 I-C区第3次面全景	6 II-A区SX03・05・06	
4 I-C区SE04	7 II-A区SA02	
5 I-C区SE03	8 II-A区SK43・44・SX01	
図版 5 遺構(5)	図版10 遺構(10)	
1 I-C区第2次面全景	1 II-B区第2次面全景	
2 I-C区第1次面全景	2 II-B区第1次面全景	
図版 6 遺構(6)	3 II-B区SK07	
1 I-C区SK74	4 II-B区第1次面南端	
2 I-C区SK77	5 II-B区SK30	
3 I-C区SD04・05	6 II-B区SK20	
4 I-C区SD04・05	7 II-B区SK33	
5 I-C区SD06	図版11 遺構(11)	
6 I-C区SD02・03	1 II-B区SK113	
7 I-C区SK60	2 II-B区SK114	
8 I-C区SK33	3 II-B区SK114遺物出土状況	
図版 7 遺構(7)	4 III区北壁	

- 5 III区第4次面北側
6 III区第3次面全景
図版12 遺構(12)
1 III区第2次面全景
2 III区第1次面全景
3 III区SK04
4 III区SP12遺物出土状況

- 図版13 遺物(1)
I-A区SK15、I-B区SK23
I-C区SE04・SE03

- 図版14 遺物(2)
I-C区SE03・SD05・SK60・
SI01・SI02・1次面包含層

- 図版15 遺物(3)
I-C区表面採集遺物
II-A区SE01・SK57

- 図版16 遺物(4)
II-A区SK57・SK80・SK83・
SK86・SK67
II-B区SK05・SK07・SK30

- 図版17 遺物(5)
II-B区SK20・SK33・SK113・
SK114、III区SK04

- 図版18 遺物(6)
III区SK04・SP12・SK01

挿 図 目 次

- 第1図 調査地点位置図……………3・4
第2図 天保十五年伊丹郷町分間絵図
(八木哲浩1988に加筆転載)……………5
(I-A区)
第3図 第45次調査I-A区遺構全体図……………7・8
第4図 I-A区北壁・西壁土層図……………6
第5図 I-A区SX01遺構図……………9
第6図 I-A区SX01出土遺物(1)……………9
第7図 I-A区SX01出土遺物(2)……………10
(I-B区)
第8図 第45次調査I-B区遺構全体図……………10
第9図 I-B区北壁・東壁・南壁・西壁土層図……………11
第10図 I-B区SK23遺構図……………12
第11図 I-B区SK23出土遺物……………12
第12図 I-B区SK26遺構図……………12
(I-C区)
第13図 第45次調査I-C区遺構全体図……………13・14
第14図 I-C区北壁土層図……………15

- 第15図 I-C区南壁土層図……………16
第16図 I-C区東壁土層図……………17
第17図 I-C区SE04遺構図……………17
第18図 I-C区SE04出土遺物……………18
第19図 I-C区SE03遺構図……………19
第20図 I-C区SE03出土遺物(1)……………20
第21図 I-C区SE03出土遺物(2)……………21
第22図 I-C区SK74遺構図……………22
第23図 I-C区SK77遺構図……………22
第24図 I-C区SK60遺構図……………22
第25図 I-C区SK60出土遺物……………23
第26図 I-C区SD04・05遺構図……………24
第27図 I-C区SD05出土遺物(1)……………24
第28図 I-C区SD05出土遺物(2)……………24
第29図 I-C区SD06遺構図……………24
第30図 I-C区SD02・03遺構図……………24
第31図 I-C区SK33遺構図……………24
第32図 I-C区SK38・SI01遺構図……………24
第33図 I-C区SI01出土遺物……………25
第34図 I-C区SI02遺構図……………25
第35図 I-C区SI02出土遺物(1)……………25

第36図	I—C区S I 02出土遺物(2)……………26
第37図	I—C区1次面包含層(1)……………26
第38図	I—C区1次面包含層(2)……………27
第39図	I—C区表面採集遺物……………27

(II—A区)

第40図	第45次調査II—A区遺構全体図……………28
第41図	II—A区西壁土層図……………29
第42図	II—A区東壁土層図……………30
第43図	II—A区S A 01遺構図……………31
第44図	II—A区S E 01遺構図……………31
第45図	II—A区S E 01出土遺物……………32
第46図	II—A区S D 03遺構図……………33
第47図	II—A区S K 57遺構図……………33
第48図	II—A区S K 57出土遺物(1)……………33
第49図	II—A区S K 57出土遺物(2)……………33
第50図	II—A区S K 80遺構図……………34
第51図	II—A区S K 80出土遺物……………35
第52図	II—A区S K 83遺構図……………35
第53図	II—A区S K 83出土遺物……………35
第54図	II—A区S K 86遺構図……………36
第55図	II—A区S K 86出土遺物……………36
第56図	II—A区S X 07・08・09遺構図……………36
第57図	II—A区S D 04遺構図……………36
第58図	II—A区S K 67遺構図……………36
第59図	II—A区S K 67出土遺物……………36
第60図	II—A区S X 03・05・06遺構図……………36
第61図	II—A区S A 02遺構図……………36
第62図	II—A区S K 43・44・S X 01遺構図……………37

(II—B区)

第63図	第45次調査II—B区第2次面遺構全体図……………37
------	-----------------------------

第64図	第45次調査II—B区第1次面遺構全体図……………38
第65図	II—B区北壁・西壁土層図……………39
第66図	II—B区南壁土層図(1)……………40
第67図	II—B区南壁土層図(2)……………41
第68図	II—B区S K 05遺構図……………41
第69図	II—B区S K 05出土遺物……………41
第70図	II—B区S K 07遺構図……………42
第71図	II—B区S K 07出土遺物(1)……………42
第72図	II—B区S K 07出土遺物(2)……………43
第73図	II—B区S K 20遺構図……………43
第74図	II—B区S K 20出土遺物……………43
第75図	II—B区S K 30遺構図……………43
第76図	II—B区S K 30出土遺物……………43
第77図	II—B区S K 33遺構図……………43
第78図	II—B区S K 33出土遺物……………44
第79図	II—B区S K 113・114遺構図……………44
第80図	II—B区S K 113出土遺物……………45
第81図	II—B区S K 114出土遺物(1)……………45
第82図	II—B区S K 114出土遺物(2)……………46
第83図	II—B区S K 114出土遺物(3)……………46
第84図	II—B区S K 114出土遺物(4)……………47

(III区)

第85図	第45次調査III区第3・4次面遺構全体図……………48
第86図	第45次調査III区第1・2次面遺構全体図……………49
第87図	III区北壁・南壁・東壁・西壁土層図……………50
第88図	III区S K 04遺構図……………51
第89図	III区S K 04出土遺物……………51
第90図	III区S P 12遺構図……………51
第91図	III区S P 12出土遺物……………52
第92図	III区S K 01遺構図……………51
第93図	III区S K 01出土遺物……………52

第1章 調査の経過

阪急電車伊丹駅から東へ、商店街を通り抜けると、そこから一段高くなり、その上は床に陶板が貼られ、樹木が植栽された瀟洒な広場になっている。右手に白亜の建物“やすらぎの館”、正面には大手柄酒造の黒い板壁の酒蔵とその向こうに小西酒造株式会社本社の社屋、左手には煉瓦積と白壁の土塀のめぐらされた法巖寺・正善寺・大蓮寺の三カ寺が並んでいるが、法巖寺の本堂と市の天然記念物に指定されているクスノキの大木が一きわ目立って眼に入る。

この一角が、平成2年に竣工した「三軒寺前プラザ」である。その名前の由来は、いうまでもなく北から法巖寺・正善寺・大蓮寺の三カ寺が境を接して東西に並び“三軒寺”と呼ばれて来たことに因んでいる。

寺院の本堂・山門・鐘楼、町かどの地蔵堂、木造瓦葺の酒蔵といえ、典型的な日本の伝統的景観と言える建物であるが、これと重層の鉄筋コンクリートの現代建築が、ここではみごとに調和して、独特のコントラストを見せている。現代のどこにでも見ることのできる風景と言ってしまうればそれまでであるが、異様さを感じさせないのは、見る者の眼が慣れてしまったからなのかも知れない。

伊丹市では、市域の活性化をはかることを重点施策として、JR福知山線伊丹駅前と、伊丹郷町の氏神、猪名野神社参道の宮ノ前商店街とその周辺一帯を対象とする市街地再開発事業が計画され施工されて来た。このうちJR伊丹駅前の再開発事業は、サンシティホールをはじめとする施設がすでに完成しており、これに合わせて駅前に一部が残存し、国の史跡に指定されている「有岡城跡」についても、整備事業がほぼ完了している。また、宮ノ前地区では、音楽の殿堂として設計されたアイフォニックホールはすでに竣工、利用されているが、既設建物の撤去が立退き等の事情があって遅延している。しかし、平成7年度の完工をめざして漸次事業が進められている状況である。

これに関連して計画・施工されている「中心市街地整備構想」というものがあり、先の二つの市街地再開発と相俟って、伊丹市の中心となっている市街地を整備しようという事業で、すでに柿衛文庫館・市立美術館・市立工芸センターなどの芸術文化施設がつくられて来た。

「三軒寺前プラザ」も、この構想の中で計画された事業の一つであるが、調査の委託を受けた段階では、計画区域内の家屋の撤去は完了しており、空地としてフェンスがめぐらされていた。予定敷地の面積は2,400㎡であり、道路としての役割を兼ねたイベント広場をつくる設計であり、平常は小公園として、市民の憩いの場としての役割も持った広場である。

余談であるが、いわゆる“三軒寺”は、江戸時代の文政年間（1818～1830）に、伊丹の郷土史家であった古野将盈^{まさみつ}の著わした『有岡庄年代秘記』にのせられている「丹丘寺院開基年考」を見ると、

大永第二年 法巖寺

天正第四年 大蓮寺

天正十七年 正善寺

と記されているように、いずれも古い由緒をもつ寺院である。その創建は、法巖寺が室町時代の大永2年（1522）、大蓮寺が天正4年（1576）、正善寺が天正17年（1586）とされている。よく知られているように、荒木村重による有岡城の築城とそれに伴う惣構の構築は、天正2年（1574）のことであり、三カ寺のうち、法巖寺はそれ以前からここに存在していた。同寺が伊丹氏とかかわりのあることを伝えていることもこれを物語っている。これに対して大蓮寺と正善寺の二カ寺は村重の入城後に創建されているが、有岡城および惣構の

構築との戦略的な意味をふまえて、この場所が占定されている公算が大きい。もちろん、寛文9年（1669）の『寛文9年伊丹郷町絵図』をはじめとする伊丹郷町の絵図に載せられていて、当時の状況を知ることができる。これらの寺史と現状については、くわしい調査を果たした上で、改めて述べることにしたい。

「三軒寺前プラザ」の建設予定敷地はこの伊丹郷町の中にふくまれ、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、工事の施工に先立って発掘調査と記録作成が必要があり、市教育委員会を通じて大手前女子学園に調査の依頼があった。

大手前女子学園は、伊丹市稲野町への短期大学の移転・開校が機縁となって、伊丹市による市街地再開発事業に伴う発掘調査を委託されることになった。これらの経過については、すでに既刊の報告書にそのつど述べて来たが、改めてふり返ってみると次表の通りである。

年 度	事 業 名
昭和60年度	J R伊丹駅前市街地再開発による立退家屋の代替地、および三井パークマンション建設に伴う調査
昭和61年度	J R伊丹駅前市街地再開発に伴う発掘調査
	宮ノ前地区市街地再開発に伴う試掘調査
昭和63年度	宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査
	三軒寺前プラザ建設に伴う発掘調査

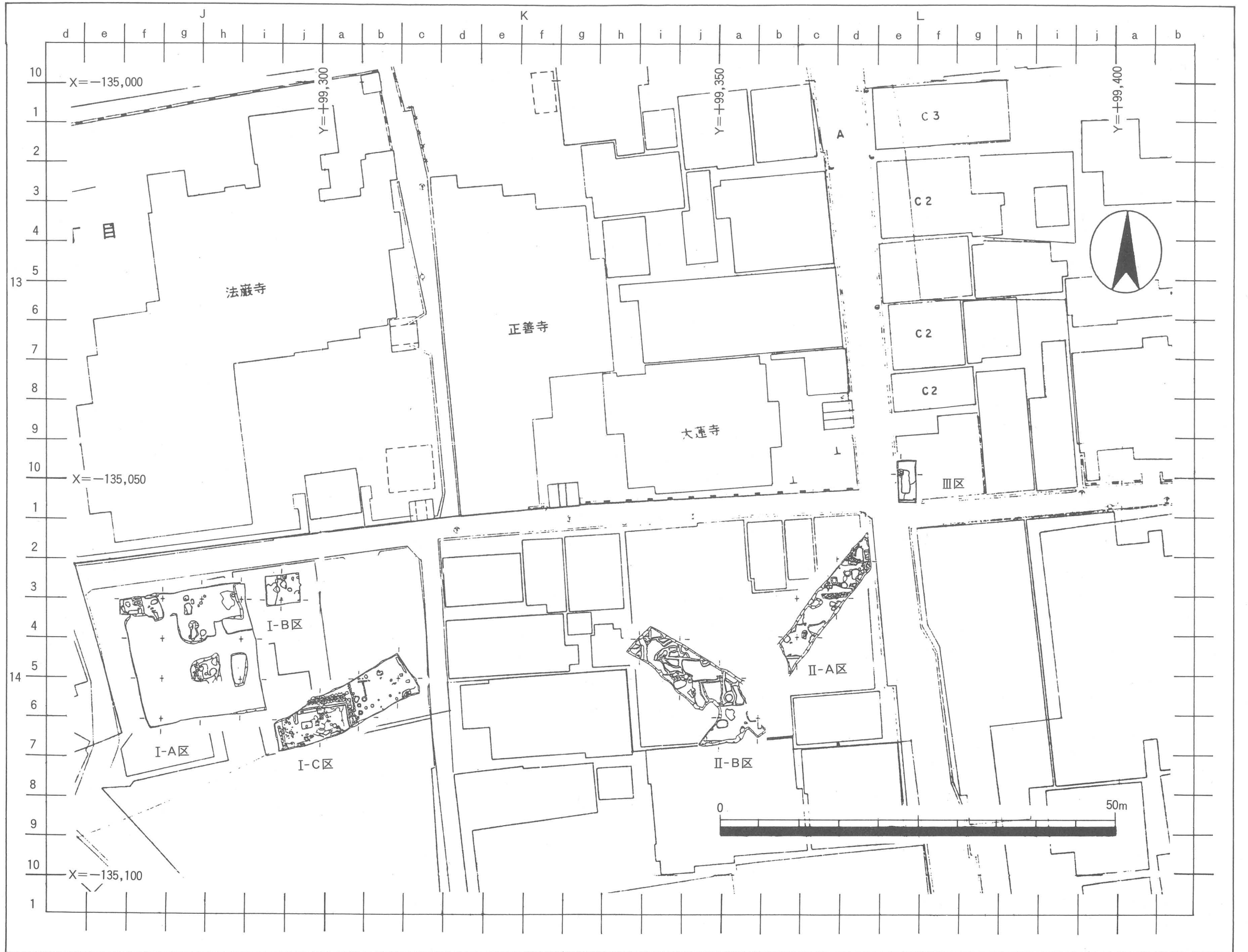
これに対応し、調査を円滑に実施するために、昭和60年度には「有岡城跡調査会」、昭和61年度からは、これを改編して「有岡城跡調査委員会」を組織し、いずれも大手前女子大学日比野丈夫学長を委員長として学内関係者から選出された委員が委嘱され、その協議・指導のもとに、史学科教授藤井が担当者として調査グループを編成し、調査を運営して来た。

今回、伊丹市から依頼のあった「三軒寺前プラザ建設」に伴う発掘調査も、その一環として受諾することとなり、藤井を調査主任とし、大手前女子大学研究嘱託に任用されていた前川 要君（現在、富山大学人文学部助教授）を主任調査員とし、当初からこの有岡城跡・伊丹郷町の調査に参加して来た小笠原（旧姓、萩野）典子を調査員に充て、大手前女子大学史学科学生をはじめとする多数の参加者をもって調査を実施した。

調査の委託を受けて以後、伊丹市都市開発部再開発事務所の担当者諸氏と藤井・前川は、調査の具体的な実施方法について再三にわたって協議の機会を持った。計画の予定敷地は2,400㎡であるが、発掘調査を行なう個所は、ステージ・鉄塔をつくるどころ、植樹帯などの、地面を深くまで掘り下げる場所に限定し、それ以外の区域については、現状の地面を傷つけることなく、盛土によって保存されるということであったため発掘は行なわないこととした。従って、敷地の面積は2,400㎡であるが、実際に発掘調査を行なったのは、そのうちの608㎡である。

現場における調査は、昭和62年4月24日に開始し、7月1日まで延57日間を費した。調査区域を二区に分け、法巖寺前をI区、正善寺・大蓮寺前をII区とした。二区とも、既存建物の基礎等によって地下遺構の壊されているところもあったが、本書に報告したように各時期・各種類の遺構を検出し、現代からさかのぼって江戸時代の各時期におけるこの区域のうつつかりを把握することができた。伊丹郷町のちょうど真中に当たり、「三軒寺」の門前がどのように推移して来たかということをはっきりとすることができたのは、今回の調査における最大の成果といえる。

調査期間中、伊丹市教育委員会社会教育課文化係の関係諸氏には随時現場において指導・助言を得たが、



第1図 調査地点位置図

兵庫県教育委員会も4月28日・5月18日・6月2日の三回、担当係官の来臨があった。また、調査の成果を広く一般の方がたに知っていただくために、6月14日に現地説明会を開いたが、多数の方がたが来場され盛会であった。

この調査の概要は、上記の現地説明会のために作成・配布した発掘調査現地説明会資料『有岡城跡と伊丹郷町 歩行者専用道路イベント広場建設に伴う調査一』と、伊丹市に提出した実績報告書にまとめた。しかし多量の出土遺物については、当面の整理以外の作業は進めることができないままの状態であった。

伊丹市が施工されている市街地再開発事業は、建設省の補助を得て実施されているのであるが、埋蔵文化財包蔵地の発掘調査経費については、文化庁と建設省との覚書に基づき事業主体が原因者として負担しなければならないことが義務づけられている。しかし、これもさまざまなケースがあるようであり、伊丹市の場合においては、発掘調査の経費はこの事業費の中から支出されるのであるが、それはあくまでも現場における発掘調査の経費であって、発掘調査終了時以後の資料整理や出土遺物の整理はもとより、報告書の刊行に至るまでの所要経費はふくまれていないのである。伊丹市での調査に従事するようになった当初から、この点については、これまで経験して来た実績をふまえて疑問に思い、市教育委員会や県教育委員会の関係者に質問し、意見を述べたが徒労に終わった。

こうした事情から、資料整理から報告書の作成・刊行までに至る経費については、別途、市教育委員会が予算を計上し、委託費として支出されることになった。本学においても、今回の「三軒寺前プラザの建設に伴う調査」に先立って、昭和61年度に実施した「JR伊丹駅前市街地再開発に伴う調査」の整理事業は、平成2年度から4年度にわたる継続事業として作業を進め、本年の3月、『有岡城跡・伊丹郷町II 第1分冊』および『有岡城跡・伊丹郷町II 第2分冊』の刊行を以て完了した。本書の刊行は、それにつづくものであり、平成4年度に調査資料と出土遺物の整理事業について、平成5年度に報告書の作成と刊行に要する委託費の支出を受けた。

報告書の作成に至るまでの作業は、主任調査員前川 要と調査員小笠原典子、卒業後新しく調査員に加わった赤松和佳が主となって進めて来た。現場における発掘調査から整理作業に至るまで、参加した学生は多数である。その名前は別項に記したが、その苦勞に対しお礼を申しあげたい。また調査の遂行に当たってお世話になった方がた、指導・助言をいただいた方がたも数多い。そのご芳名は例言に列記したが、ここに改めて謝意を表する次第である。



網：調査地区

第2図 天保十五年伊丹郷町分間絵図（八木哲浩1988に加筆転載）

第2章 調査の概要

第1節 はじめに

有岡城跡・伊丹郷町は、伊丹市から川西市にかけて南北に延びる洪積段丘である伊丹台地の上に立地する。東側は猪名川によって開かれ、比高差3～4mの段丘崖をなす。頂部の海拔は20m前後を測る。

この遺跡内での遺構・遺物の時期区分は、『有岡城跡・伊丹郷町II』（伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所1992）に基本的に従う。中世の在城期と近世の伊丹郷町期の2時期に大別でき、中世の在城期は伊丹氏の段階と荒木村重・池田之助の段階とに細分される。それぞれ、3つの時期を順にI期、II期、III期とする。さらに、近代はIV期とする。ただし、今回の調査時の遺構の大半はIII期の伊丹郷町期のものである。

なお、各遺構と遺物の項目での記述の順序は遺構年代の古い順とする。

第2節 調査区の設定

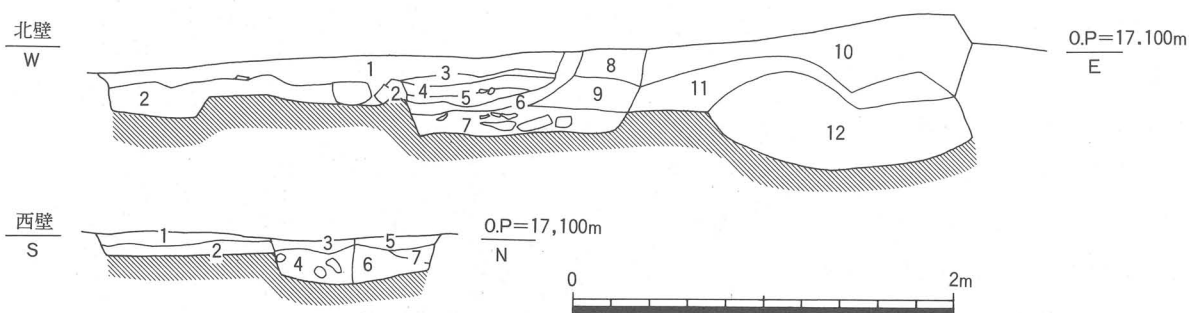
今回の調査では、西よりI区・II区・III区と発掘区を設定した（第1図）。

発掘区的位置は、平面直角座標系Vの $x = -135.045$ から $x = -134.085$ 、 $y = +99.270$ から $y = +99.370$ の範囲である。

1. I-A区の遺構と遺物

検出した遺構は、I区全体では、土壇98カ所、ピット51カ所、井戸2カ所、炉址1カ所、便壺2カ所を数える。

I区の北西部・北部・南部をそれぞれI-A区・I-B区・I-C区と呼称して記述する。



北壁

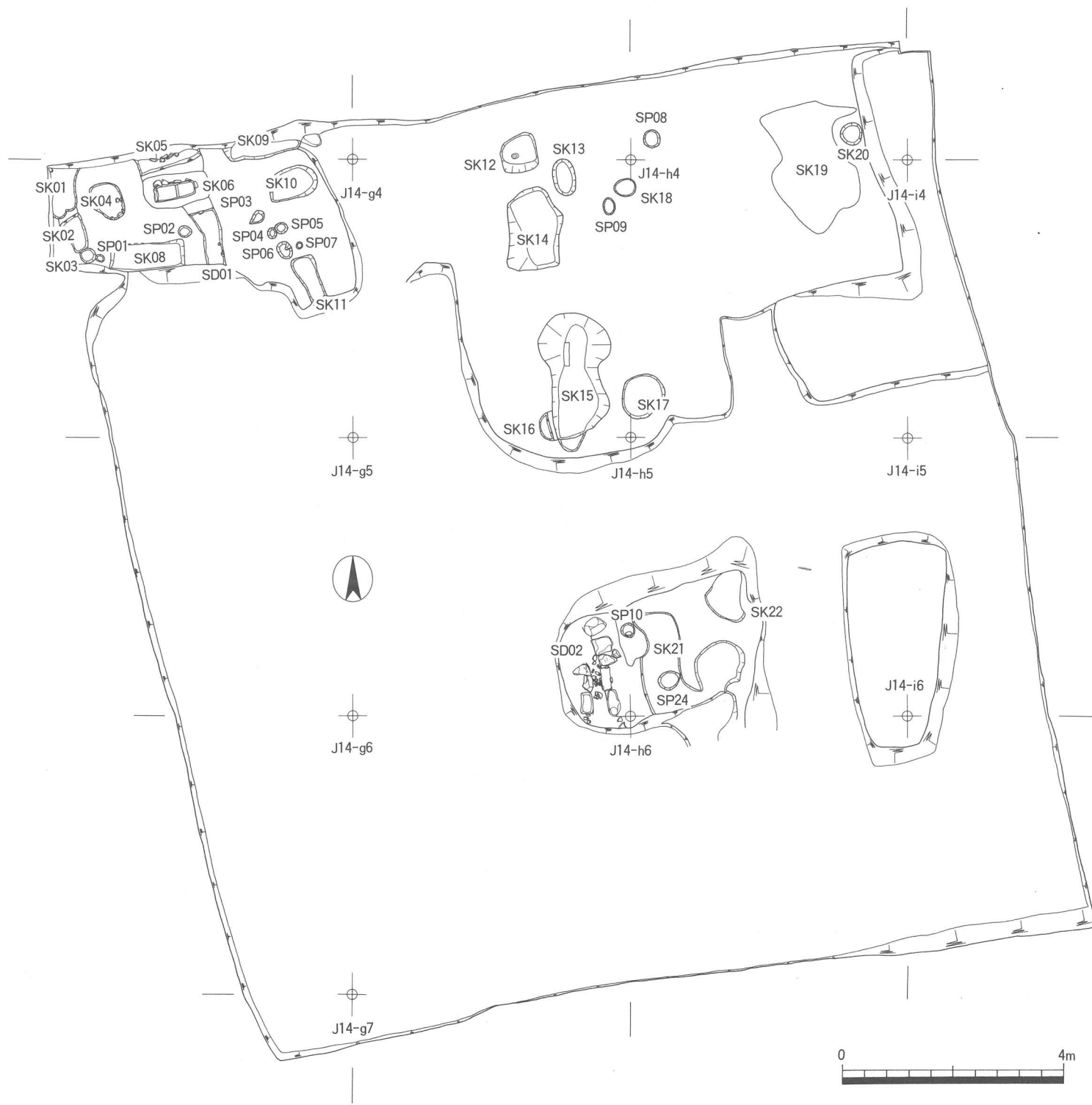
1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
2. にぶい黄橙色粘質土層 10Y R6/3
3. 褐色砂質土層 10Y R4/4
4. にぶい黄橙色粘質土層 10Y R6/4
5. にぶい黄褐色粘質土層 10Y R5/4
6. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
7. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
8. 褐色粘質土層 7・5 Y R4/6
9. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6
10. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R4/3

11. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
12. にぶい黄色砂質土層 2・5 Y6/3

西壁

1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
2. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8
3. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
4. にぶい黄色粘質土層 2・5 Y6/3
5. 暗褐色砂質土層 10Y R3/4
6. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/6
7. にぶい黄橙色砂質土層 10Y R6/4

第4図 I-A区北壁・西壁土層図



第3図 第45次調査I-A区遺構全体図

基本層序

遺跡周辺の基本土層は、伊丹礫層を基盤としてその上に明黄褐色粘質土層があり、ここまでが地山である。上面遺構は、鉄筋ビルの基礎によって削平されており、地山面である最下層のみが残存していた（第4図）。現地表面から約20cmで遺構面を確認した。遺構面は、北半と中央部のみが残存しており、その他は破壊されていた（第3図）。地山面はO.P.=16.800mを測る。

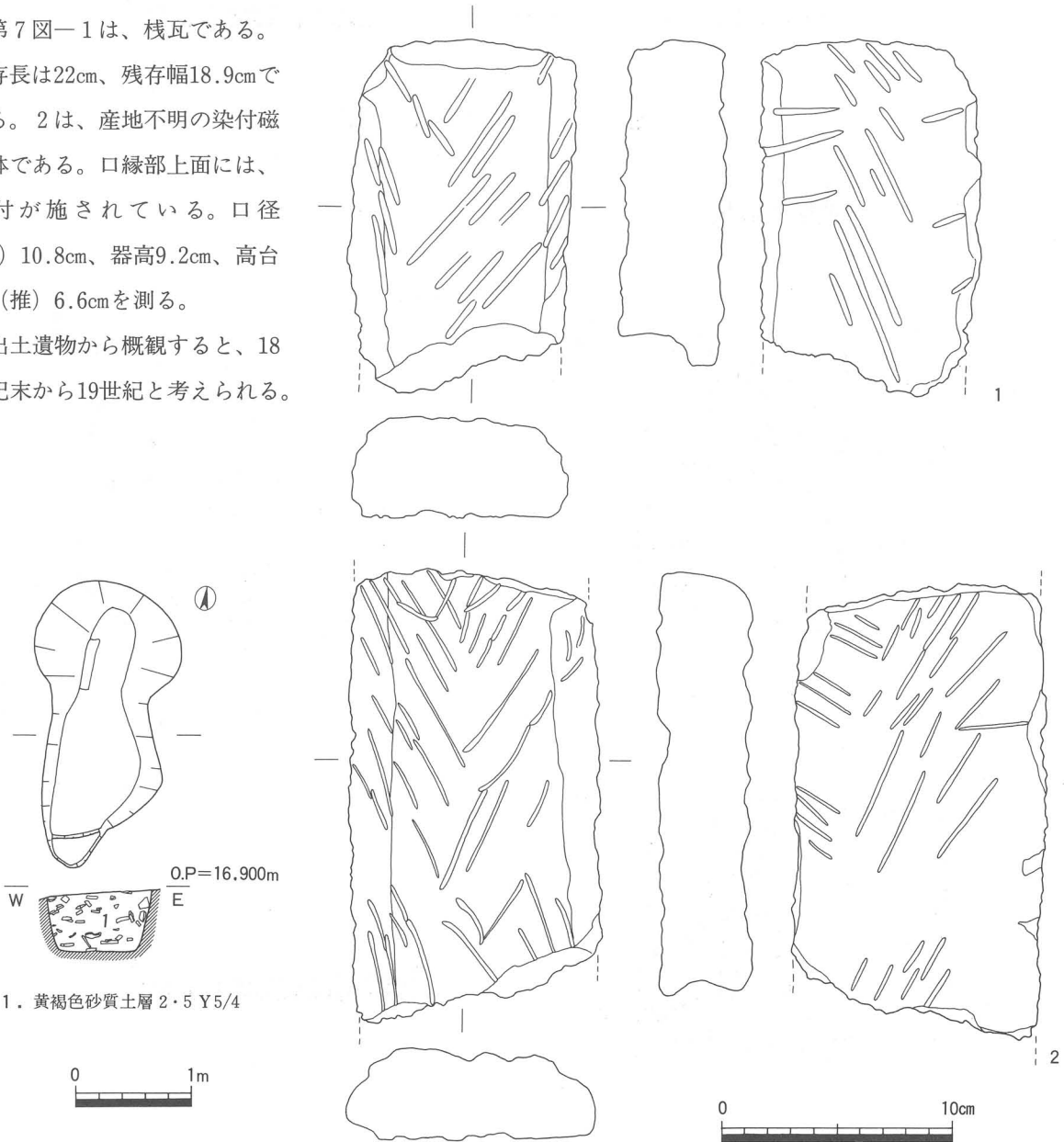
S X 01

調査区のほぼ中央に位置する。240cm×80cm、深さ50cmを測る土壌で、竈状遺構の可能性がある（第5図）。

第6図—1・2は、凝灰岩製の石材である。1の残存長は15.4cm、残存幅9.9cm、最大厚4.6cmを測る。2の残存長は19.7cm、残存幅11cm、最大厚4.2cmを測る。両方共、上下面に石のみ痕が明確に施されている。左側面の下部分には、焼けた痕跡があり、上面から右側面、下面半分にかけて、煤が付着している。竈の燃焼室部分にある灰落しに使われた石ではないかと考えられる。

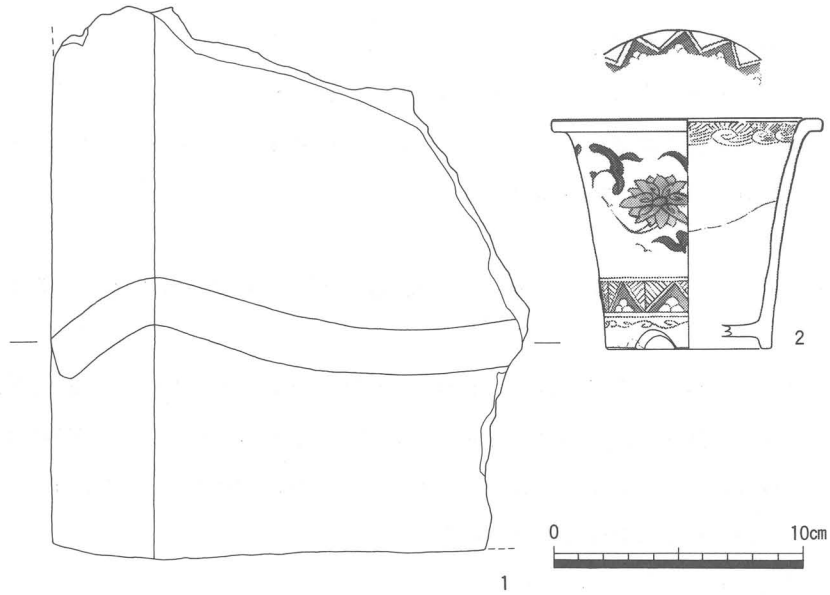
第7図—1は、棧瓦である。残存長は22cm、残存幅18.9cmである。2は、産地不明の染付磁器鉢である。口縁部上面には、染付が施されている。口径（推）10.8cm、器高9.2cm、高台径（推）6.6cmを測る。

出土遺物から概観すると、18世紀末から19世紀と考えられる。



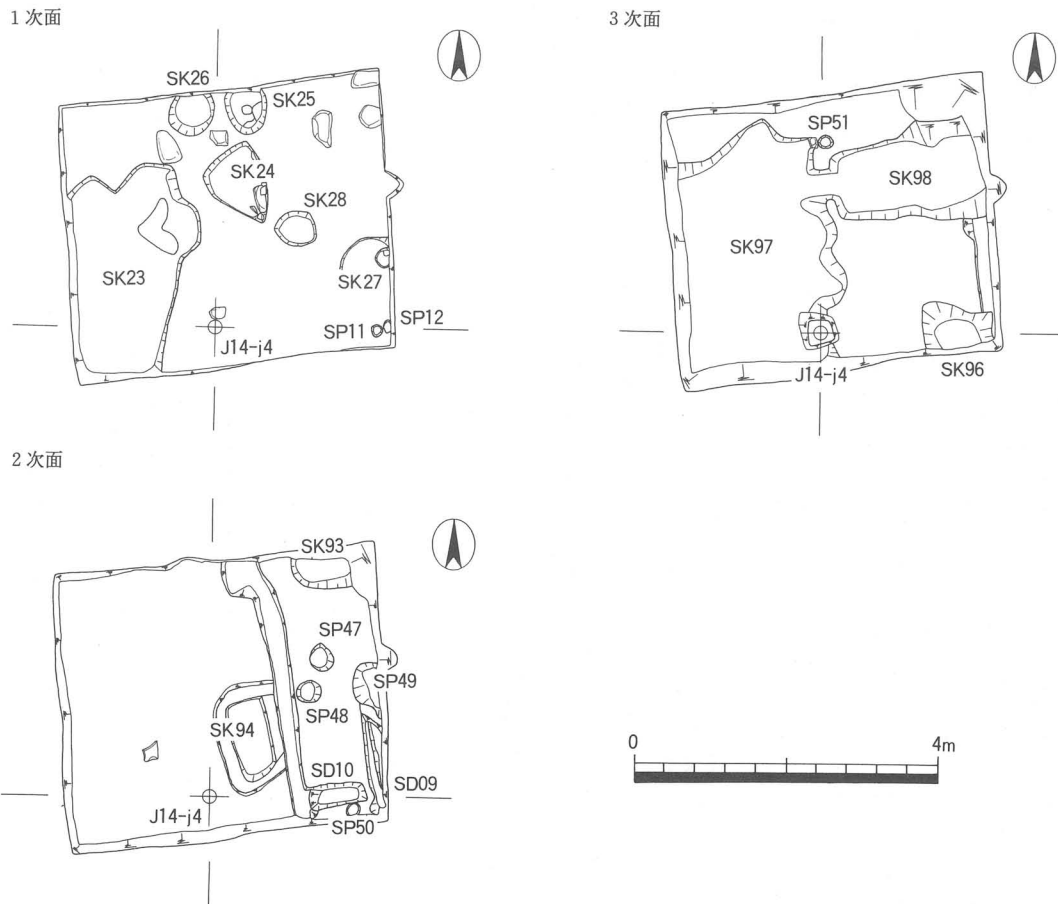
第5図 I-A区S X01遺構図

第6図 I-A区S X01出土遺物(1)

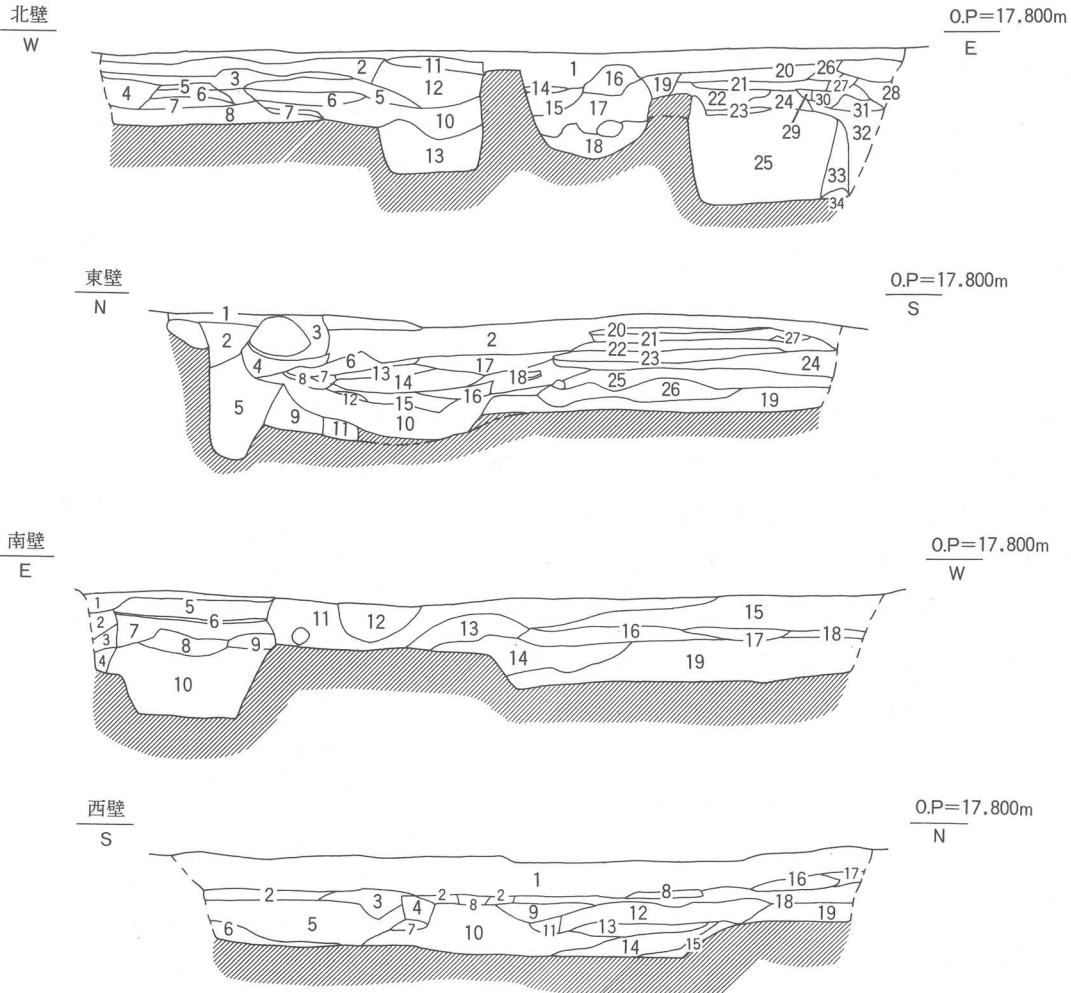


第7図 I-A区SX01出土遺物(2)

2. I-B区の遺構と遺物



第8図 第45次調査 I-B区遺構全体図



北壁土層

1. にぶい黄橙色土層10Y R6/4
2. にぶい黄褐色土層10Y R5/3
3. にぶい黄色粘質土層2・5 Y6/4
4. にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4
5. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
6. 黄褐色土層2・5 Y5/4
7. 黄褐色土層2・5 Y5/6
8. 褐色粘質土層10Y R4/6
9. 黄褐色土層10Y R5/6
10. 褐色砂質土層10Y R4/4
11. 暗褐色砂質土層10Y R3/4
12. 褐色礫土層10Y R4/4
13. 黄褐色土層10Y R5/6
14. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4
15. 黄褐色土層10Y R5/6
16. 黒褐色砂質土層2・5 Y3/2
17. 褐色砂質土層7・5 Y R4/3
18. 明褐色土層7・5 Y R5/6
19. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6
20. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/4
21. にぶい黄色砂質土層2・5 Y6/4
22. にぶい黄橙色砂質土層10Y R6/3
23. 明赤褐色砂質土層5 Y R5/8
24. にぶい黄褐色土層10Y R5/4
25. 暗褐色砂質土層10Y R3/4
26. 暗オリーブ褐色砂質土層2・5 Y3/3
27. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6

28. 褐色砂質土層7・5 Y R4/4
29. 暗褐色砂質土層7・5 Y R3/3
30. 黒色砂質土層7・5 Y R2/1
31. 褐色砂質土層10Y R4/4
32. 暗褐色土層10Y R3/4
33. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
34. 黒褐色土層7・5 Y R3/2

東壁土層

1. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6
2. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4
3. 浅黄色砂質土層2・5 Y7/4
4. にぶい黄色砂質土層2・5 Y6/4
5. 暗褐色土層10Y R3/4
6. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6
7. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/4
8. 褐色砂質土層10Y R4/4
9. オリーブ褐色土層2・5 Y4/4
10. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6
11. 暗褐色土層10Y R3/3
12. 暗オリーブ褐色土層2・5 Y3/3
13. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/3
14. 黄褐色砂質土層10Y R5/6
15. にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4
16. 褐色砂質土層7・5 Y R4/3
17. にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/3
18. 褐色砂質土層10Y R4/6

19. 黄褐色土層10Y R5/6
20. 黄灰色砂質土層2・5 Y4/1
21. 明褐色砂質土層7・5 Y R5/8
22. 灰オリーブ色砂質土層5 Y5/3
23. にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3
24. 褐色土層10Y R4/6
25. 暗褐色砂質土層7・5 Y R3/4
26. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6
27. 灰黄色砂質土層2・5 Y6/2

南壁土層

1. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4
2. 褐色土層10Y R4/6
3. 暗褐色砂質土層7・5 Y R3/4
4. 黄褐色土層10Y R5/6
5. 黄褐色砂質土層10Y R5/8
6. 黒褐色土層2・5 Y3/1
7. 明黄褐色砂質土層10Y R6/6
8. 褐色砂質土層10Y R4/4
9. 暗褐色砂質土層10Y R3/3
10. 黄褐色砂質土層10Y R5/8
11. 明褐色土層7・5 Y R5/8
12. 明黄褐色砂質土層10Y R6/6
13. にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4
14. 黄褐色砂質土層10Y R5/8
15. 暗褐色砂質土層10Y R3/4

西壁土層

1. 暗褐色砂質土層10Y R3/4
2. 灰色粘土層10Y5/1
3. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4
4. 黒褐色粘質土層10Y R3/1
5. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
6. 浅黄色砂質土層2・5 Y7/4
7. 明黄褐色粘土層2・5 Y6/8
8. 暗赤褐色粘質土層2・5 Y R3/1
9. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
10. にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3
11. 明黄褐色粘土層10Y R6/8
12. にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4
13. オリーブ褐色粘質土層10Y R4/6
14. 褐色粘質土層10Y R4/6
15. にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/3
16. 褐色粘質土層10Y R4/4
17. にぶい黄色粘質土層2・5 Y6/4
18. にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4
19. 褐色粘質土層10Y R5/6



第9図 I-B区北壁・東壁・南壁・西壁土層図

基本層序

現地表面から約10cmで1次遺構面を確認した。それより約5cm下方で2次遺構面を部分的に確認した。さらに約10cm下方で3次遺構面を確認した(第9図)。大きく3時期の遺構面が検出され、2次面では、ひろい範囲で土間を検出した(第8図)。地山面は、O.P.=17.600mを測る。

SK23

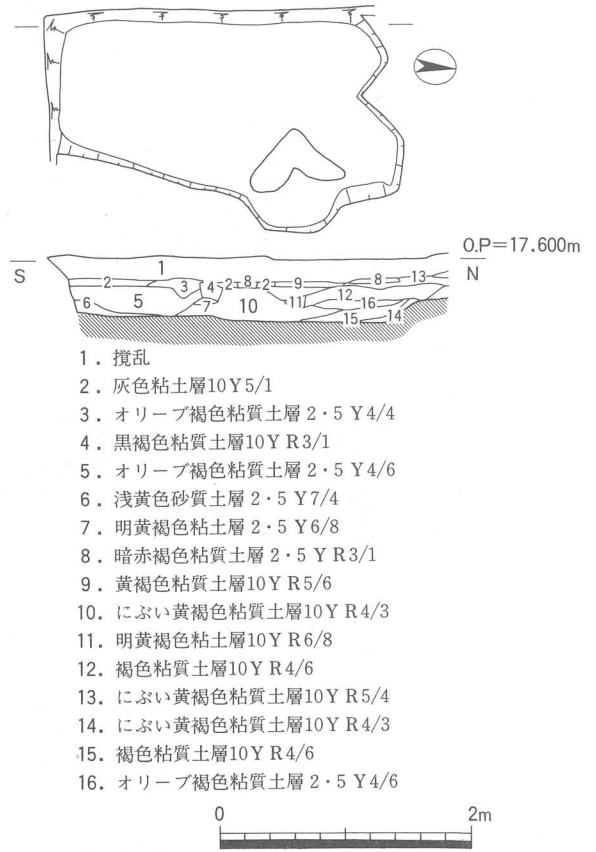
調査区中央部に位置する。270×160cm以上、深さ15cmを測る土壌である(第10図)。2次遺構面より掘り込んでいる。

第11図-1・2は、土師質土器皿である。1は、口径(推)6cm、器高1.1cmを測る。口縁部は直線的に延び、外面は指頭圧調整、内面口縁部は横ナデ調整、内面底部は一定方向ナデ調整である。口縁部に灯芯痕を残す。2は、口径(推)10.4cm、器高1.4cmを測る。口縁部は内弯し、内外面共横ナデ調整である。3は、京焼風陶器皿である。高台内に判読不能の墨書がみられる。4は、唐津系陶器三島手鉢である。5は、肥前磁器染付皿である。

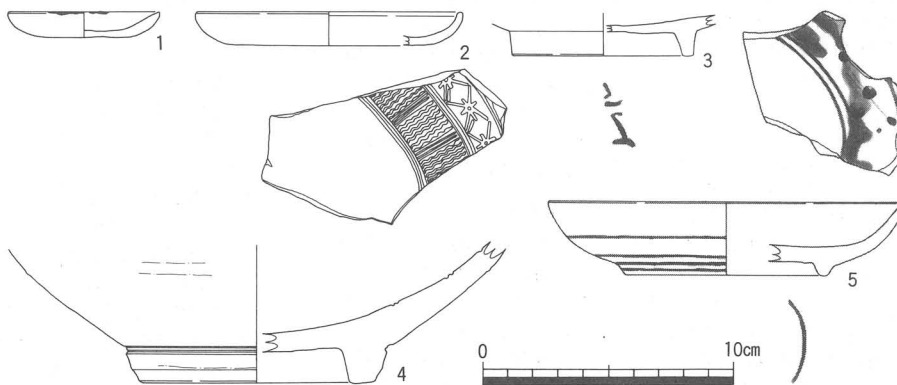
出土遺物から概観すると、18世紀前半～後半の時期と考えられる。

SK26

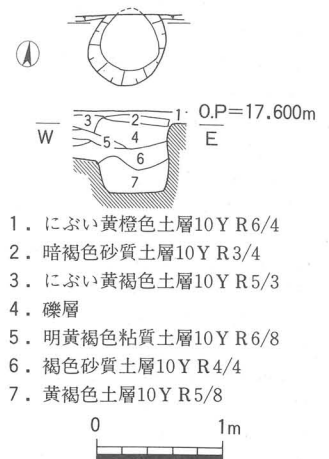
調査区北端に位置する。直径60cm、深さ27cmを測る土壌である(第12図)。3次遺構面より掘り込んでいる。



第10図 I-B区SK23遺構図



第11図 I-B区SK23出土遺物

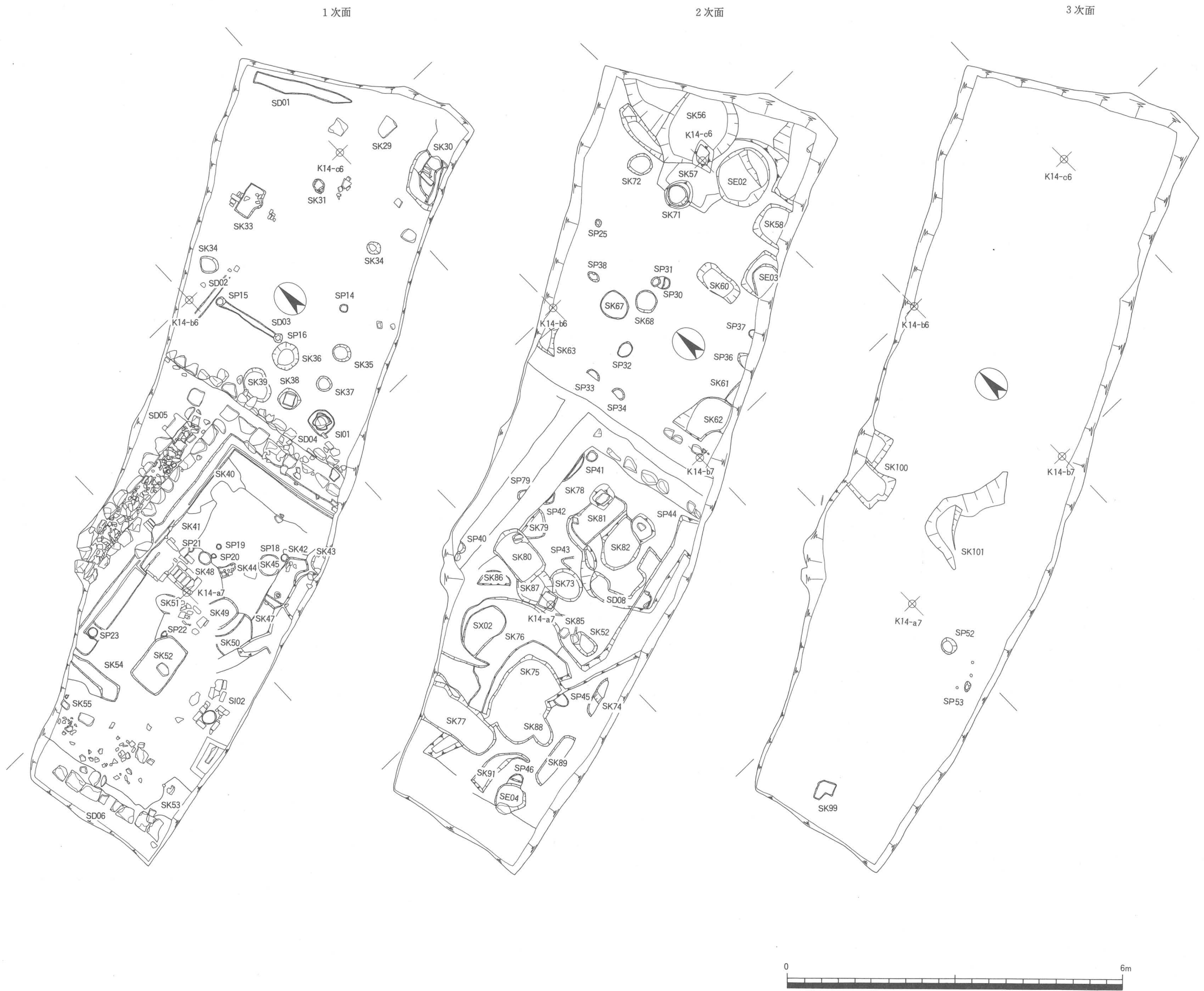


第12図 I-B区SK26遺構図

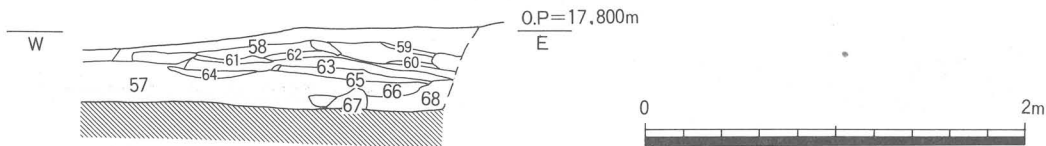
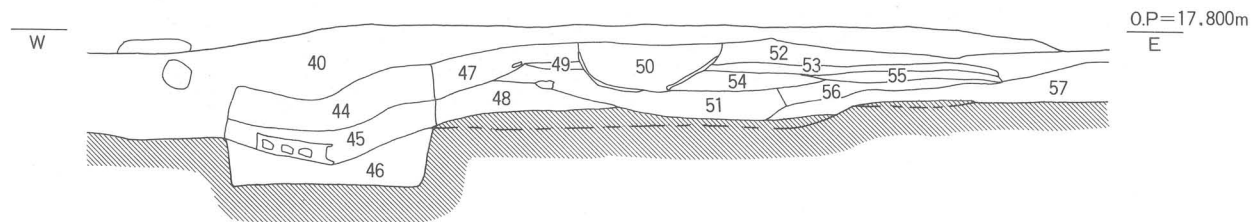
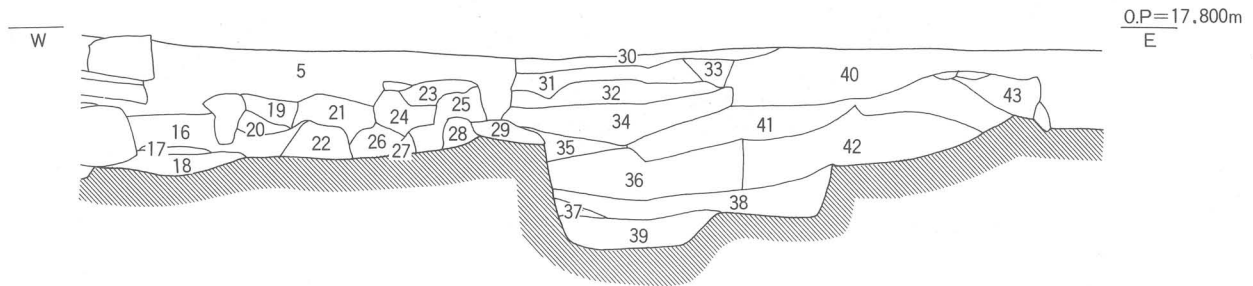
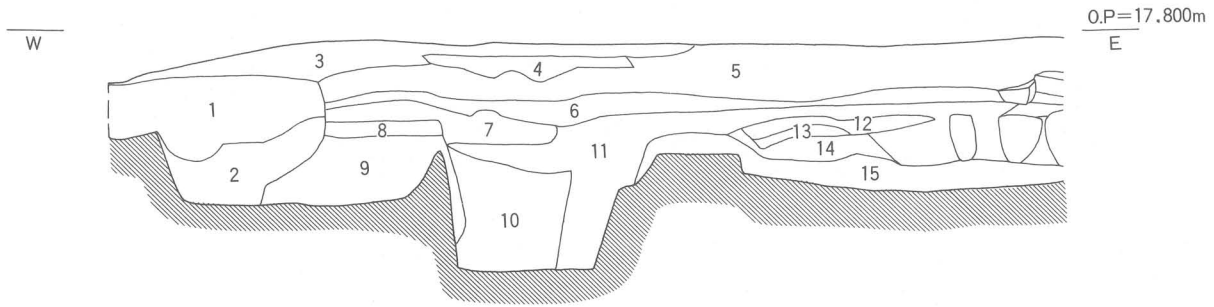
3. I-C区の遺構と遺物

基本層序

現地表面から約10cmで1次遺構面を確認した。それより約10cm下で2次遺構面を確認した。さらに、約5cm下で地山直接掘り込みの3次遺構面を確認した(第14図)。1次面では、遺構が西端に、2次面では、東端に偏在している(第13図)。地山面は、O.P.=17.200mを測る。

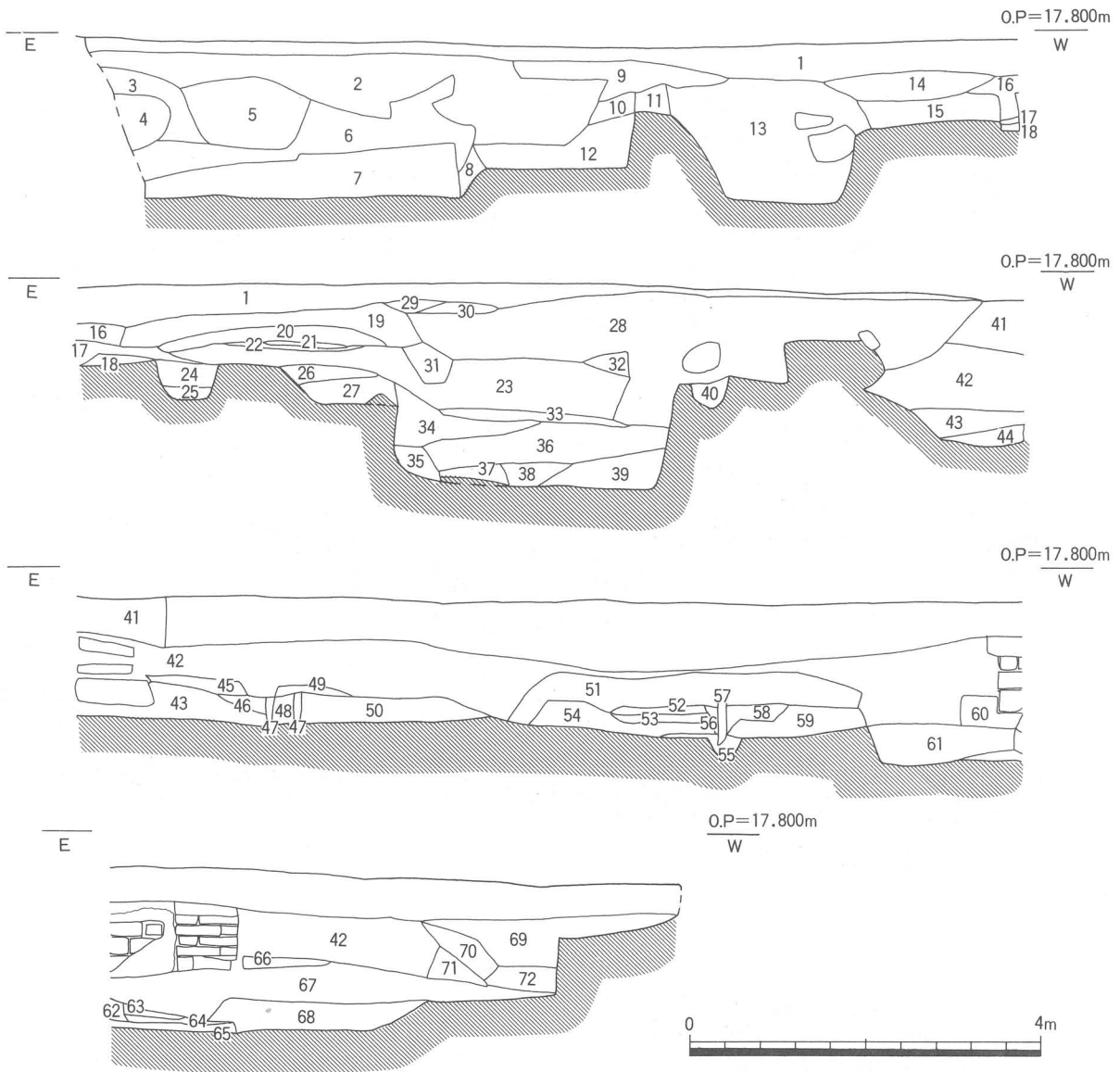


第13図 第45次調査 I-C区遺構全体図



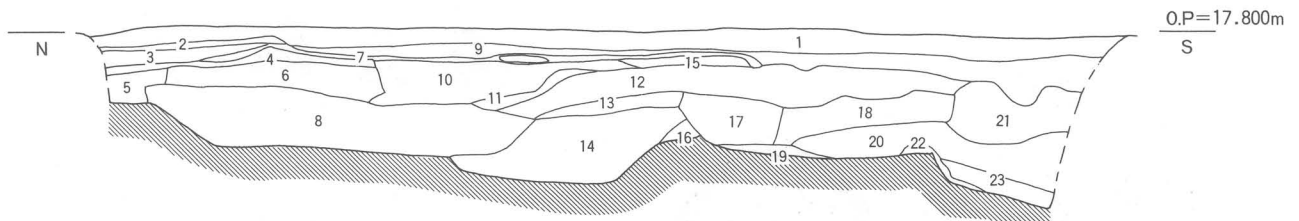
- | | | |
|-------------------------|-------------------------|-------------------------|
| 1. 攪乱 | 23. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 | 46. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 |
| 2. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/1 | 24. 黄褐色粘質土層 10Y R5/6 | 47. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y4/2 |
| 3. 攪乱 | 25. 暗褐色砂質土層 10Y R3/4 | 48. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3 |
| 4. 明黄褐色土層 10Y R6/6 | 26. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 | 49. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8 |
| 5. 黒褐色砂質土層 10Y R2/3 | 27. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8 | 50. 攪乱 |
| 6. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 | 28. 暗褐色砂質土層 10Y R3/4 | 51. 褐色砂質土層 10Y R4/4 |
| 7. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6 | 29. 黒褐色粘質土層 10Y R3/2 | 52. 暗オリブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 |
| 8. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 | 30. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y4/2 | 53. 黒色土層 2・5 Y2/1 |
| 9. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 | 31. 黄褐色砂質土層 10Y R5/8 | 54. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 |
| 10. 貝塚 | 32. 灰黄褐色粘質土層 10Y R4/2 | 55. オリブ色粘質土層 5 Y5/6 |
| 11. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 | 33. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 | 56. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 |
| 12. 橙色砂質土層 7・5 YR6/8 | 34. 褐色砂質土層 10Y R4/6 | 57. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R4/3 |
| 13. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R5/4 | 35. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 | 58. 黄褐色土層 2・5 Y5/3 |
| 14. 明赤褐色砂質土層 5 YR5/6 | 36. にぶい黄褐色粘質土層 10Y R4/3 | 59. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2 |
| 15. 明褐色砂質土層 7・5 YR5/8 | 37. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 | 60. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 |
| 16. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2 | 38. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8 | 61. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 |
| 17. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6 | 39. 褐色粘質土層 10Y R4/6 | 62. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R4/3 |
| 18. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6 | 40. 攪乱 | 63. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y4/2 |
| 19. 黒色砂質土層 2・5 Y2/1 | 41. にぶい黄褐色粘質土層 10Y R4/3 | 64. 明黄褐色砂層 2・5 Y6/6 |
| 20. 暗オリブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 | 42. 黒色瓦層 2・5 Y2/1 | 65. 暗オリブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 |
| 21. 黄褐色砂質土層 10Y R5/8 | 43. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 | 66. オリブ褐色土層 2・5 Y4/4 |
| 22. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 | 44. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 | 67. 黒褐色土層 2・5 Y3/1 |
| | 45. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 | 68. 黄褐色粘質土層 10Y R5/6 |

第14図 I-C区北壁土層図

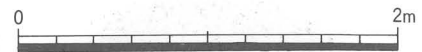


- | | | |
|-------------------------|-------------------------|------------------------|
| 1. 灰白色砂質土層 5 Y7/1 | 25. 黒褐色粘質土層 10Y R3/1 | 49. にぶい黄褐色砂層 10Y R5/3 |
| 2. 暗褐色土層 10Y R3/4 | 26. 暗オリブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 | 50. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8 |
| 3. にぶい黄色砂質土層 2・5 Y6/3 | 27. 黒褐色礫層 2・5 Y3/2 | 51. 黒褐色土層 10Y R3/1 |
| 4. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 | 28. にぶい黄褐色土層 10Y R5/4 | 52. 黒褐色粘土層 7・5 Y R3/1 |
| 5. 暗褐色砂質土層 10Y R3/3 | 29. 灰褐色砂質土層 7・5 Y R4/2 | 53. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 |
| 6. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 | 30. 黄橙色砂質土層 10Y R7/8 | 54. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/8 |
| 7. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 | 31. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8 | 55. オリブ灰色粘土層 10Y4/2 |
| 8. 暗褐色粘質土層 10Y R5/8 | 32. にぶい黄褐色粘質土層 10Y R4/3 | 56. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 |
| 9. 暗褐色砂質土層 10Y R3/4 | 33. 褐色粘質土層 7・5 Y R4/6 | 57. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/1 |
| 10. 黒褐色砂質土層 10Y R3/2 | 34. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2 | 58. 黒色砂質土層 10Y R1.7/1 |
| 11. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2 | 35. 黄褐色粘土層 2・5 Y5/6 | 59. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/6 |
| 12. 暗オリブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 | 36. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/2 | 60. 黒色土層 10Y R2/1 |
| 13. 褐色砂質土層 10Y R4/4 | 37. 黒色粘土層 2・5 Y2/1 | 61. 灰黄褐色粘質土層 10Y R4/2 |
| 14. 褐色砂質土層 10Y R4/6 | 38. オリブ褐色粘土層 2・5 Y4/4 | 62. 黄灰色粘質土層 2・5 Y5/4 |
| 15. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R4/3 | 39. 暗緑灰色粘土層 10G Y3/1 | 63. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8 |
| 16. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6 | 40. 褐色粘質土層 10Y R4/6 | 64. 黄灰色粘質土層 2・5 Y4/1 |
| 17. にぶい黄褐色土層 10Y R4/3 | 41. 灰黄褐色砂質土層 10Y R5/2 | 65. 黄褐色粘質土層 10Y R5/6 |
| 18. 黄褐色粘質土層 10Y R5/6 | 42. オリブ褐色砂礫層 2・5 Y4/4 | 66. 黒褐色粘土層 2・5 Y3/1 |
| 19. 暗オリブ褐色土層 2・5 Y3/3 | 43. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8 | 67. 暗灰黄色砂礫層 2・5 Y4/2 |
| 20. 褐色砂質土層 10Y R4/4 | 44. オリブ灰色粘質土層 10Y4/2 | 68. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8 |
| 21. 黒褐色土層 10Y R2/3 | 45. 黄灰色砂層 2・5 Y4/1 | 69. 黄褐色砂層 2・5 Y5/6 |
| 22. にぶい黄橙色砂質土層 10Y R6/3 | 46. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y4/2 | 70. 暗褐色土層 10Y R3/3 |
| 23. 褐色砂質土層 10Y R4/6 | 47. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 | 71. 黒褐色粘土層 2・5 Y3/1 |
| 24. 暗褐色砂質土層 10Y R3/3 | 48. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8 | 72. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/8 |

第15図 I-C区南壁土層図



- | | | |
|-------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 1. 灰白色砂質土層 5 Y7/1 | 9. にぶい黄色砂質土層 10 Y R5/4 | 17. 黄褐色砂質土層 10 Y R5/6 |
| 2. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2 | 10. 浅黄色砂質土層 2・5 Y7/4 | 18. 褐色砂質土層 10 Y R4/4 |
| 3. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 | 11. オリーブ黄色砂質土層 5 Y6/4 | 19. 黄褐色砂質土層 10 Y R5/8 |
| 4. にぶい黄褐色砂質土層 10 Y R4/3 | 12. にぶい黄橙色砂質土層 10 Y R6/3 | 20. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 |
| 5. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6 | 13. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 | 21. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 |
| 6. にぶい黄褐色砂質土層 10 Y R5/4 | 14. 褐色砂質土層 10 Y R4/6 | 22. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 |
| 7. 灰色砂質土層 10 Y5/1 | 15. にぶい黄色砂質土層 2・5 Y6/4 | 23. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3 |
| 8. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 | 16. 黄褐色砂質土層 10 Y R5/6 | |



第16図 I-C区東壁土層図

SE04

調査区東端に位置する。直径70cm、深さ420cm以上を測る素掘井戸である（第17図）。2次面の遺構である。掘形上面に花崗岩の配石をし、その反対側に柱穴をもつ。井戸上半は、弯曲してオーバーハングしている。湧水点は、O.P.=16.800m-400cmである。

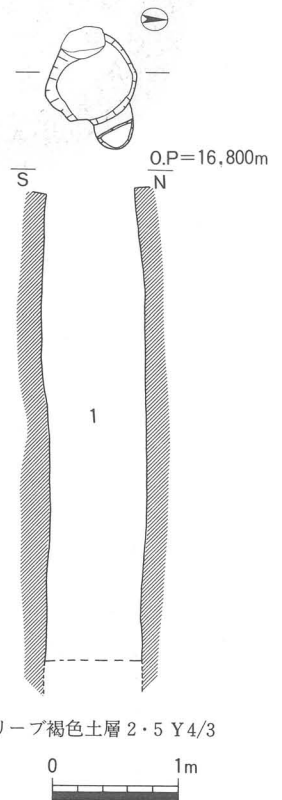
第18図1～3は、肥前磁器である。1は、一重網目文碗である。2は、染付徳利である。内面は無釉である。3は、青磁皿である。見込みには、蛇ノ目釉ハギした上に円形の重ね焼痕がみられる。高台部は露胎で、畳付部分に砂が付着している。4は、土人形の鶏である。合わせ型による成形である。合わせ目は、ヘラケズリ調整、表面には、ドロキラが残存する。5～8は、屋瓦である。5は、飾瓦である。瓦当部の直径8.4cm、全長（推）7.5cm、菊花文である。6は、三ツ巴文軒丸瓦である。瓦当部の直径14.8cm、連珠数16個を数える。7は、平瓦である。全長27.3cm、狭端幅22.6cm、広端幅（推）24.6cmである。8は、丸瓦である。全長26.6cm、幅13.8cm、玉縁部長3.6cmを測る。丸瓦部凹面には、コビキB（鉄線引き）痕がみられる（参考文献8）。

出土遺物から概観すると、肥前磁器の1・2は、大橋康二氏の編年III期（17世紀後半）、3はIV期（1690～1780年）に属することにより（参考文献1）、17世紀後半～18世紀前半までの時期と考えられる。

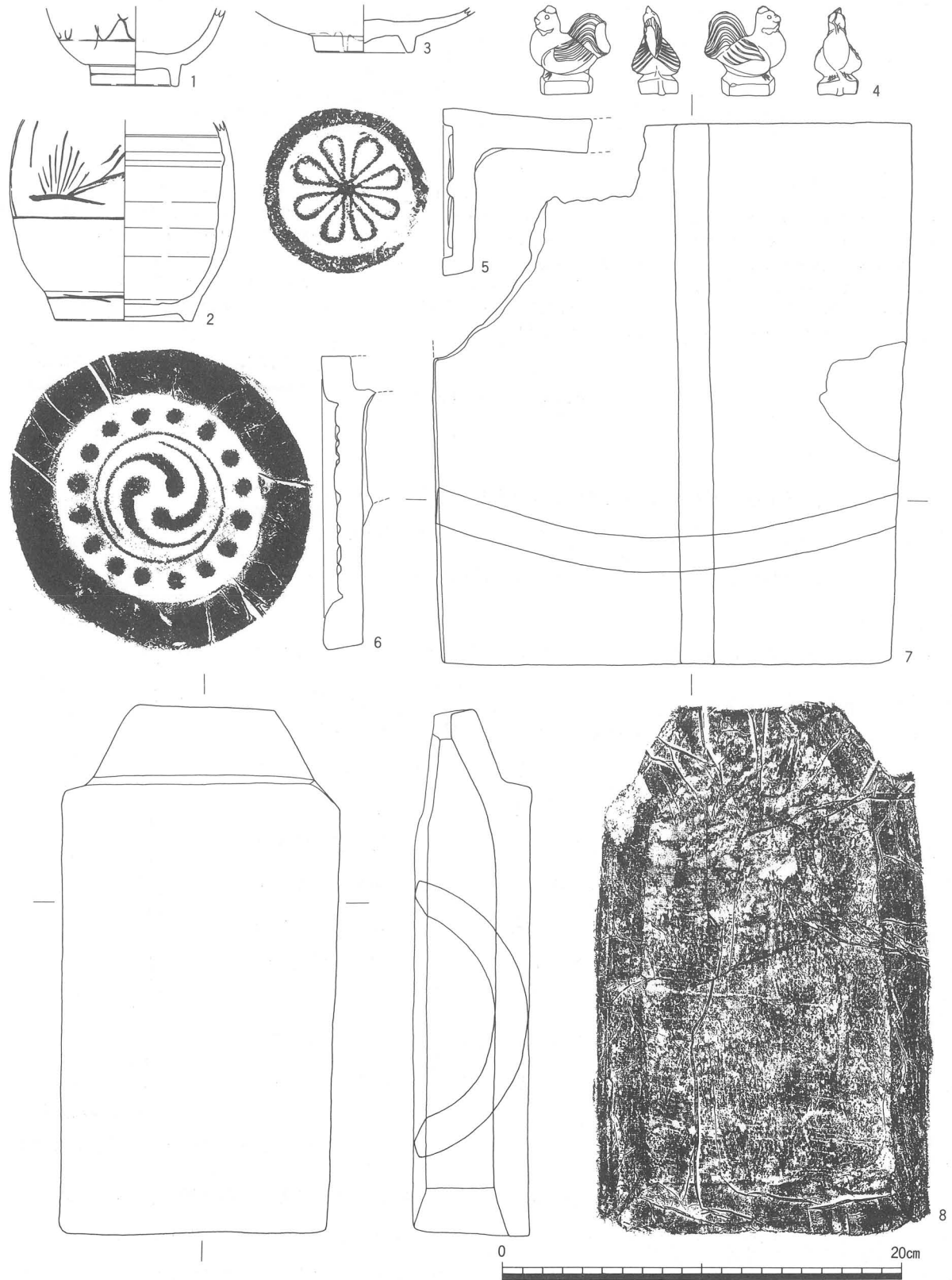
SE03

調査区南東付近に位置する。直径100cm、深さ450cm以上を測る素掘井戸である（第19図）。2次面の遺構である。井戸下半は、かなり弯曲してオーバーハングしている。湧水点は、O.P.=17.800m-420cmである。

第20図1～5・8は、肥前磁器である。1は、草花文碗である。口径9.6cm、器高5.6cm、高台径4cmを測り、完形品である。2は、染付碗である。高台内に銘款がみられる。口径10cm、器高4.9cm、高台径4.2cmを測る。3は、陶胎染付鉢である。見込みには蛇ノ目釉ハギし、その上に砂が付着している。4は、仏飯具である。脚底部は露胎である。5は、火入れである。口径9.8cm、器高5.4cm、高台径4.6cmを測る。外面に唐草文様がみられる。内面下半及び高台畳付は露胎である。8は、青磁端反り碗である。内外面に貫入がみら



第17図 I-C区SE04遺構図



第18図 I-C区SE04出土遺物

れる。6は、石製硯である。オリーブ灰色2.5GY6/1を呈する粘板岩製の石材を用いる。全長11.1cm、幅5cm、高さ1.5cmを測る。滋賀県高島石ではないかと考えられる。7は、京焼風陶器碗である。口径8.6cm、器高5.8cm、高台径4.3cmを測る。外面には山水文、高台は露胎である。9は、刷毛目唐津大皿である。口径22.6

cm、器高4.7cm、高台径9.4cmを測る。見込みに陶石を砕いた目痕が残っている。一部に鉄釉を掛けている（網かけ部分）。10は、土師質土器十能である。把手長5.8cm、把手幅2.7cm、把手厚み2cmを測る。上面及び側面はナデ調整、下面は未調整である。11は、瓦質土器火鉢である。頸部に菱形のスタンプ文、体部下半に刺突文を施す。獅子頭は型抜き後、貼り付けしている。

第21図一1は、堺焼播鉢である。口径（推）42cm、器高19.6cm、高台径21cmを測る。高台を伴う播鉢で、やや粗い胎土を用い、橙色7.5YR 6/6を呈する。焼成は不良で、体部内面の数条の播目が底部内面にまで及んでいる。見込みの播目は、交差している。高台部内面に焼台痕がみられる。白神典之氏の編年によると（参考文献5）、I類に属する。2は、丹波焼甕である。口径（推）38.6cmを測る。口縁部上面には、3条の沈線を施す。頸部外面には、刻み目を巡し、頸部内面に指頭圧痕が残る。内外面とも、塗り土を施す。今回の実測図には載せていないが、備前焼の小型播鉢も出土している。

出土遺物から概観すると、18世紀前半の時期と考えられる。

SK74

調査区南壁西側に位置する。100cm×25cm以上、深さ15cmを測る土壌である（第22図）。1次面の遺構である。

SK77

調査区北壁西側に位置する。70cm×190cm以上、深さ60cmを測る方形土壌である（第23図）。2次面の遺構である。埋土の状況から見て、木枠が入っていた可能性がある。蛎殻が西半分に充填されていた。

SK60

調査区東側に位置する。SK60はSE03の北西に位置する。110cm×50cm、深さ45cmを測る方形土壌である。（第24図）。2次面の遺構である。

第25図一1は、肥前磁器染付段重である。2は、棟端飾瓦である。奥行15.8cm、幅（推）44.2cm、高さ32.2cmを測る。手張り成形、主文様として房で結ばれた巾着を表現している。

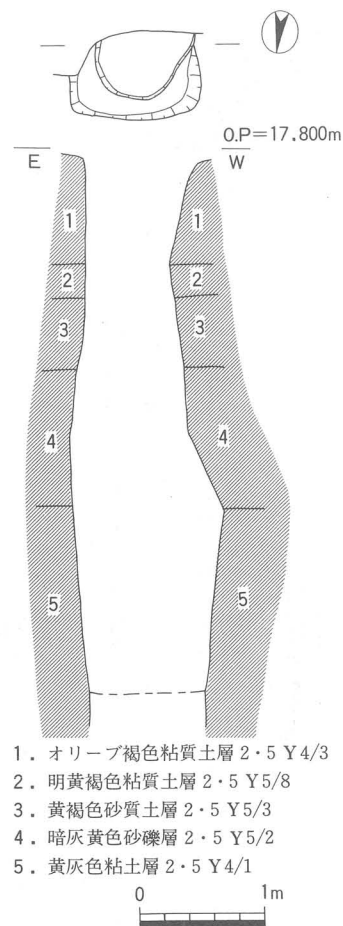
出土遺物から概観すると、18世紀後半から19世紀前半の時期と考えられる。

SD04・05

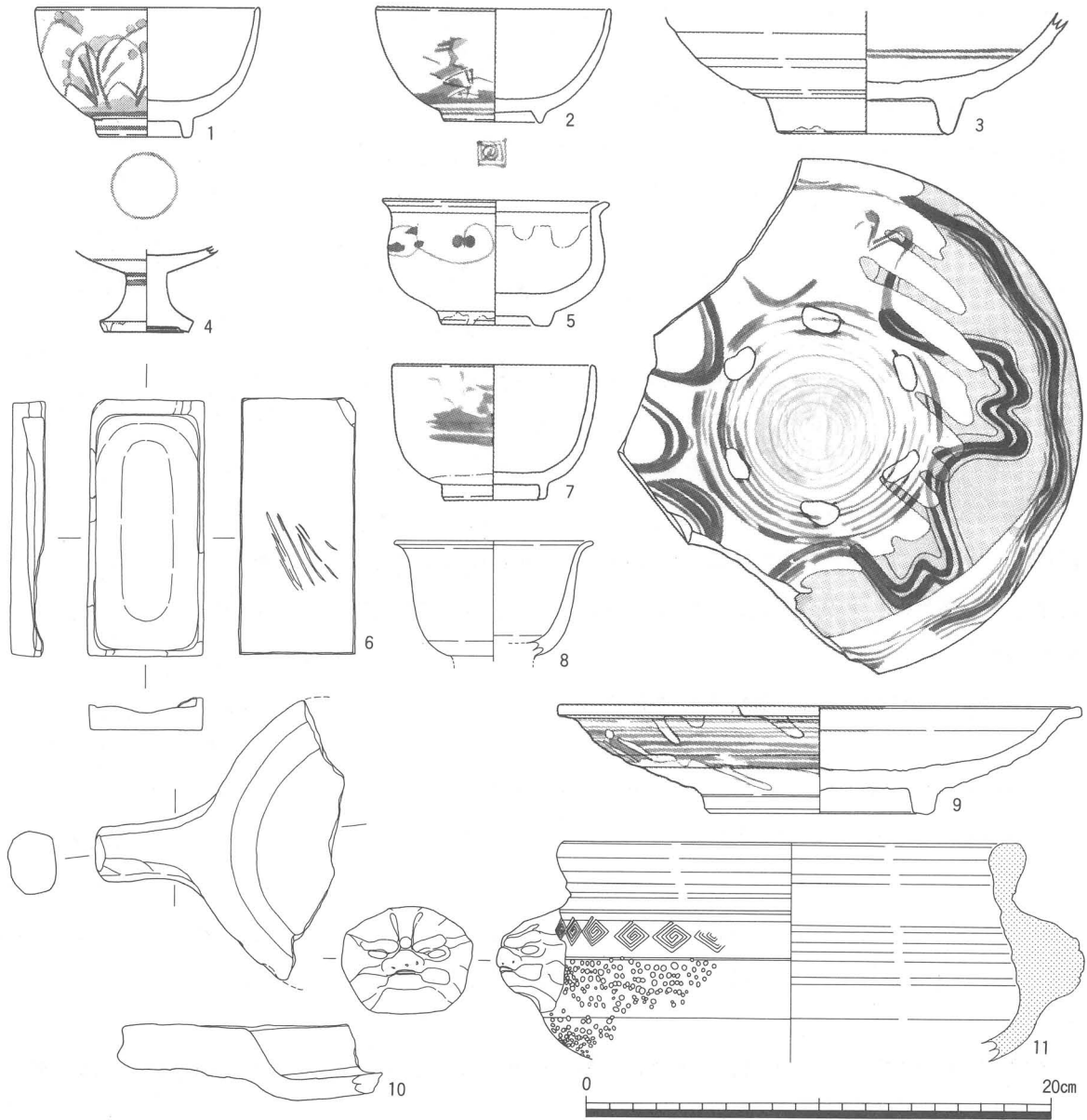
調査区のほぼ中央に位置する。幅約35cm、深さ15cmの花崗岩石組溝で、北・東面を圍繞している（第26図）。1次面の遺構である。東西10m・南北5m以上の方形区画を区切っている。底部に3cmほど漆喰を塗っている。

第27図一1は、銅製煙管の吸口である。吸口径0.9cm、吸口長（推）4.4cmを測る。2は、瀬戸・美濃焼蓋である。口径10.9cm、器高3.1cm、つまみ径3.9cmを測る。外面には、呉須による渦巻文と、鉄釉の草花文様を施す。口縁部に口錆がみられる。内外面に貫入がみられる。

第28図は、「寛永通寶」の銭貨である。直径2.3cm、厚み0.1cmを測る。「寶」字はハ「寶」である。これらは、19世紀前半頃の遺物である。この他煉瓦なども出土しており、19世紀前半を上限として最終的に戦前まで機能していた溝である。



第19図 I-C区SE03遺構図



第20図 I-C区SE03出土遺物(1)

SD06

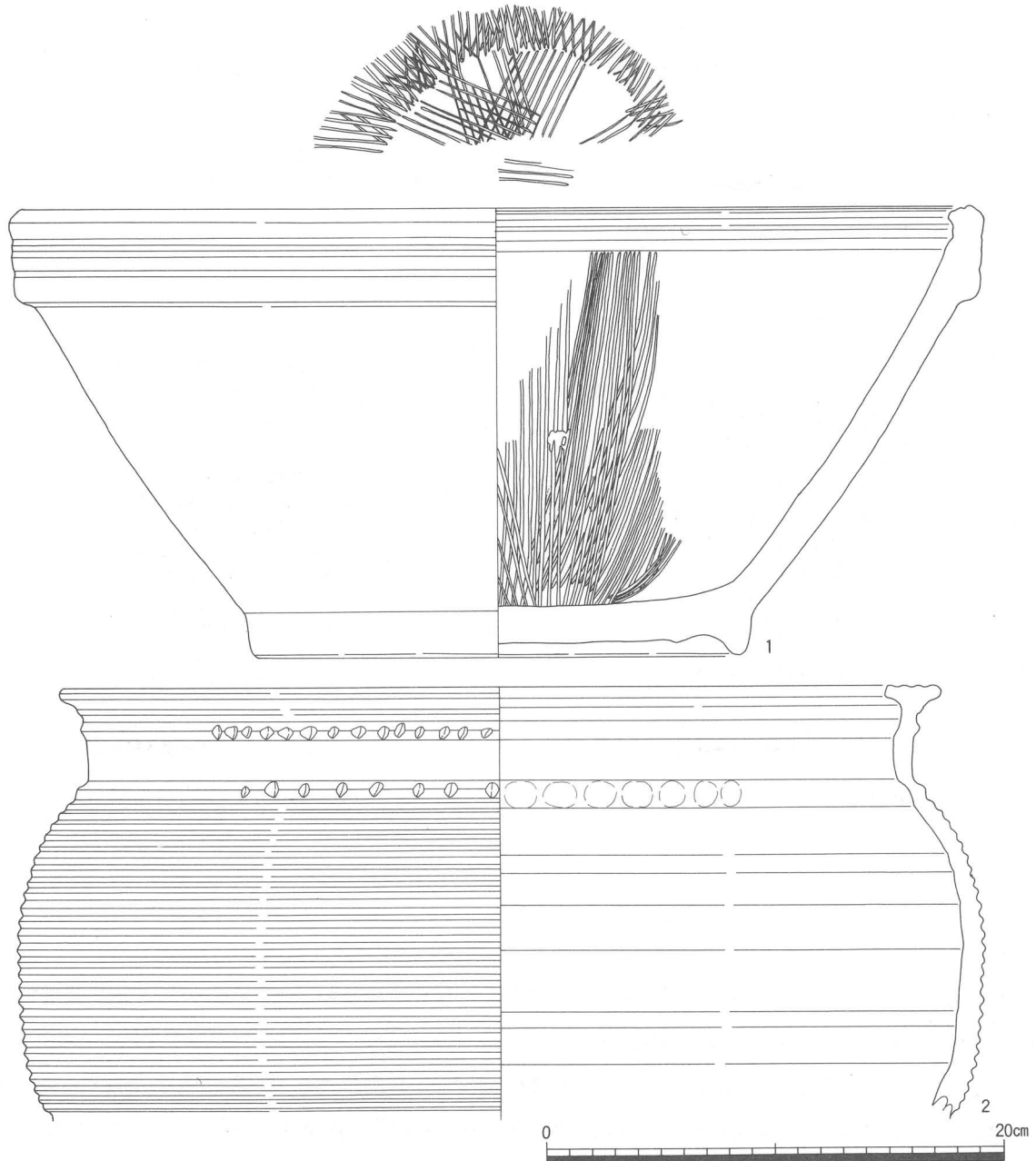
調査区西端に位置する。SD04・05とともに屋敷地を圍繞する花崗岩石組溝である（第29図）。1次面の遺構である。

SD02・03

調査区中央やや東側に位置する。SD02は、長さ120cm、幅15cm、深さ7cmを測る。SD06に直交することから、流れ込む排水溝と考えられる。SD03は、長さ140cm、幅12cm、深さ4cmを測る。両端に直径約20cm、深さ10cmのピットをもつ。SD02と関連する可能性がある（第30図）。いずれも、1次面の遺構である。

SK33

調査区東側に位置する。SK33は、70cm×40cm、深さ15cmを測る方形土塙である（第31図）。1次面の遺構である。周囲を煉瓦で囲まれており、SD02と関連する可能性がある。



第21図 I-C区SE03出土遺物(2)

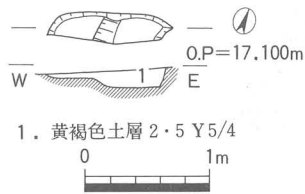
S I 01

調査区南側SD04沿いに位置する。発掘区中央部より径60cm、深さ20cmを測る掘形をもつ埋甕遺構を検出した(第32図右)。1次面の遺構である。

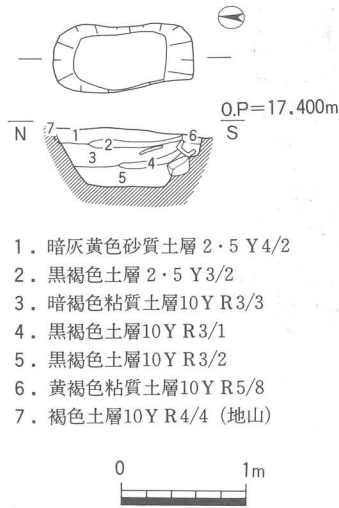
第33図は、大谷焼鉢を用いた便槽である。外面底部は未調整で、判読不能の墨書がみられる。外面体部は無釉である。川口宏海氏の分類によると(参考文献3)、3型式に属すると考えられる。内面に白色の付着物がある。付着物の成分は不明である。明治時代後半から大正時代以降の時期と考えられる。

S K 38

調査区南側に位置する。S I 01に隣接して、径50cm、深さ25cmを測る掘形をもつ埋桶遺構を検出した。桶は底部のみが残存しており、その上に平瓦を置いた状態で検出した(第32図左)。1次面の遺構である。埋める際に、2層に分けている。

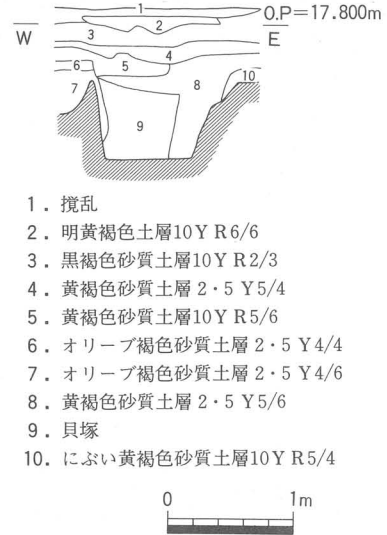
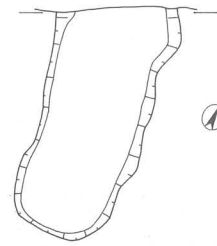


第22図 I-C区SK74遺構図



第24図 I-C区SK60遺構図

1. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y4/2
2. 黒褐色土層 2・5 Y3/2
3. 暗褐色粘質土層 10Y R3/3
4. 黒褐色土層 10Y R3/1
5. 黒褐色土層 10Y R3/2
6. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8
7. 褐色土層 10Y R4/4 (地山)



第23図 I-C区SK77遺構図

1. 攪乱
2. 明黄褐色土層 10Y R6/6
3. 黒褐色砂質土層 10Y R2/3
4. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
5. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6
6. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
7. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
8. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
9. 貝塚
10. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R5/4

S I 02

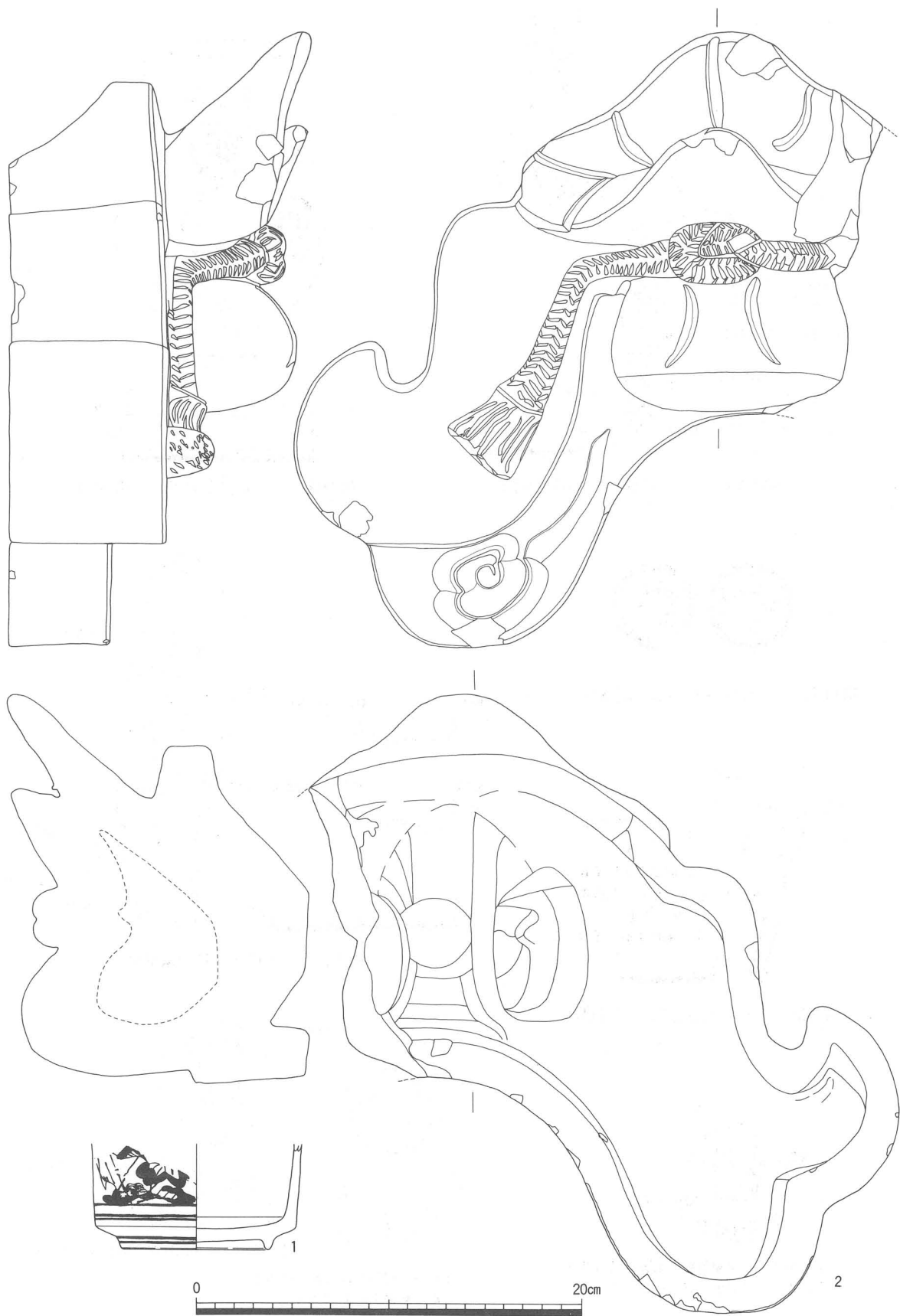
調査区南側に位置する。S I 02は、周囲を煉瓦で囲んだ埋甕遺構である（第34図）。1次面の遺構である。煉瓦の配置から見て便所遺構である可能性が高い。

第35図-1は、丹波焼甕を用いた便槽である。口径40.6cm、器高43.2cm、底径23.2cmを測る。口縁部上面に2条の沈線を巡す。また、肩部には、不遊環を貼り付ける。外面体部最下部は回転ヘラズリ調整、底部は未調整である。内面に、白色の付着物があり、付着物の成分は不明である。

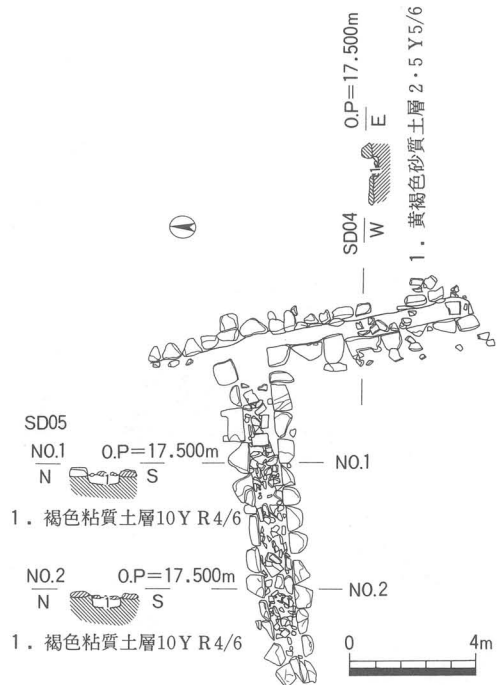
第36図は、「天保通寶」の銅銭である。楕円形で方孔がある。裏の孔上に「當百」、孔下に金工の花押が施されている。初鑄年は天保6年（1835年）である。縦4.8cm、横3.2cm、厚み0.2cmを測る。

便槽として使用された丹波焼甕は、形態から観察すると、榎崎彰一氏の丹波編年図では（参考文献6）、江戸I（17世紀前半）に属すると考えられる。

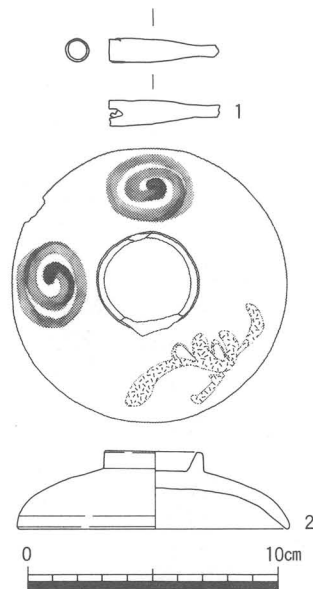
しかし、これは伝世品と考え、天保通寶が出土していることから、天保通寶を鑄造した1835年以降に便甕として使用されていたことが考えられる。



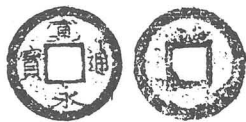
第25图 I—C区SK60出土遗物



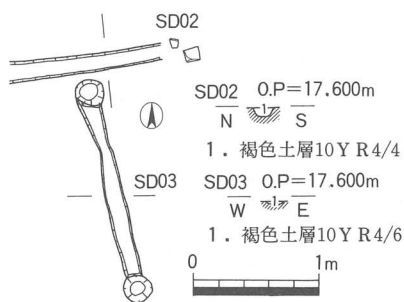
第26図 I-C区SD04・05遺構図



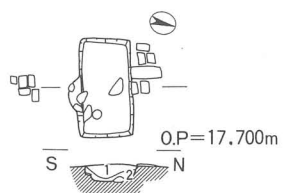
第27図 I-C区SD05出土遺物(1)



第28図 I-C区SD05出土遺物(2)



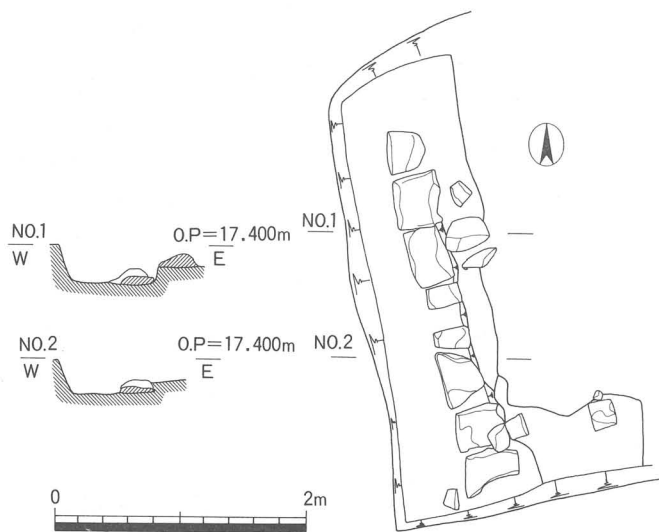
第30図 I-C区SD02・03遺構図



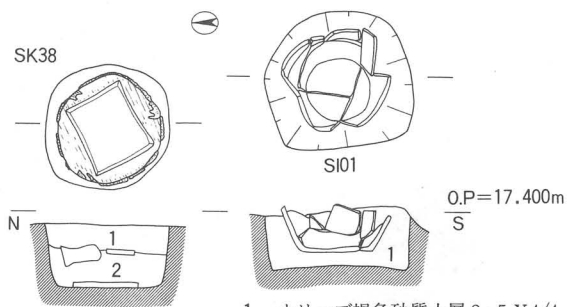
1. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3
2. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3



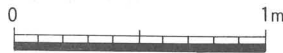
第31図 I-C区SK33遺構図



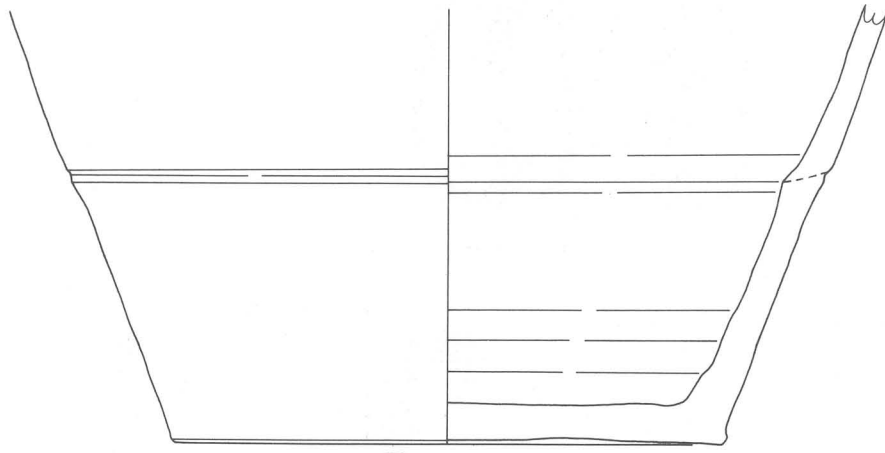
第29図 I-C区SD06遺構図



1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
2. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4



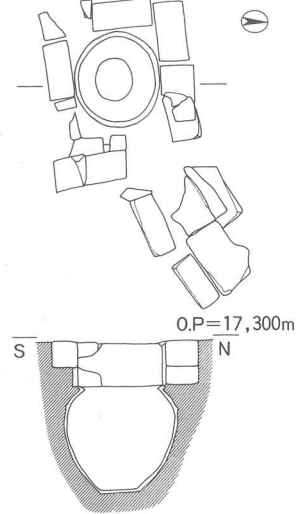
第32図 I-C区SK38・SI01遺構図



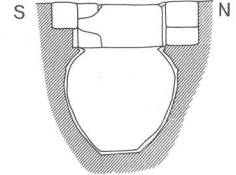
Q.
E



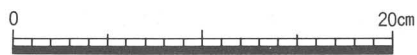
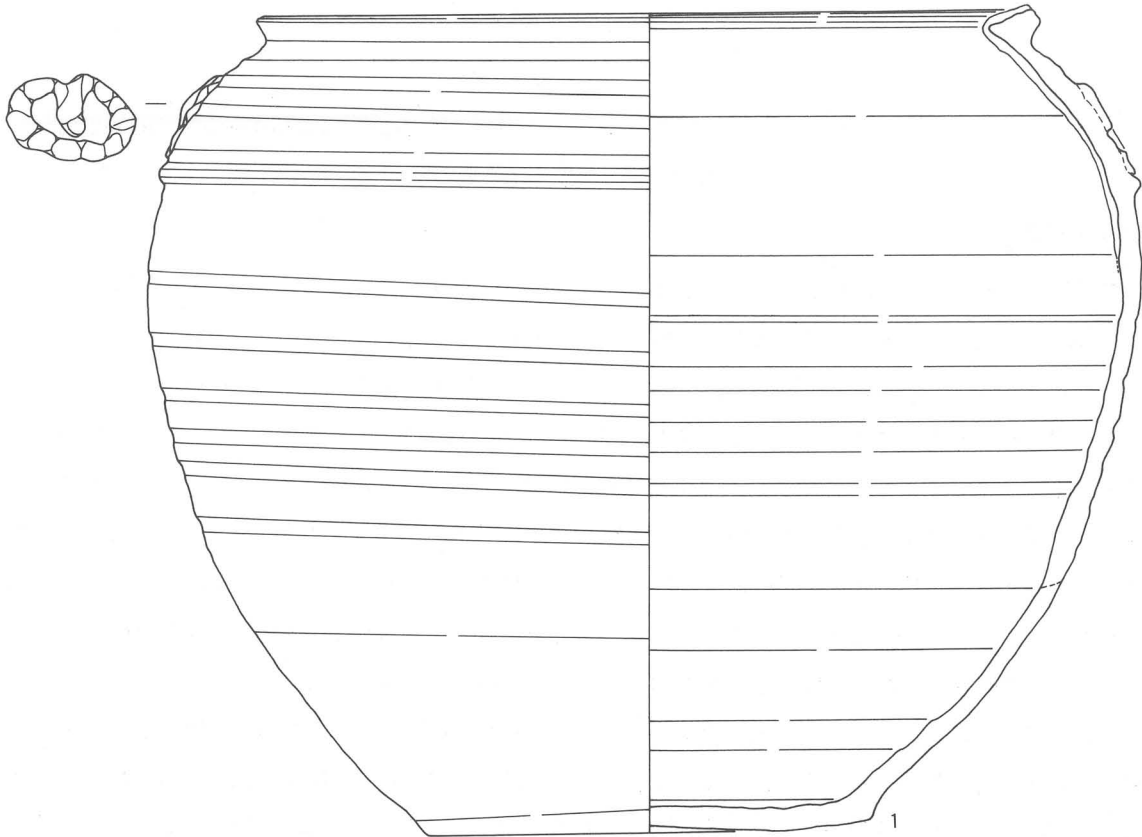
第33图 I—C区S I 01出土遺物



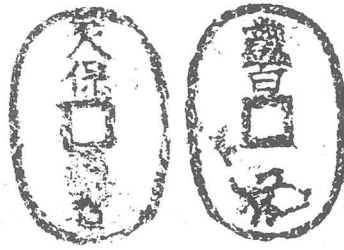
O.P=17,300m



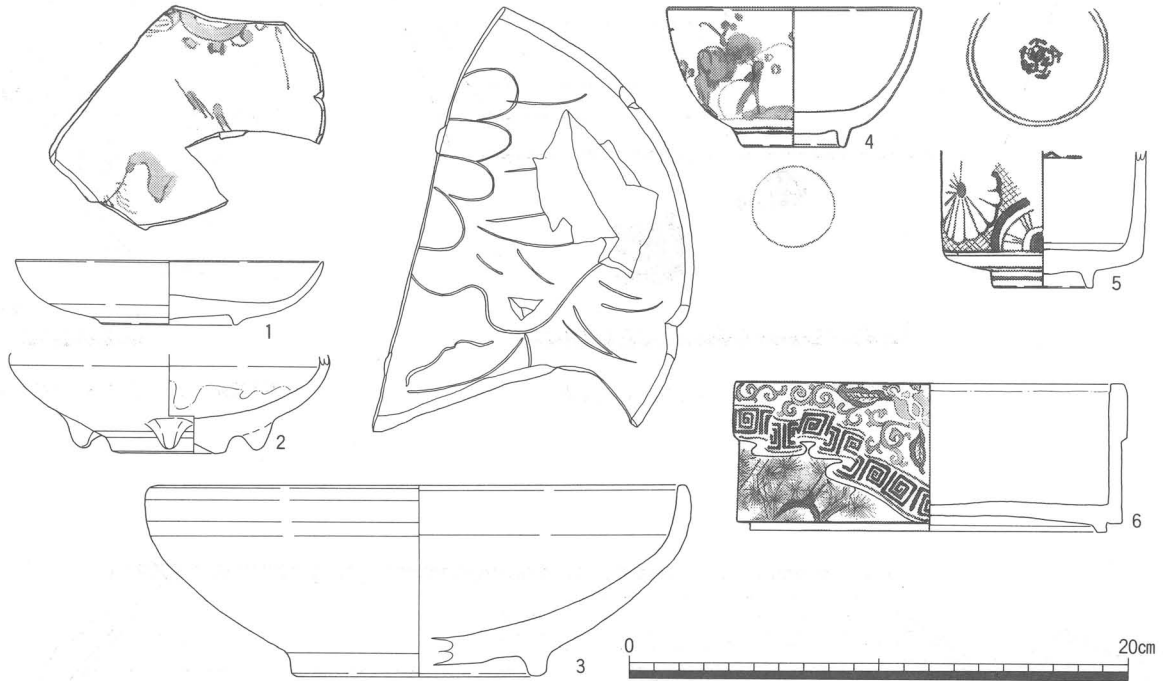
第34图 I—C区S I 02遺構図



第35图 I—C区S I 02出土遺物(1)



第36図 I-C区S I 02出土遺物(3/3)(2)

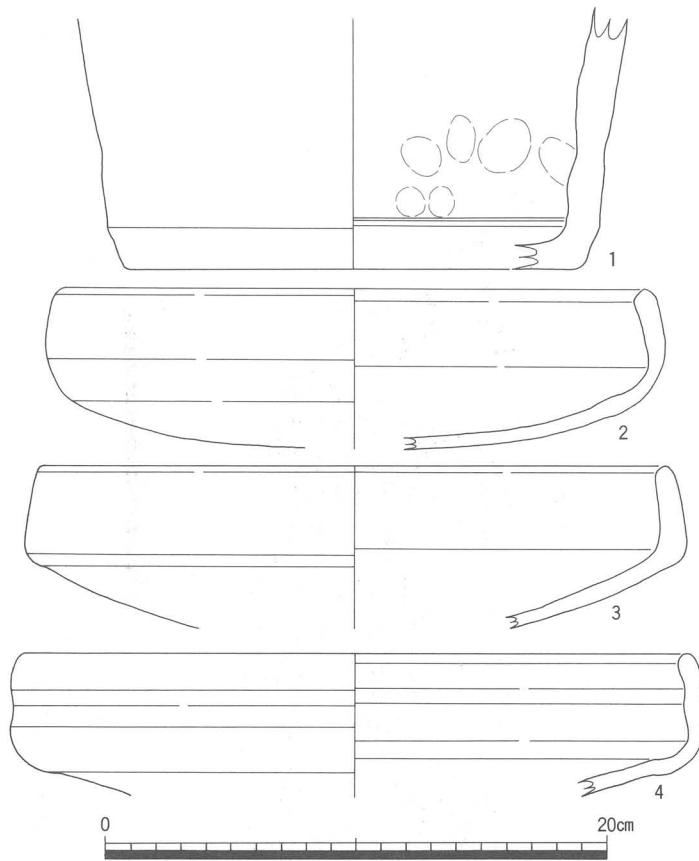


第37図 I-C区1次面包含層(1)

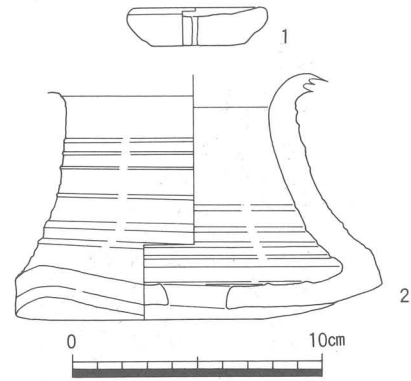
1次面包含層

第37図—1～5は、肥前磁器である。1は、山水文の初期伊万里の染付皿である。口径（推）12.4cm、器高2.6cm、高台径5.4cmを測る。高台には、離れ砂が付着する。大橋康二氏の編年によると、II-2期に位置付けられる。2は、青磁香炉である。内面下半及び高台畳付・内面は露胎である。18世紀代のものである。3は、青磁鉢である。口径（推）21cm、器高7.7cm、高台径（推）9.8cmを測る。内面は片切り彫りで、草花文様を施す。高台畳付は露胎である。1630年～40年のものである。4は、染付碗である。口径10cm、器高5.6cm、高台径4cmを測る。5は、染付筒茶碗である。見込みに五弁花がみられる。4・5共、18世紀後半のものである。6は、産地不明の染付磁器段重である。口縁部は無釉である。19世紀半ば以降のものである。

第38図—1～4は、土師質土器である。1は、火消壺である。体部外面は未調整、最下部はヘラケズリ調整である。体部内面は横ナデ調整し、指頭圧痕が残り、全面に煤が付着する。底部は、未調整である。2～4は、焙烙である。2は、口径23.2cmを測る。口縁部から底部にかけて、丸みをおびて屈曲するタイプである。外面には煤が付着している。3は、口径25cmを測る。口縁部が直立し、口縁部と底部との境目がはっきりしているタイプである。口縁部外面と底部外面との境目を面取りしている。底部外面・内面の一部に煤が付着している。4は、口径（推）26.6cmを測る。口縁部にゆるやかな段をなし、口縁部と底部との境目は、2のタイプと類似している。外面には煤が付着している。いずれも、口縁部内外面は、横ナデ調整、底部内面はナデ調整、底部外面は未調整で離れ砂がみられる。18世紀前半のものと考えられる。



第38図 I-C区1次面包含層(2)



第39図 I-C区表面採集遺物

表面採集遺物

第39図-1は、土師質土器の不明品である。直径(上)5.6cm、直径(下)3.8cm、高さ1.5cmを測る。直径0.2cmの穿孔を有する。2は、備前焼植木鉢である。底部には、直径2.8cmの穿孔を有する。時代は不明である。

4. II-A区の遺構と遺物

検出した遺構は、II区全体では、土壇112カ所、ピット41カ所、溝4カ所、井戸1カ所、炉跡8カ所、築地塀1カ所を数える(第40図)。

II区の北側をII-A区、南側をII-B区として記述する。

基本層序

北側は残存状況がよく、三面残っていたが、南側は、残存状況が悪く一面のみ残っていた。北側では現地表面から約10cmで一次遺構面を確認した。さらに約10cm下より二次遺構面を確認した。また、約20cm下より地山から直接掘り込まれた遺構を確認した。地山面は、O.P.=17.200mを測る。

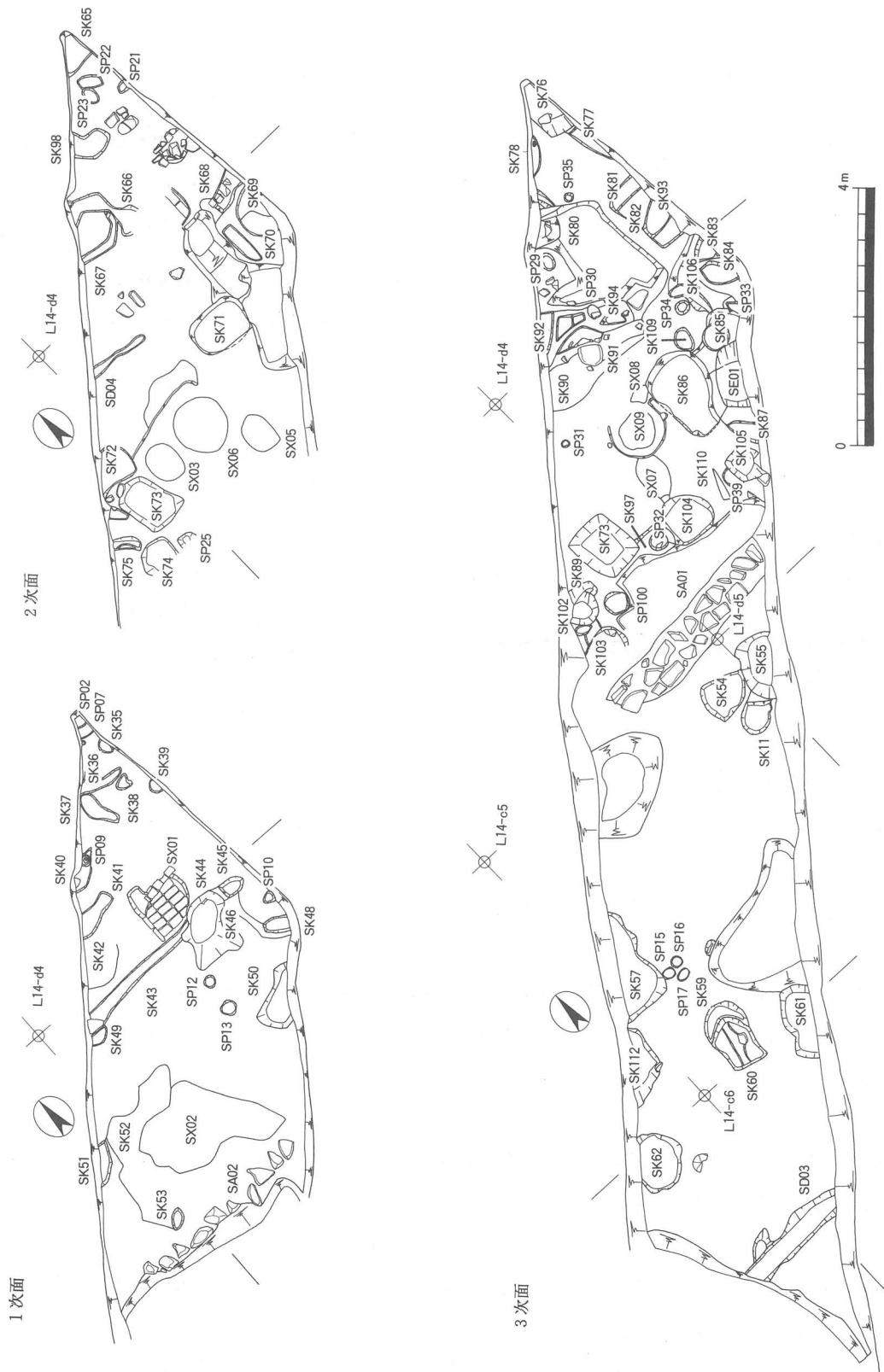
SA01

調査区中央部に位置する。花崗岩を2列に並置した築地塀の基礎と考えられる遺構である(第43図)。幅60cm、長さ300cm以上を測る。3次面の遺構である。

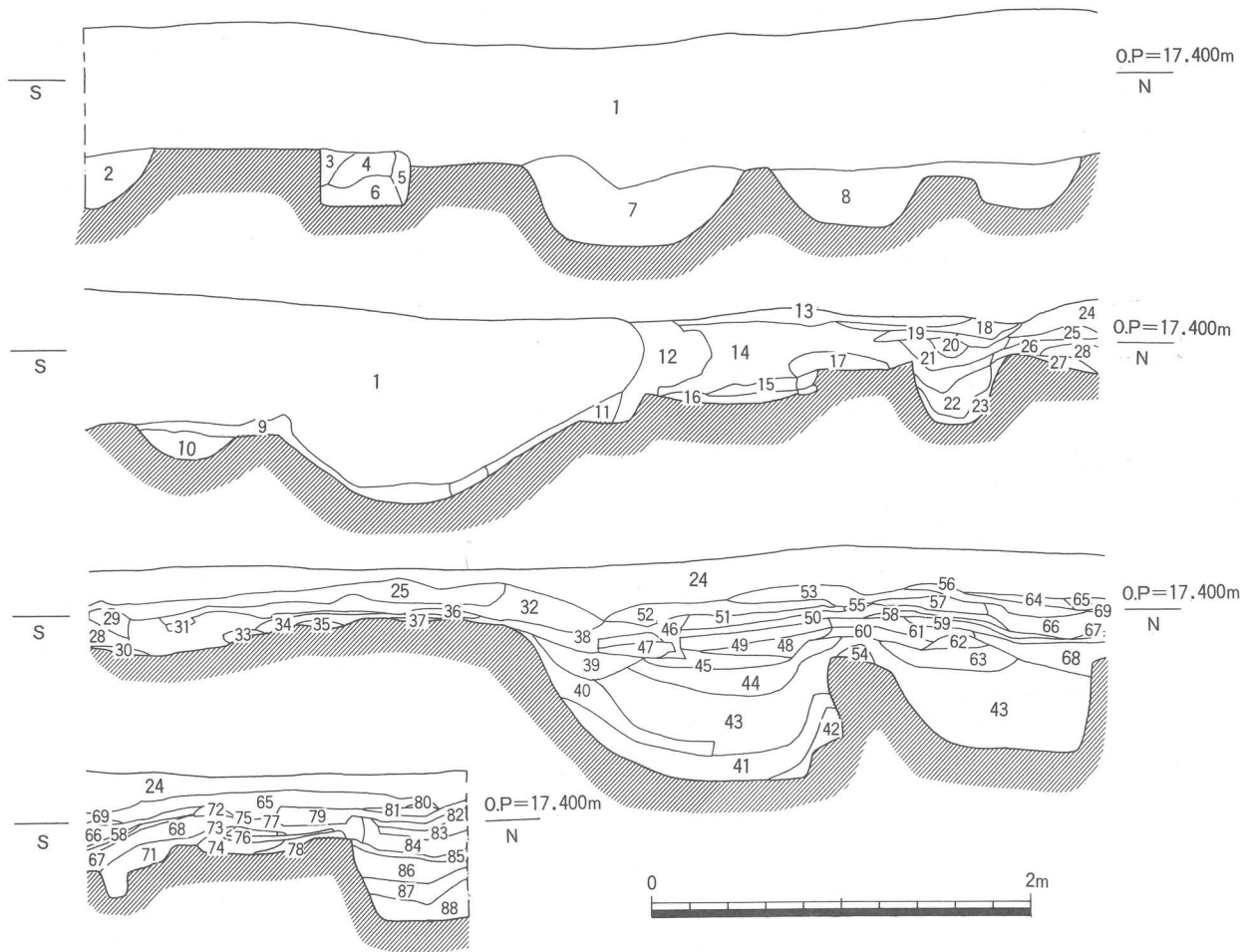
SE01

調査区東壁北端に位置する。直径220cm以上、深さ530cm以上を測る井戸である(第44図)。3次面の遺構である。湧水点は、O.P.=17.500m-510cmである。

第45図-1~4・6・9は、肥前磁器である。1は、染付碗である。口径8.9cm、器高4.9cm、高台径2.9cmを測る。2は、広東型碗である。3は、染付皿である。口径13.2cm、器高3cm、高台径7cmを測る。見込みは蛇ノ目釉ハギ、五弁花文はコンニャク印判による。4は、染付御神酒徳利である。高台畳付及び内面は露

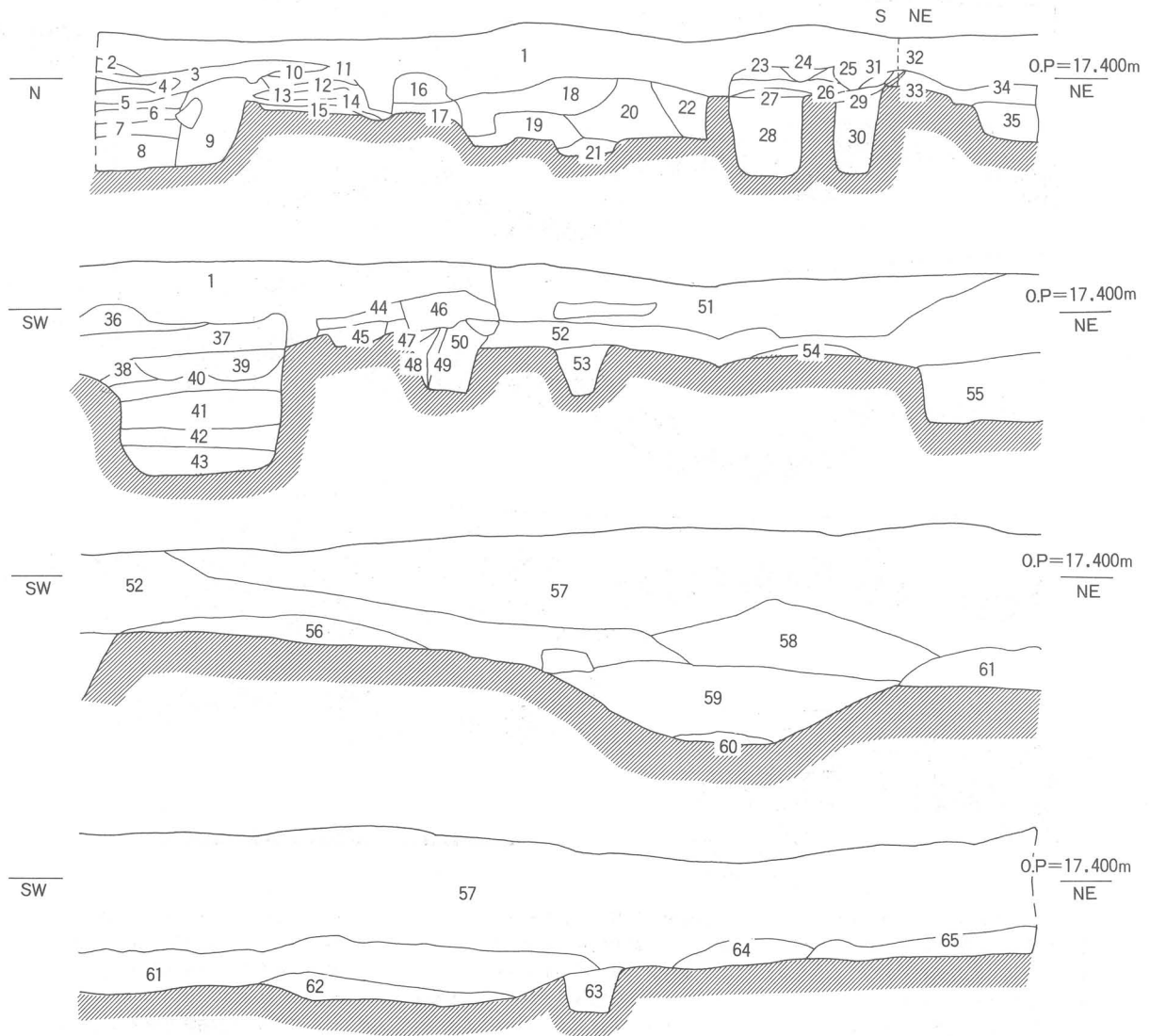


第40図 第45次調査II—A区遺構全体図



- | | | |
|-------------------------|---------------------------|-------------------------|
| 1. にぶい褐色土層 2・5 Y6/4 | 31. 暗褐色礫層 10Y R3/4 | 61. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R4/3 |
| 2. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8 | 32. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R6/4 | 62. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 |
| 3. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6 | 33. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6 | 63. 黒褐色粘質土層 10Y R3/2 |
| 4. 褐色砂質土層 10Y R4/6 | 34. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y R4/4 | 64. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 |
| 5. 黄褐色砂質土層 10Y R5/8 | 35. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y R4/6 | 65. にぶい黄色粘質土層 2・5 Y6/4 |
| 6. 黄褐色粘質土層 10Y R5/6 | 36. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y R4/4 | 66. 暗褐色粘質土層 10Y R3/4 |
| 7. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 | 37. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 | 67. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 |
| 8. 黒褐色砂質土層 10Y R3/2 | 38. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3 | 68. 暗オリブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 |
| 9. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/6 | 39. 暗オリブ褐色粘質土層 2・5 Y R3/3 | 69. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6 |
| 10. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 | 40. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8 | 70. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6 |
| 11. 黄橙色砂質土層 10Y R7/8 | 41. 暗褐色粘質土層 10Y R3/3 | 71. 暗褐色砂質土層 5 Y R3/1 |
| 12. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8 | 42. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y R6/8 | 72. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R5/4 |
| 13. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 | 43. 暗褐色砂質土層 5 Y R3/1 | 73. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 |
| 14. 暗オリブ褐色砂質土層 5 Y4/4 | 44. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 | 74. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6 |
| 15. 灰オリブ褐色砂質土層 5 Y4/2 | 45. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/8 | 75. 黒褐色砂質土層 10Y R3/2 |
| 16. 黄褐色粘質土層 10Y R5/6 | 46. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 | 76. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R5/4 |
| 17. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 | 47. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 | 77. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R4/3 |
| 18. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 | 48. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6 | 78. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y R6/8 |
| 19. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8 | 49. にぶい褐色砂質土層 10Y R5/4 | 79. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 |
| 20. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 | 50. 褐色砂質土層 10Y R4/4 | 80. 暗オリブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 |
| 21. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3 | 51. 褐色粘質土層 10Y R4/6 | 81. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 |
| 22. 黒褐色砂質土層 10Y R3/2 | 52. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R5/3 | 82. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6 |
| 23. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 | 53. 暗オリブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 | 83. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y7/6 |
| 24. 暗オリブ褐色砂質土層 5 Y4/3 | 54. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 | 84. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6 |
| 25. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3 | 55. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 | 85. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 |
| 26. にぶい黄橙色砂質土層 10Y R6/4 | 56. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2 | 86. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 |
| 27. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 | 57. にぶい黄褐色粘質土層 10Y R5/3 | 87. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4 |
| 28. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 | 58. 黄褐色砂質土層 10Y R5/8 | 88. にぶい黄色砂質土層 2・5 Y6/3 |
| 29. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R6/4 | 59. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3 | |
| 30. 黄褐色粘質土層 10Y R5/6 | 60. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6 | |

第41図 II-A区西壁土層図



- | | | |
|----------------------------|--------------------------|-------------------------|
| 1. 浅黄色砂質土層 5 Y7/4 | 23. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 | 45. 黄橙色粘質土層 10Y R7/8 |
| 2. オリーブ色砂質土層 5 Y7/4 | 24. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 | 46. 黄橙色粘質土層 7・5 YR 7/8 |
| 3. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6 | 25. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 | 47. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6 |
| 4. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y7/6 | 26. にぶい黄色砂質土層 2・5 Y6/3 | 48. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/8 |
| 5. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 | 27. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8 | 49. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8 |
| 6. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 | 28. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6 | 50. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4 |
| 7. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4 | 29. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/8 | 51. 黄橙色粘質土層 7・5 YR7/8 |
| 8. にぶい黄色砂質土層 2・5 Y6/3 | 30. 黄褐色砂質土層 10Y R5/8 | 52. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 |
| 9. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 | 31. 灰褐色砂質土層 7・5 YR5/2 | 53. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 |
| 10. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y7/6 | 32. にぶい褐色砂質土層 7・5 YR5/4 | 54. 黄橙色粘質土層 10Y R7/6 |
| 11. にぶい黄色砂質土層 2・5 Y6/4 | 33. にぶい褐色砂質土層 7・5 YR5/3 | 55. 赤黒色砂質土層 2・5 YR1.7/1 |
| 12. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8 | 34. 灰褐色砂質土層 7・5 YR4/2 | 56. 黄橙色粘質土層 10Y R7/8 |
| 13. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6 | 35. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/8 | 57. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R5/4 |
| 14. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y7/6 | 36. にぶい褐色砂質土層 7・5 YR6/3 | 58. 明黄褐色粘質土層 10Y R7/6 |
| 15. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 | 37. 浅黄色砂質土層 2・5 Y7/3 | 59. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6 |
| 16. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y7/6 | 38. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 | 60. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8 |
| 17. オリーブ色砂質土層 5 Y6/6 | 39. 褐色粘質土層 10Y R4/4 | 61. 黄橙色粘土層 10Y R8/8 |
| 18. オリーブ色土層 5 Y5/6 (瓦溜め) | 40. にぶい黄橙色砂質土層 10Y R6/3 | 62. にぶい黄橙色砂質土層 10Y R7/3 |
| 19. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 | 41. にぶい黄橙色粘質土層 10Y R6/4 | 63. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8 |
| 20. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/2 | 42. 明赤褐色粘質土層 5 YR5/6 | 64. 明黄褐色砂層 2・5 Y6/8 |
| 21. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 | 43. 浅黄褐色砂質土層 10Y R4/4 | 65. にぶい黄橙色砂質土層 10Y R6/3 |
| 22. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 (瓦溜め) | 44. 褐色砂質土層 10Y R4/4 | |



第42図 II-A区東壁土層図

胎である。6は、型押し白磁紅皿である。口径4.8cm、器高1.5cm、高台径1.4cmを測る。9は、青磁花瓶である。口径8.2cm、器高15.4cm、高台径6.2cmを測る。高台畳付及び内面頸部以下は、露胎である。肩部には、耳を貼り付ける。5は、萩焼湯呑茶碗である。口径7.8cm、器高5.5cm、高台径3.8cmを測る。体部外面の露胎上にいっちゃん掛けを施し、内面は施釉している。高台は露胎である。7は、受けのない柿釉灯明皿である。口径(推)5.8cm、器高1.2cm、底径(推)2.6cmを測る。8は、土人形の天神である。合わせ型による成形である。合わせ目は、ヘラケズリ調整を施す。台座を有する土人形は、堺環濠都市遺跡出土遺物と共通するものが多い(参考文献4)。10は、三田青磁端反り碗である。口径13cm、器高7.6cm、高台径5.2cmを測る。11・12・14・15は、伊賀・信楽焼系である。11は、蓋である。口径7.2cm、器高3.7cm、つまみ径2.2cmを測る。白土と黒土のいっちゃん掛けによる文様を施す。下面は露胎である。12は、灰釉急須落し蓋である。口径9cm、器高2.4cm、底径4.4cmを測る。下面は露胎で、胎土は灰白色5Y8/2を呈する。13は、産地不明の鉄釉磁器である。底部外面は露胎である。見込みに3カ所の目痕が残っている。体部に把手がついていた痕がみられる。14は、青土瓶である。15は、灰釉急須である。体部最下部・底面・把手内面は露胎である。16は、堺焼播鉢である。口径33.8cm、器高12.7cm、底径16cmを測る。体部外面の回転ヘラケズリは、口縁部直下まで施される。ロクロは左回転、播目は8～9本単位である。白神典之氏の編年によると、II型式に属する。17～19は、丹波焼である。17は、鉄釉甕である。口径(推)32.8cmを測る。口縁部上面は露胎、体部外面に円形浮文を貼り付ける。18は、鉄釉徳利である。内面・底部は、露胎である。19は、ペコタン徳利である。内外面共、無釉である。

出土遺物から概観すると、18世紀後半から19世紀初頭までの時期と考えられる。

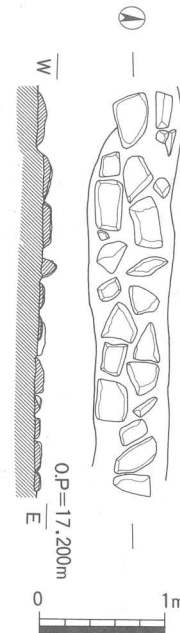
SD03

調査区南端に位置する。幅約50cm、長さ175cm以上、深さ25cmを測る溝である(第46図)。3次面の遺構である。

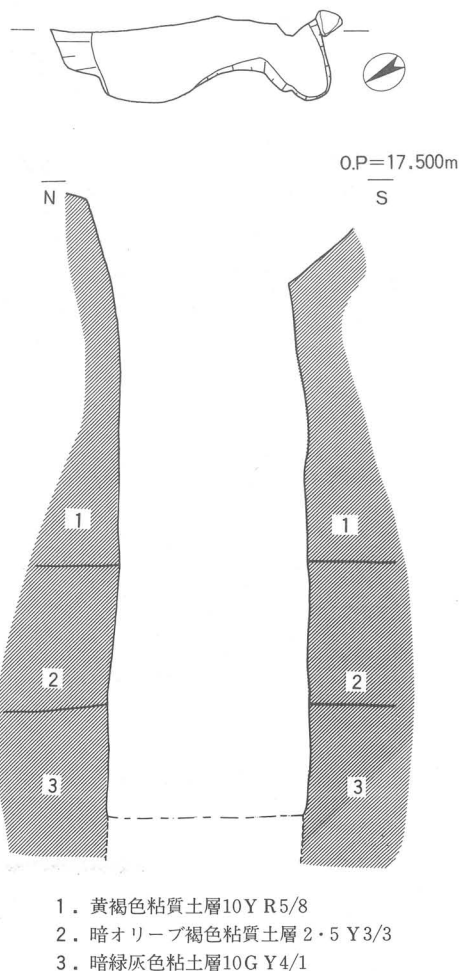
SK57

調査区西壁南側に位置する。90cm以上×150cm以上、底面が2カ所窪んでおり、深さ28cm、24cmを測る方形土壌である(第47図)。3次面の遺構である。

第48図-1は、肥前磁器染付碗である。2は、丹波焼桶である。口径(推)34cmを測る。口縁部上面には、3条の沈線が巡る。内

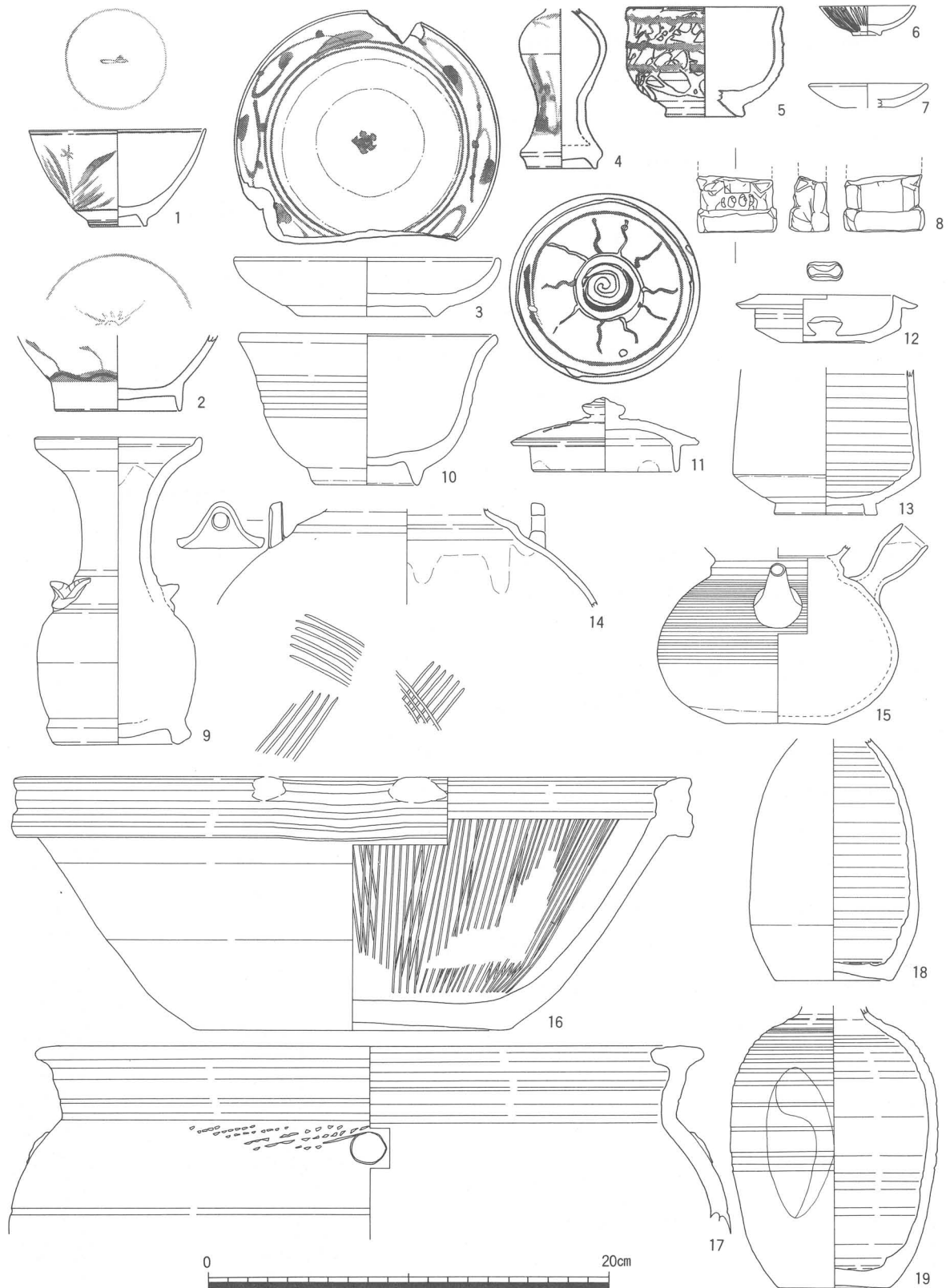


第43図 II-A区S A01遺構図



- 1. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
- 2. 暗オリーブ褐色粘質土層2.5 Y3/3
- 3. 暗緑灰色粘土層10G Y4/1

第44図 II-A区S E01遺構図

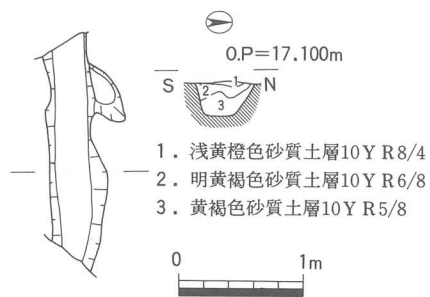


第45図 II-A区SE01出土遺物

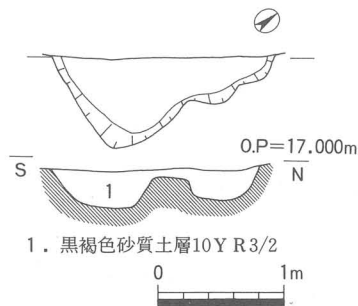
外面共、無釉である。

第49図は、丹波焼大甕である。口径（推）71cmを測る。

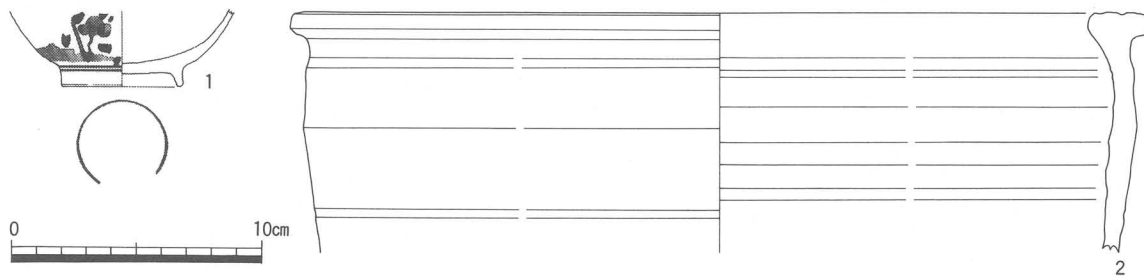
出土遺物から概観すると、17世紀後半から18世紀前半までの時期と考えられる。



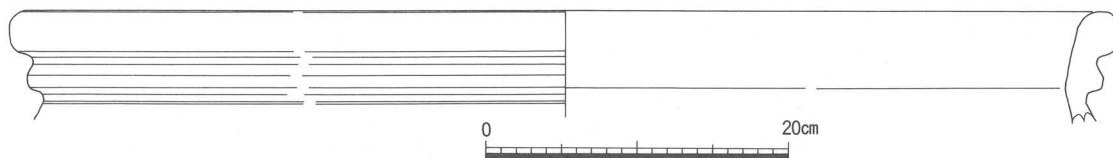
第46図 II-A区S D 03遺構図



第47図 II-A区S K 57遺構図



第48図 II-A区S K 57出土遺物(1)



第49図 II-A区S K 57出土遺物(2)

S K 80

調査区北端に位置し、200cm×140cm以上、深さ50cm以上を測る方形土壇である（第50図）。3次面の遺構である。埋土が暗褐色砂質土層を大量に使用して、その後黄褐色砂質土層を敷いて土間を造っている様子が見られる。

第51図一1～4は、肥前磁器である。1は、染付蓋である。口径10cm、器高2.75cm、つまみ径4cmを測る。内面に「寿」の銘款がみられる。2は、丸窓文の「くらわんか手」の碗である。口径11.4cm、器高5.8cm、高台径4.3cmを測る。見込みの五弁花文は、コンニャク印判による。高台内に銘款がみられる。3は、染付碗である。口径12.2cm、器高5.8cm、高台径4.2cmを測る。見込みの五弁花文は、コンニャク印判による。4は、松葉文染付皿である。口径11.8cm、器高3.8cm、高台径4.6cmを測る。見込みには、蛇ノ目輪ハギがみられる。5～8は、土師質土器皿である。5は口径（推）8cm、6は口径（推）9cm、7は口径（推）9.2cm、8は口径（推）9.6cmを測る。5・7・8は、にぶい黄橙色10Y R7/4を呈し、6は、灰白色2.5Y 7/1を呈する。いずれも、口縁部が内弯するタイプである。6・8の外面に、指頭圧痕がみられる。9は、京焼系灰釉灯明皿である。口縁部外面に煤が付着する。10は、暗緑灰色10G Y 4/1の粘板岩製の仕上げ砥石である。上面は、使用痕が著しい。左右側面に条痕がみられる。11・12は、丹波焼である。11は、壺底部である。外面は灰釉、内面は鉄釉を掛ける。12は、四耳壺である。榑崎彰一氏の編年によると、江戸Ⅲ（1673～1750年）に位置付けられる。

出土遺物から概観すると、18世紀前半～末の時期と考えられる。

S K 83

調査区北端西壁に沿ったところに位置する。直径40cm、深さ45cmを測る土壌である（第52図）。3次面の遺構である。埋土は暗褐色砂質土層で、一度に埋めている。

第53図—1・2は、土師質土器皿である。1は、口径（推）8cm、2は、口径（推）8.2cmを測る。いずれも、にぶい黄橙色10Y R7/3を呈し、外面に指頭圧痕が残っている。3は、嬉野焼緑釉皿である。内面に緑釉を掛け、見込みは蛇ノ目釉ハギを施している。4・6は、肥前磁器染付碗である。4の見込みに、蛇ノ目釉ハギがみられる。5は、銅製煙管の吸口か。吸口長6.2cmを測る。吸口部に、直径0.25cmの穿孔を有する。

S K 86

調査区北部に位置する。90cm×140cm以上、深さ40cmを測る不定型土壌である（第54図）。3次面の遺構である。埋土は、粘質土を3層水平に堆積させている。

第55図は、肥前磁器染付碗である。口径10.4cm、器高5.9cm、高台径4.6cmを測る。焼成は不良、高台畳付は露胎である。18世紀前半の時期と考えられる。

S X 07・08・09

調査区の北部で検出した。いずれも竈遺構である（第56図）。S X 07は、直径40cm、残存する深さ10cmを測る。S X 08は、直径約60cm、残存する深さ5cmを測る。S X 09は、基底部分のみ残存し直径30cmを測る。いずれも3次面の遺構であるが、S X 08がS X 07とS X 09を切っており、さらにS X 08のほうが掘り込み面が数cm高い。このことから、3次面の中で微妙な時期差であることが判明した。

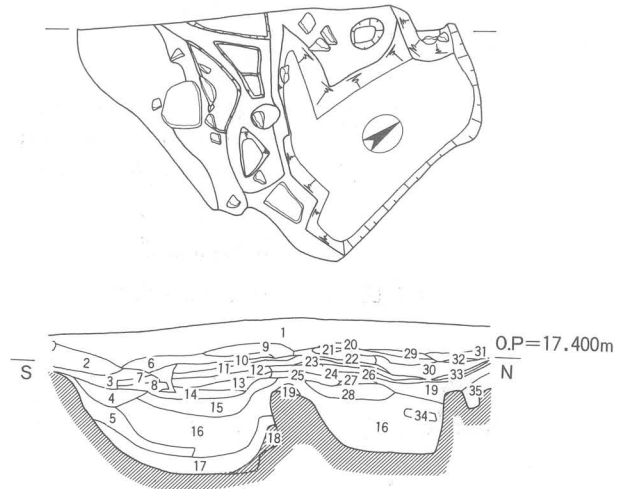
S D 04

2次面の調査区西壁沿いで検出した。幅10cm×長さ90cm以上、深さ5cmを測る溝である（第57図）。

S K 67

2次面西壁北部に位置する。幅15cm、長さ80cm以上を測る溝状遺構である（第58図）。S K 66に流れ込む可能性がある。

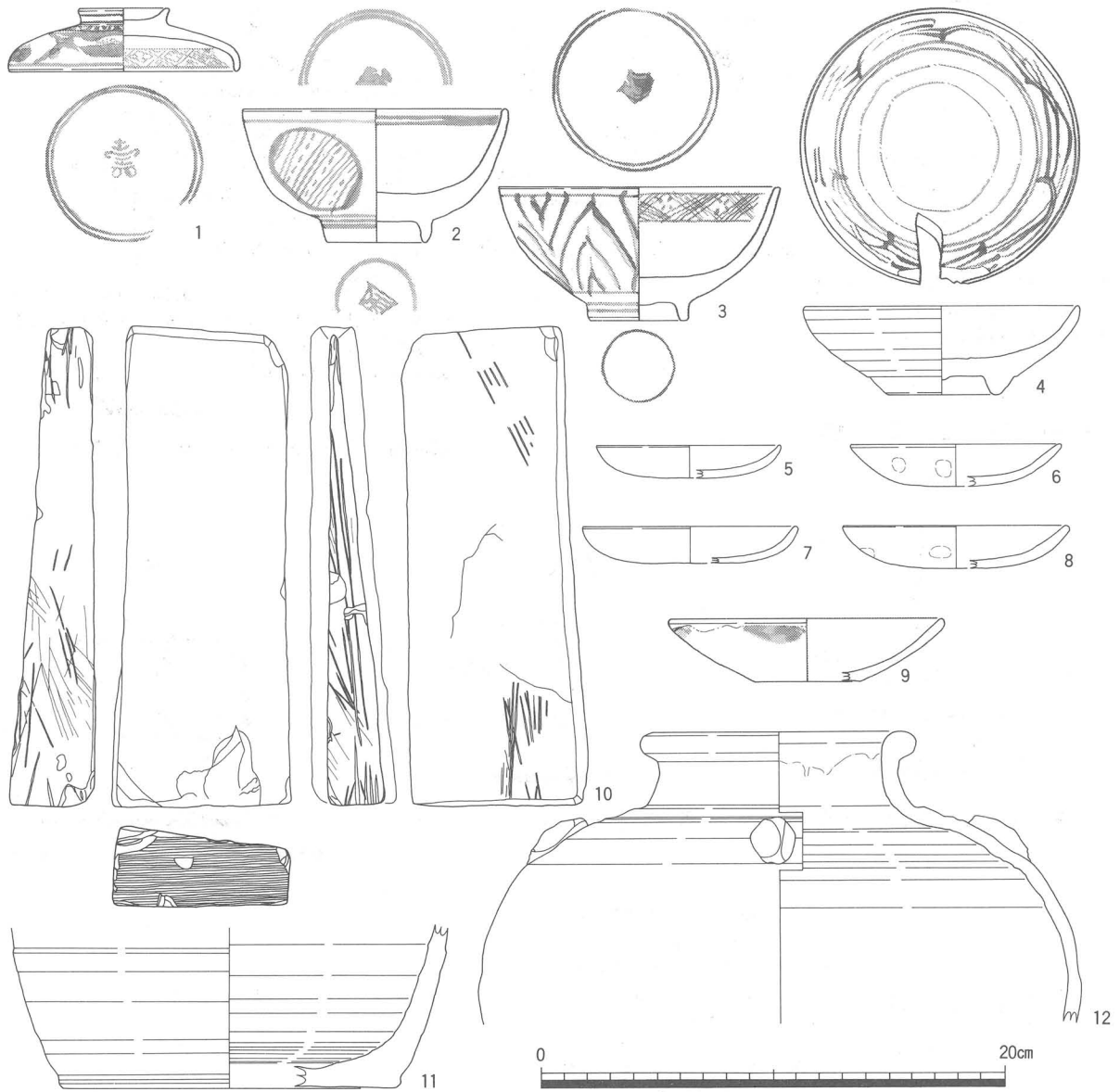
第59図は、肥前磁器染付筒茶碗である。口径7.6cm、器高5.6cm、高台径4.2cmを測る。見込みに五弁花文がみられる。高台畳付は露胎である。18世紀後半の時期と考えられる。



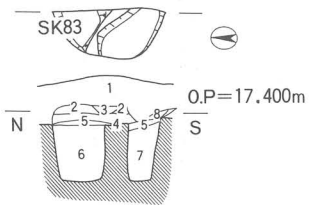
1. 暗オリーブ褐色砂質土層 5 Y 4/3
2. にぶい黄褐色砂質土層 10 Y R 6/4
3. 黄褐色砂質土層 2・5 Y 5/4
4. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3
5. 黄褐色粘質土層 10 Y R 3/3
6. にぶい黄褐色砂質土層 10 Y R 5/3
7. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 4/4
8. 黄褐色砂質土層 2・5 Y 5/6
9. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 3/3
10. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6
11. 褐色砂質土層 10 Y R 4/4
12. にぶい褐色砂質土層 10 Y R 5/4
13. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y 6/6
14. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/8
15. 黄褐色砂質土層 2・5 Y 5/4
16. 暗褐色砂質土層 5 Y R 3/1
17. 暗褐色粘質土層 10 Y R 3/3
18. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y R 6/8 (地山)
19. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 3/3
20. 黒褐色砂質土層 2・5 Y 3/2
21. 褐色砂質土層 10 Y R 4/6
22. にぶい黄色粘質土層 10 Y R 5/3
23. 黄褐色砂質土層 10 Y R 5/8
24. 黄褐色砂質土層 10 Y R 5/6
25. にぶい黄褐色砂質土層 10 Y R 4/3
26. 黄褐色砂質土層 2・5 Y 5/3
27. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 4/6
28. 黒褐色粘質土層 10 Y R 3/2
29. 黄褐色砂質土層 2・5 Y 5/4
30. 暗褐色粘質土層 10 Y R 3/4
31. にぶい黄色粘質土層 2・5 Y 6/4
32. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/6
33. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 4/4
34. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/6
35. 暗褐色砂質土層 5 Y R 3/1



第50図 II—A区S K 80遺構図



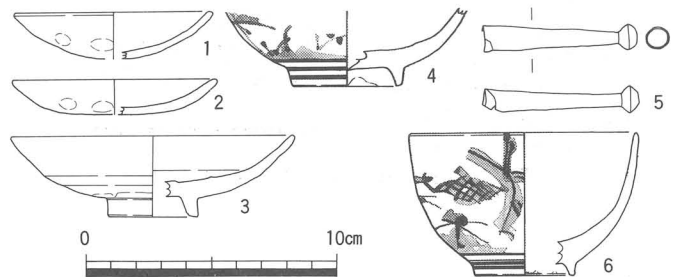
第51図 II-A区SK80出土遺物



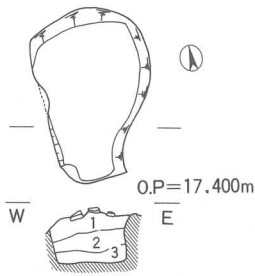
1. 浅黄色砂質土層 5 Y7/4
2. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
3. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3
4. にぶい黄色砂質土層 2・5 Y6/3
5. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8
6. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6
7. 黄褐色砂質土層 10Y R5/8
8. 灰褐色砂質土層 7・5 Y R5/4



第52図 II-A区SK83遺構図



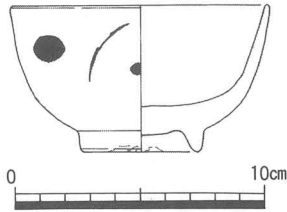
第53図 II-A区SK83出土遺物



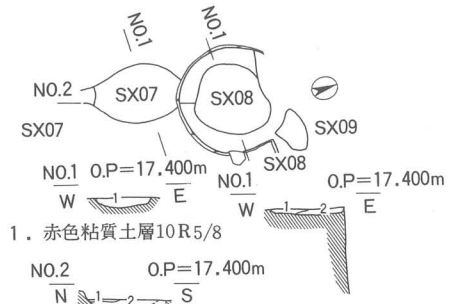
1. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
2. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
3. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2



第54図 II-A区SK86遺構図



第55図 II-A区SK86出土遺物

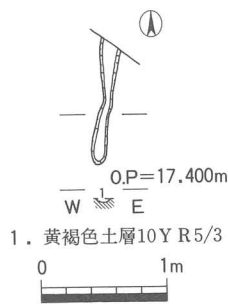


1. 赤色粘質土層 10R5/8

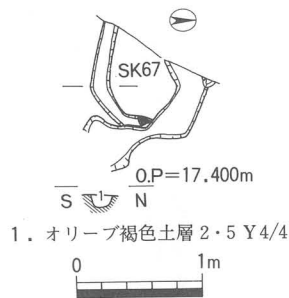
1. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/8
2. 明黄褐色粘質土層 10Y R7/6
3. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/8



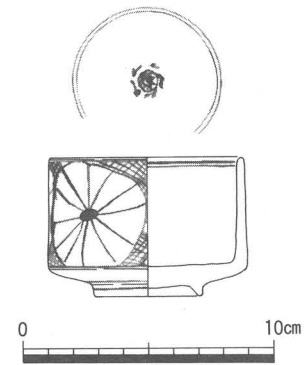
第56図 II-A区SX07・08・09遺構図



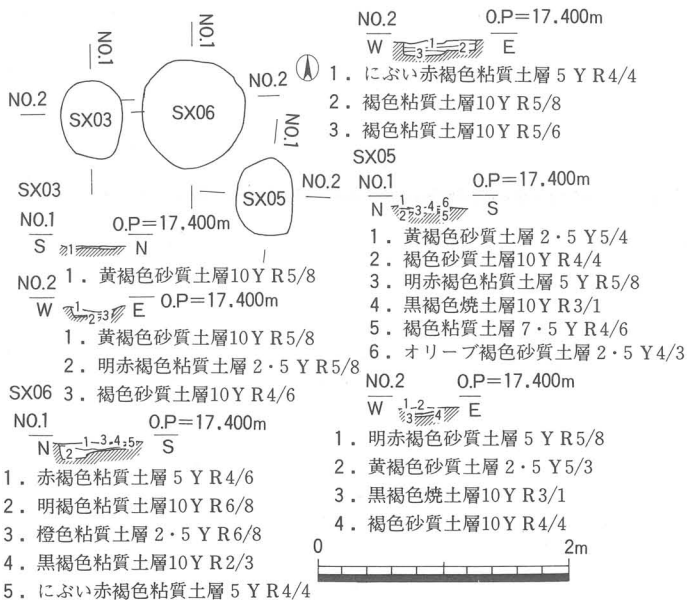
第57図 II-A区SD04遺構図



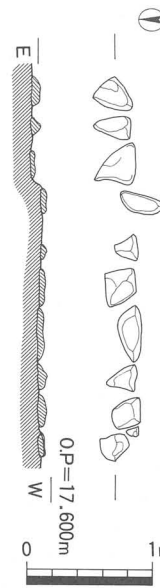
第58図 II-A区SK67遺構図



第59図 II-A区SK67出土遺物



第60図 II-A区SX03・05・06遺構図



第61図 II-A区SA02遺構図

SX03・06・07

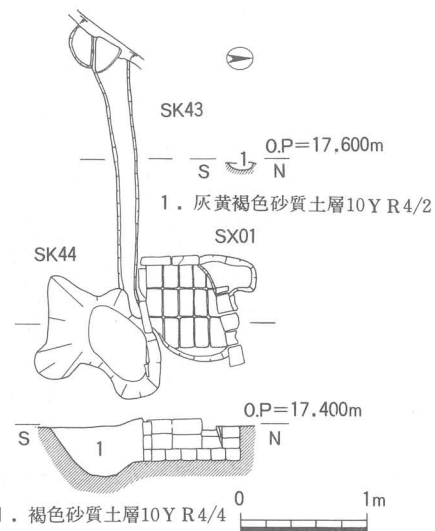
調査区のほぼ中央部に位置する。SX03・SX06・SX07は、いずれも竈遺構であるが基底のみ残存する。被熱部分の大きさは、SX03は、直径約50cm、SX06は、直径約80cm、SX07は、直径約45cmを測る。(第60図)。焚口は南側であると考えられる。

S A 02

幅約30cm、長さ300cmを測る築地塀の基礎である（第61図）。1次面中央部に位置する。石の間にセメントが被っていた事から、現代まで使用されていたことがわかる。

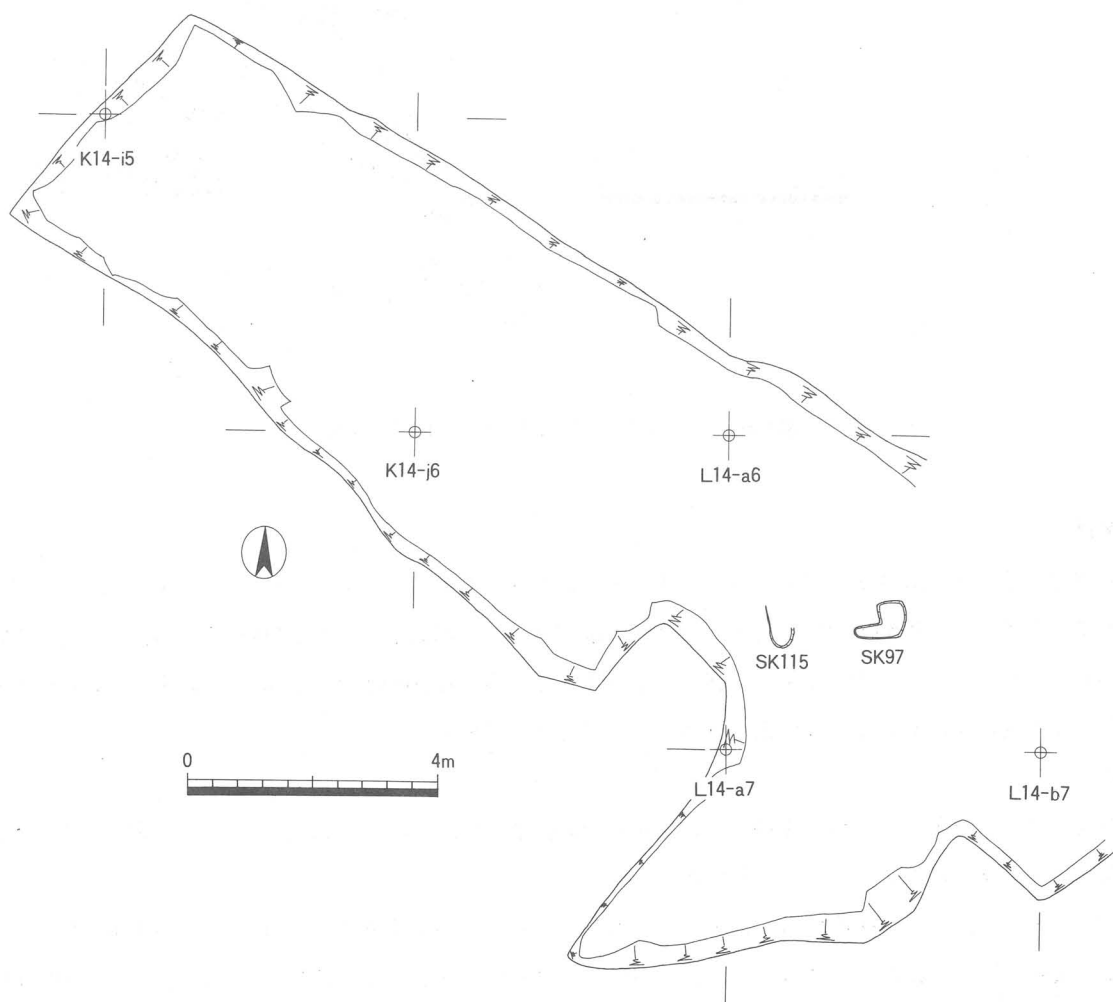
S K 43

1次面北部に位置する。幅20cm、長さ210cm以上、深さ5cmを測る溝である（第62図）。花崗岩の縁石で西側を押しえその外側に柱穴を検出した。S X 01が煉瓦積みの流し台遺構と想定されるので、そこから排水を流すための施設であると想定される。

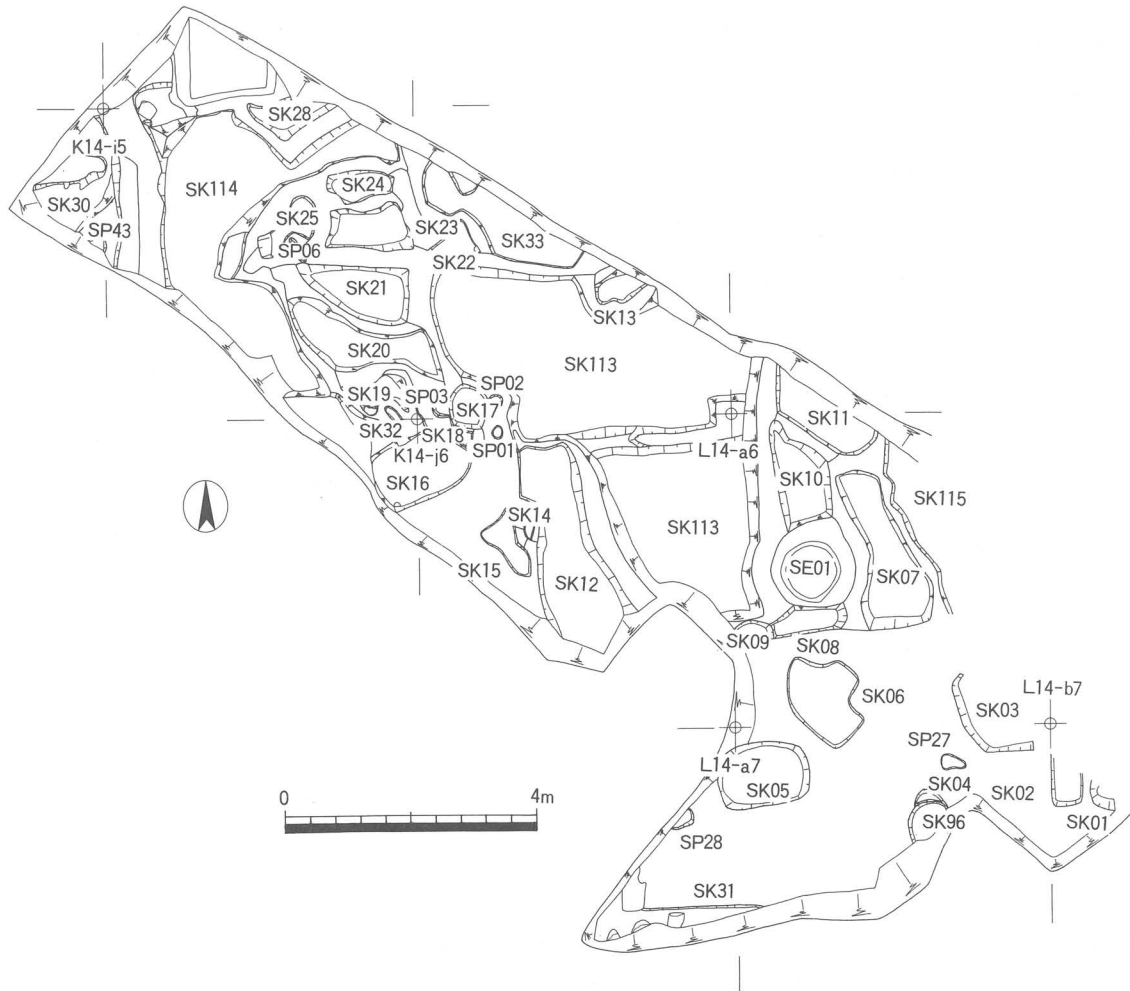


第62図 II-A区SK43・44・SX01遺構図

5. II-B区の遺構と遺物



第63図 第45次調査II-B区第2次面遺構全体図



第64図 第45次調査II-B区第1次面遺構全体図

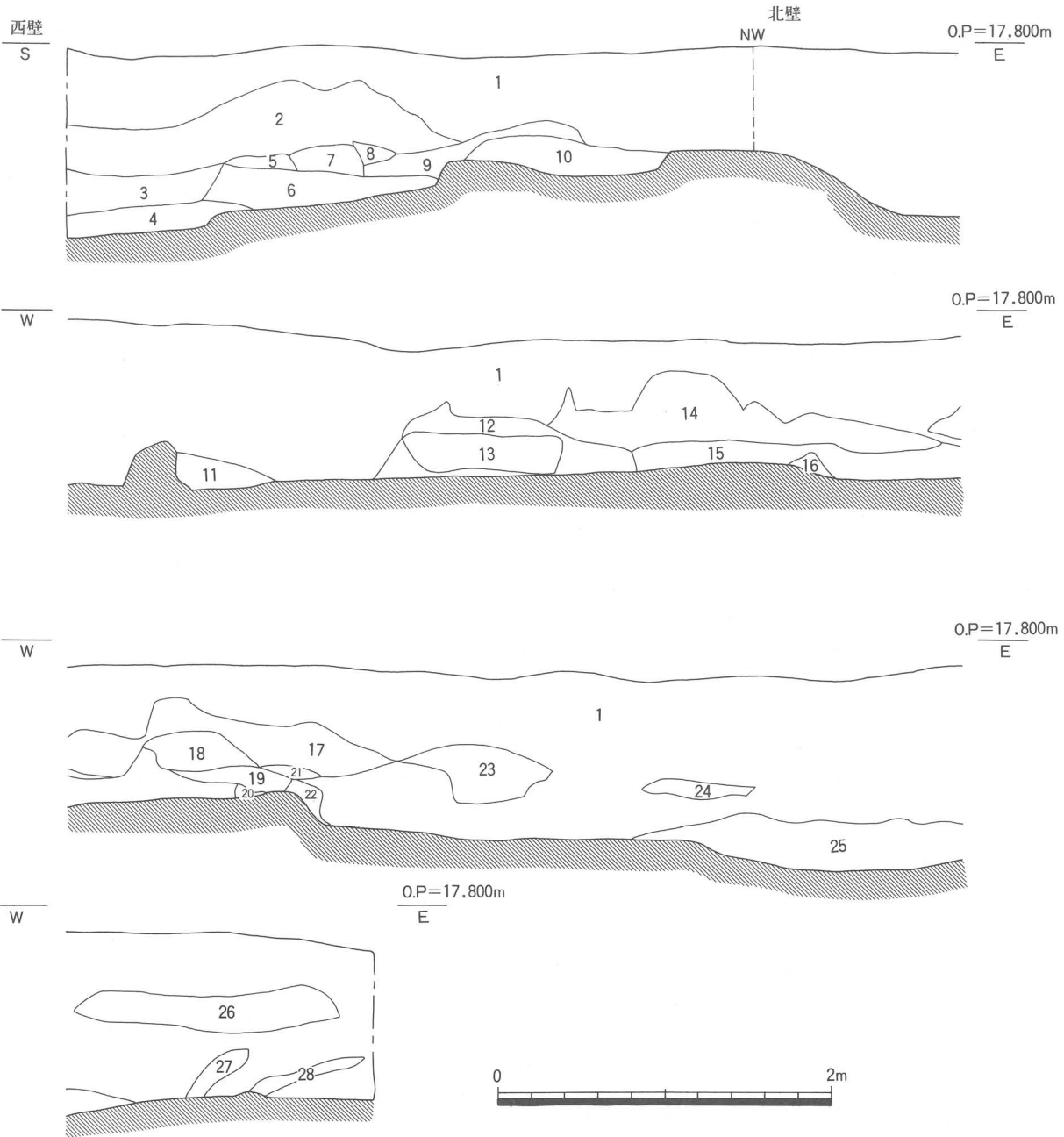
基本層序

この地区も遺構の残存状況が悪く、大半が生活面1面のみの遺存であった。しかし、遺構の広がりには調査区全域に及んでいる(第63・64図)。南西の土層断面図を見ると、現地表面から約70cm下まで削平を受けている(第65~67図)。その後、明治以降に、盛土がされている。さらに20cm下より18世紀前半以前の土取り穴と考えられる遺構群を確認した。地山面は、O.P.=17.100mを測る。

SK05

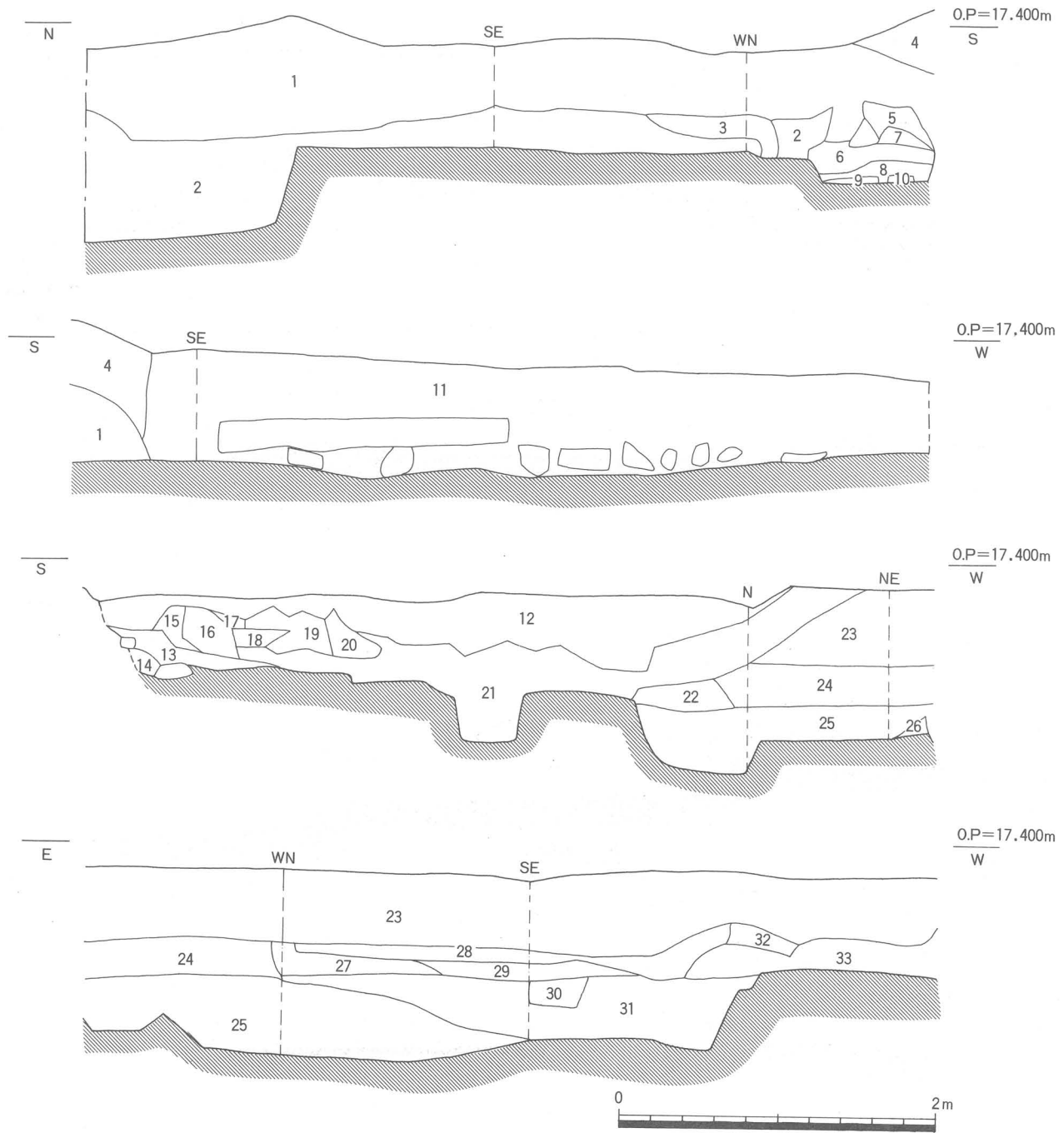
調査区の南端に位置し、100cm×150cm、深さ40cmを測る方形土壇である(第68図)。埋土の堆積状況を見ると、東側から序々に埋没していったようである。

第69図-1・2は、肥前磁器である。1は、染付碗である。外面の蝶文様は、コンニャク印判による。高台内に「大明年製」の銘がみられる。2は、初期伊万里染付皿である。帆かけ舟が描かれている。高台畳付に砂が付着している。大橋康二氏の編年によると、1はIV期、2はII-2期に属する。よって、1630年から18世紀前半の時期と考えられる。



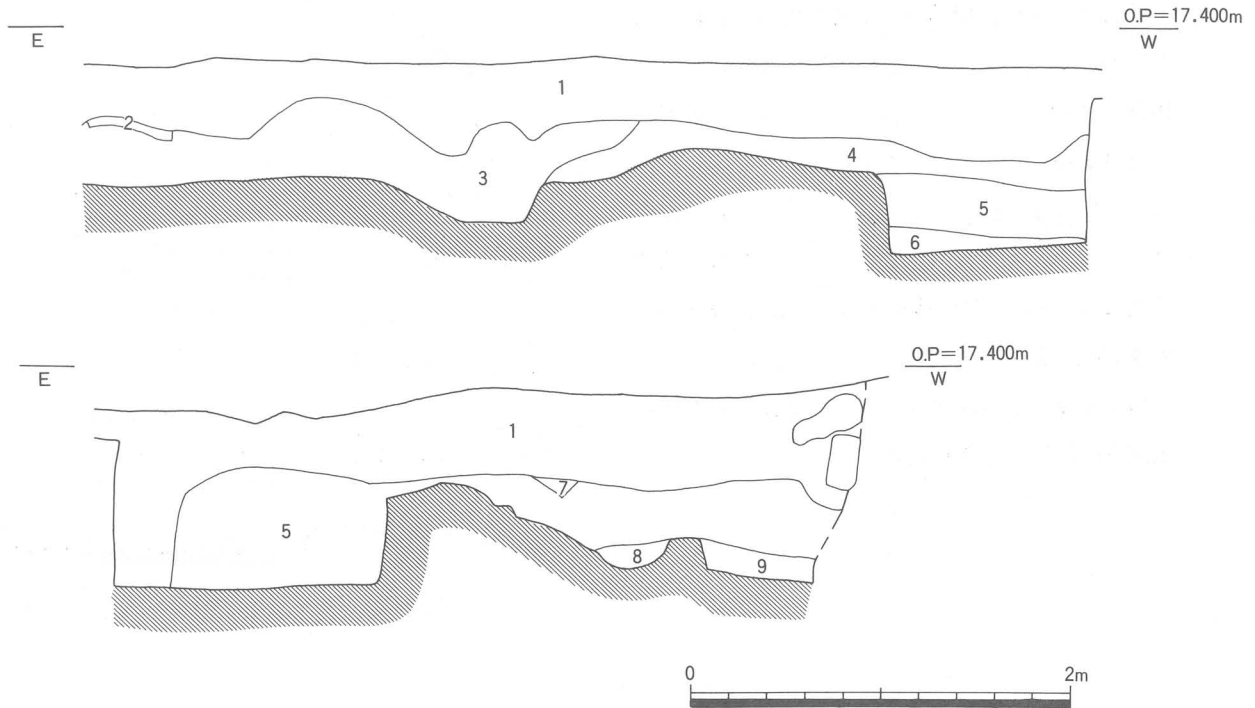
- | | | |
|-----------------------|--------------------------|--------------------------|
| 1. 攪乱 | 11. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 | 20. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8 |
| 2. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 | 12. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8 | 21. 明黄褐色砂質土層 10Y R7/6 |
| 3. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 | 13. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 | 22. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/6 |
| 4. にぶい黄色粘質土層 2・5 Y6/4 | 14. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 | 23. にぶい黄色砂質土層 2・5 Y6/4 |
| 5. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6 | 15. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 | 24. 明黄褐色砂質土層 5 Y R5/8 |
| 6. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8 | 16. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6 | 25. 暗灰黄色粘質土層 5 Y R5/8 |
| 7. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4 | 17. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 | 26. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 |
| 8. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3 | 18. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8 | 27. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8 |
| 9. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8 | 19. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 | 28. にぶい褐色砂質土層 7・5 Y R5/4 |
| 10. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6 | | |

第65図 II-B区北壁・西壁土層図



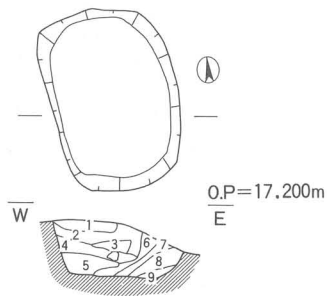
- | | | |
|------------------------|--------------------------|-------------------------|
| 1. 黄褐色土層10Y R5/6 | 12. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 | 23. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 |
| 2. 黄橙色土層10Y R8/8 | 13. にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3 | 24. にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4 |
| 3. にぶい黄橙色砂質土層10Y R7/3 | 14. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6 | 25. にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/3 |
| 4. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8 | 15. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 | 26. 黄橙色粘質土層 7・5 YR7/8 |
| 5. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8 | 16. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 | 27. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 |
| 6. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3 | 17. 明黄褐色砂質土層10Y R6/6 | 28. 黄色砂質土層 2・5 Y8/8 |
| 7. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 | 18. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8 | 29. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 |
| 8. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 | 19. 明黄褐色砂質土層10Y R7/6 | 30. 黄色粘質土層 2・5 Y7/8 |
| 9. 黄橙色粘質土層10Y R7/8 | 20. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3 | 31. 明赤褐色砂質土層 2・5 YR5/6 |
| 10. 暗褐色粘質土層10Y R3/4 | 21. 黄橙色粘質土層10Y R7/6 | 32. 黄橙色粘質土層10Y R8/8 |
| 11. 褐色砂質土層10Y R4/4 | 22. 黄色砂質土層 2・5 Y7/8 | 33. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8 |

第66図 II-B区南壁土層図(1)



- | | | |
|----------------------|-----------------------|----------------------|
| 1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 | 4. 明黄褐色砂質土層 10Y R7/6 | 7. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3 |
| 2. 黄色粘質土層 2・5 Y8/8 | 5. にぶい黄色粘質土層 2・5 Y6/4 | 8. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 |
| 3. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8 | 6. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2 | 9. オリーブ黄色粘質土層 5 Y6/4 |

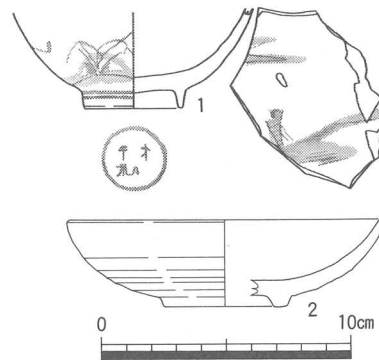
第67図 II-B区南壁土層図(2)



1. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R4/3
2. 黒褐色砂質土層 10Y R2/2
3. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
4. 黒褐色砂質土層 10Y R3/2
5. オリーブ黒色粘質土層 5 Y3/1
6. 明黄褐色土層 2・5 Y6/8
7. 炭化物層 5 Y2/1
8. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
9. 黒色粘質土層 10Y R2/1



第68図 II-B区SK05遺構図



第69図 II-B区SK05出土遺物

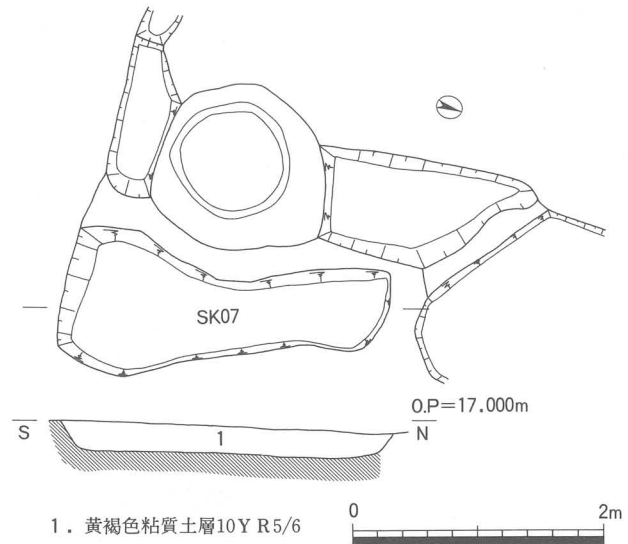
SK07

調査区の東側に位置し、150cm×400cm以上、深さ25cmを測る方形の大土壇である（第70図）。

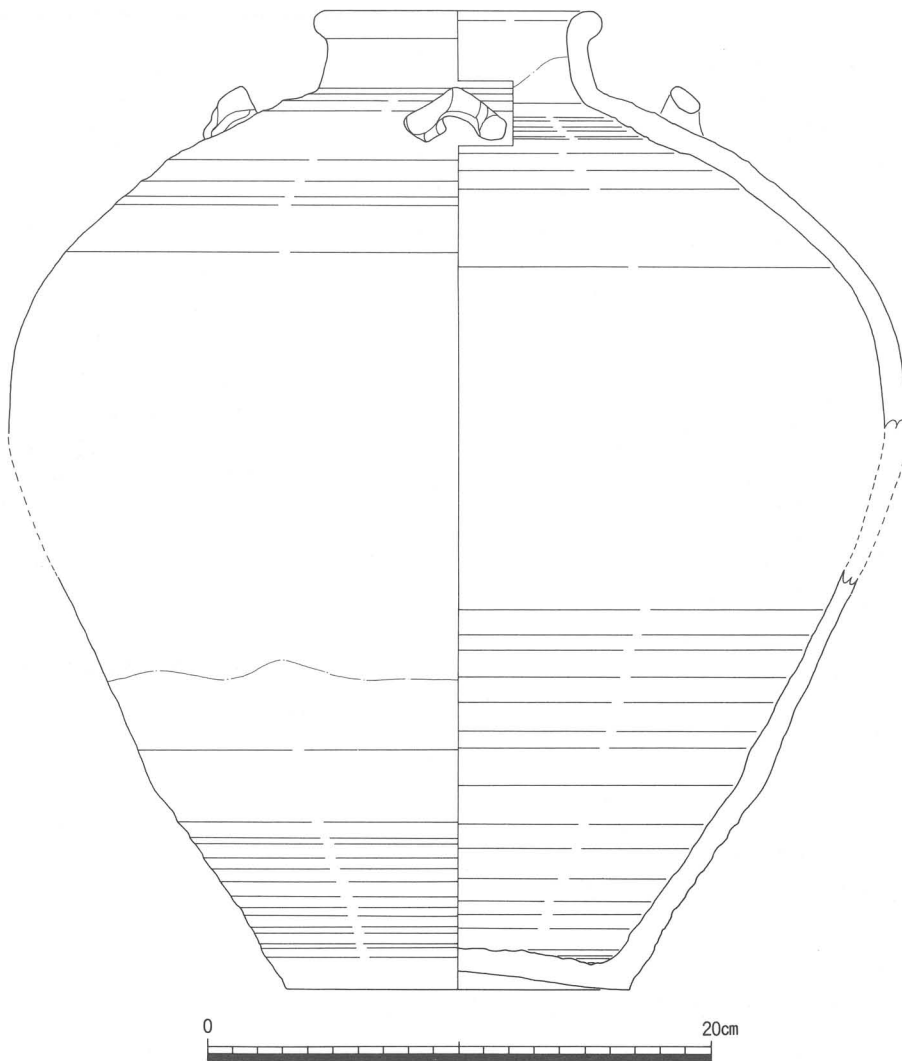
第71図は、丹波焼四耳壺である。口径（推）10.6cm、器高（推）39cm、底径（推）13.6cmを測る。外面口縁部から体部上半及び、内面頸部にかけて、わら灰釉が掛かる。頸部が直立し、口縁部もあまり外反しない。榑崎彰一氏の編年によると、江戸 I（1615～1623年）に属する。

第72図—1は、肥前磁器染付皿である。内面に露草が描かれている。大橋康二氏の編年によると、III期（1650～1690年）に属する。2は、土人形の地藏菩薩像である。左手に宝珠、右手に錫杖をもち、台座は蓮華座を有する座像である。合わせ型による成形である。合わせ目は、ヘラケズリ調整、表面には、ドロキラが残存する。底部に直径0.4cmの空気孔を有する。

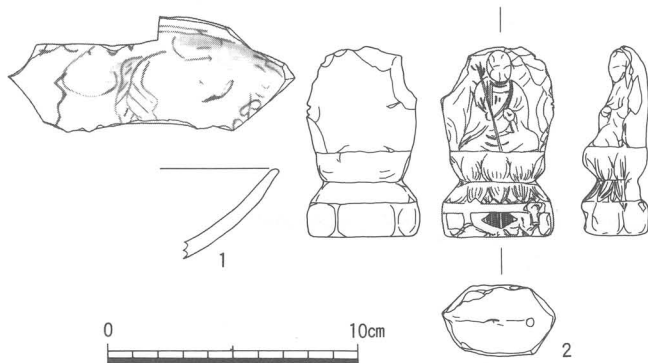
出土遺物から概観すると、17世紀後半から18世紀前半の時期と考えられる。



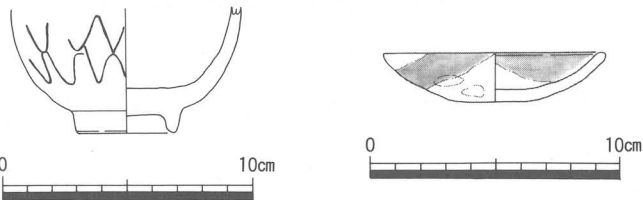
第70図 II—B区SK07遺構図



第71図 II—B区SK07出土遺物(1)

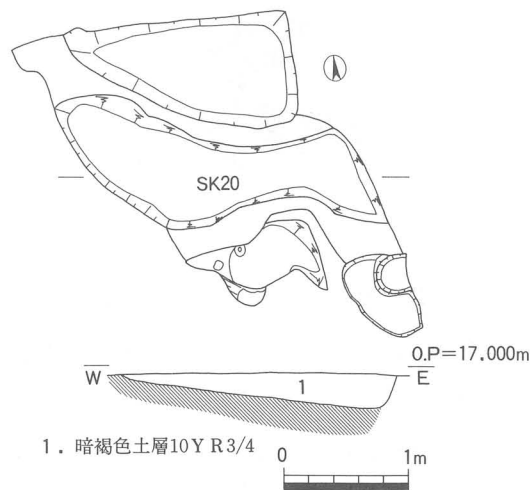


第72図 II-B区SK07出土遺物(2)

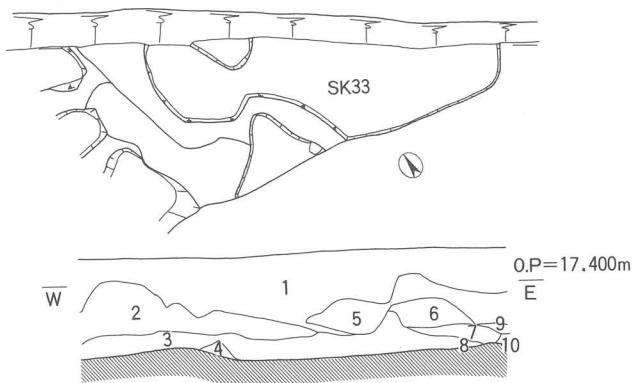


第74図 II-B区SK20出土遺物

第76図 II-B区SK30出土遺物

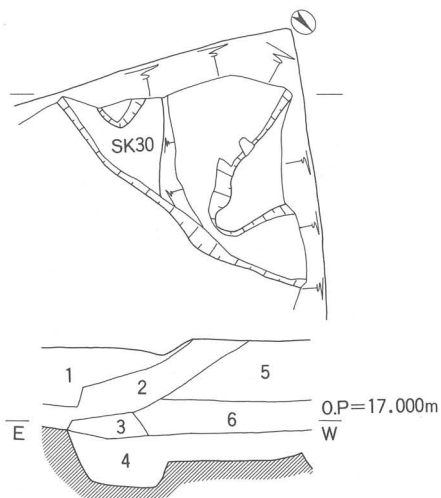


第73図 II-B区SK20遺構図



1. 攪乱
2. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
3. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/4
4. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6
5. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3
6. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8
7. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
8. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8
9. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8
10. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/6

第77図 II-B区SK33遺構図



第75図 II-B区SK30遺構図

1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
2. 黄橙色粘質土層 10Y R7/6
3. 黄色砂質土層 2・5 Y7/6
4. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R5/3
5. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
6. にぶい黄褐色砂質土層 10Y R5/4

SK20

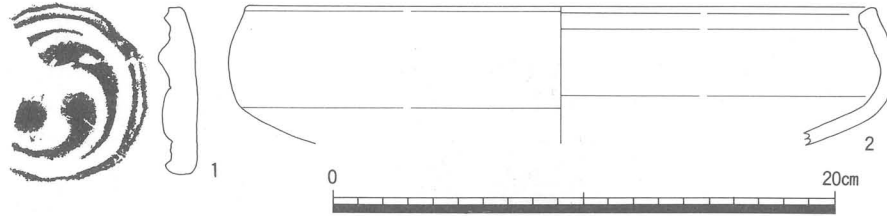
調査区の中央やや北側に位置し、200cm×180cm以上、深さ26cmを測る土壌である（第73図）。

第74図は、肥前磁器一重網目文碗である。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年によると、III期に属する。よって、17世紀後半の時期と考えられる。

SK30

調査区の北西端に位置し、東西180cm、南北100cm以上、深さ40cmを測る不定形の土壌である（第75図）。

第76図は、土師質土器灯明皿である。口径（推）8.8cm、器高2cmを測る。口縁部内外面共、横ナデ調整、底部内外面は、ナデ調整を施す。外面に、指頭圧痕がみられる。口縁部内外面に灯芯痕を残す。



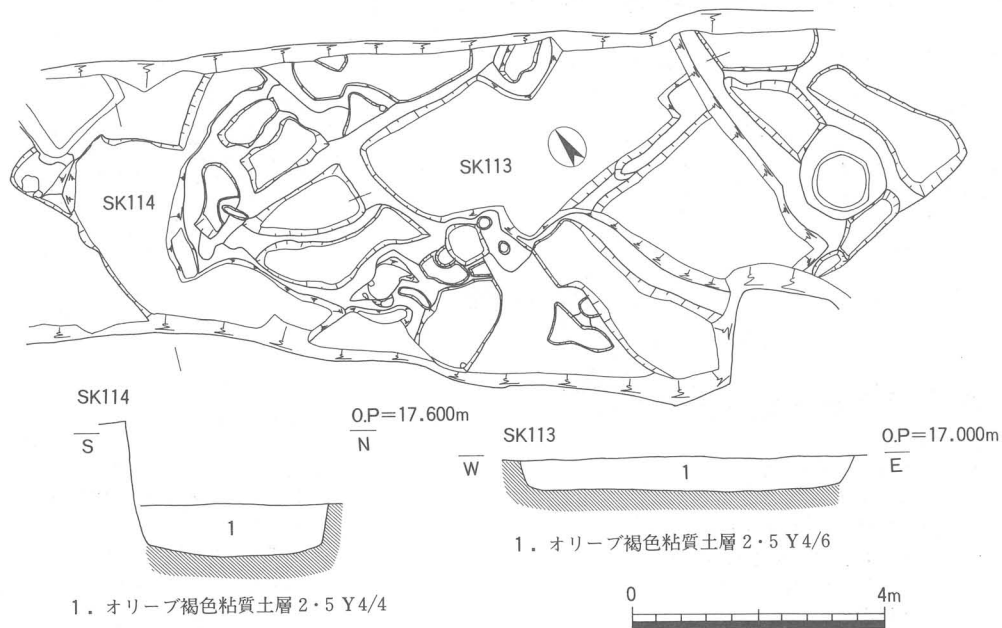
第78図 II-B区SK33出土遺物

SK33

調査区の東壁沿いに位置し、東西280cm、南北75cm以上、深さ10cmを測る土壌である（第77図）。

第78図-1は、ミニチュア土製品の軒丸である。三ツ巴文を施し、裏面には指頭圧痕がみられる。直径6.7cm、厚さ1.3cmを測る。2は、土師質土器焙烙である。口径（推）25cmを測る。口縁部から底部にかけて、丸みをおびて屈曲する。口縁部内外面は横ナデ調整、底部内面はナデ調整、底部外面は未調整で離れ砂がみられる。胎土にクサリ礫を含み、底部に煤が付着している。

出土遺物から概観すると、18世紀前半の時期と考えられる。



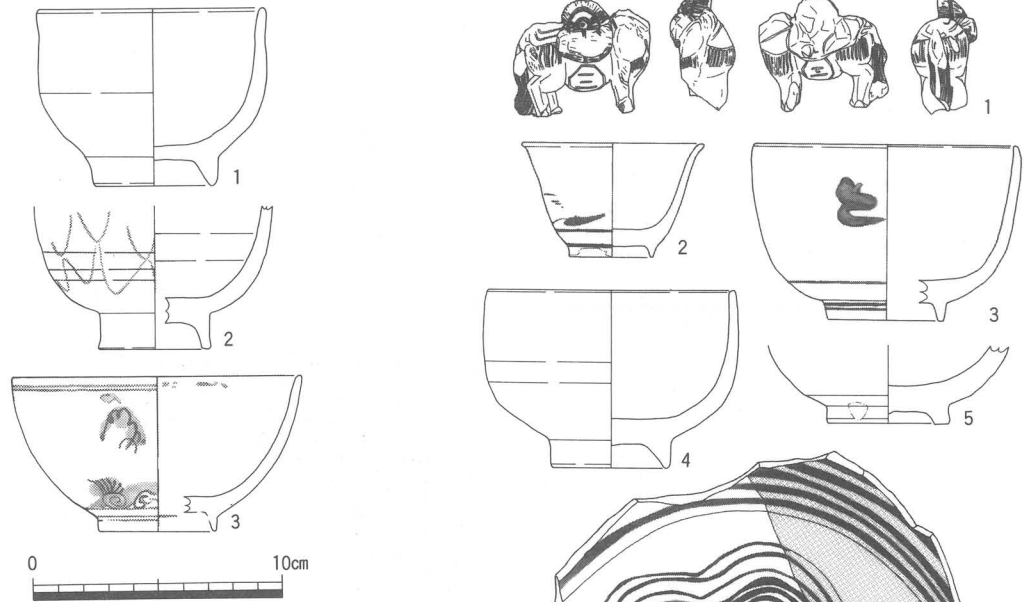
第79図 II-B区SK113・114遺構図

SK113・114

SK113は、調査区の中央部に位置し、東西500cm、南北130cm、深さ20cmを測る。SK114は、調査区西部に位置し、南北340cm、東西約200cm、深さ40cmを測る（第79図）。それぞれ大土壌である。

第80図-1は、献上手唐津碗である。口径（推）9cm、器高7.1cm、高台径4.6cmを測る。内外面に貫入がみられ、高台畳付は露胎である。2・3は、肥前磁器である。2は、一重網目文碗である。高台畳付は露胎である。3は、染付碗である。口径（推）11.6cm、器高6.2cm、高台径（推）4.6cmを測る。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年によると、1・3はIV期、2はIII期に属する。従って、17世紀後半～18世紀前半の時期と考えられる。

第81図-1は、土人形の俵積み馬である。合わせ型による成形である。合わせ目は、ヘラケズリ調整、表面には、ドロキラが残存する。2・3は、肥前磁器である。2は、染付小坏である。口径（推）7.2cm、器高4.6cm、高台径（推）3.4cmを測る。3は、染付碗である。口径（推）10.5cm、器高7cm、高台径（推）4.6cm



第80図 II-B区SK113出土遺物

を測る。4は、献上手唐津碗である。口径9.8cm、器高7.1cm、高台径4.6cmを測る。内外面に貫入がみられ、高台畳付は露胎である。5は、唐津焼碗である。内面は施釉、外面は無釉である。6は、二彩手唐津鉢である。高台畳付及び高台内は、露胎である。大橋康二氏の編年によると、2・4・6はIV期、3はIII期、5は、II-1期に属する。

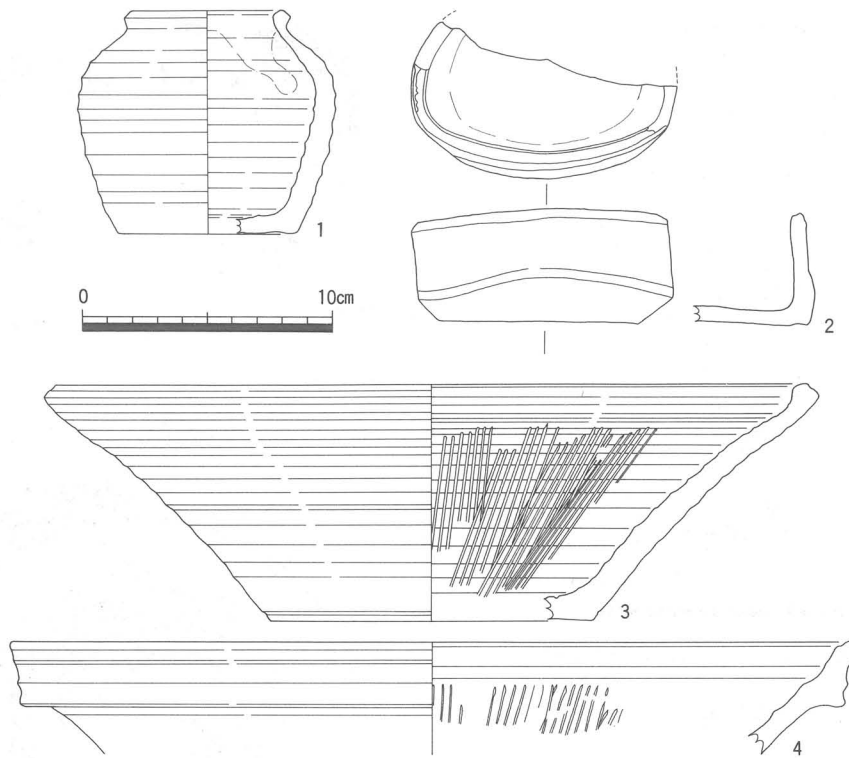
第82図-1~4は、丹波焼である。1は、小壺である。口径(推)6cm、器高9cm、底径(推)7.2cmを測る。2は、鉢である。体部外面及び口縁部内面に掛けて鉄釉を施す。3・4は、播鉢である。3は、口径(推)

30cm、器高9.4cm、底径(推)12.8cmを測る。7本単位の播目を施す。4は、口径(推)33.6cmを測る。大平茂氏の編年によると(参考文献2)、3はIV型式(17世紀中葉)、4はVIII型式(18世紀中葉)に属する。

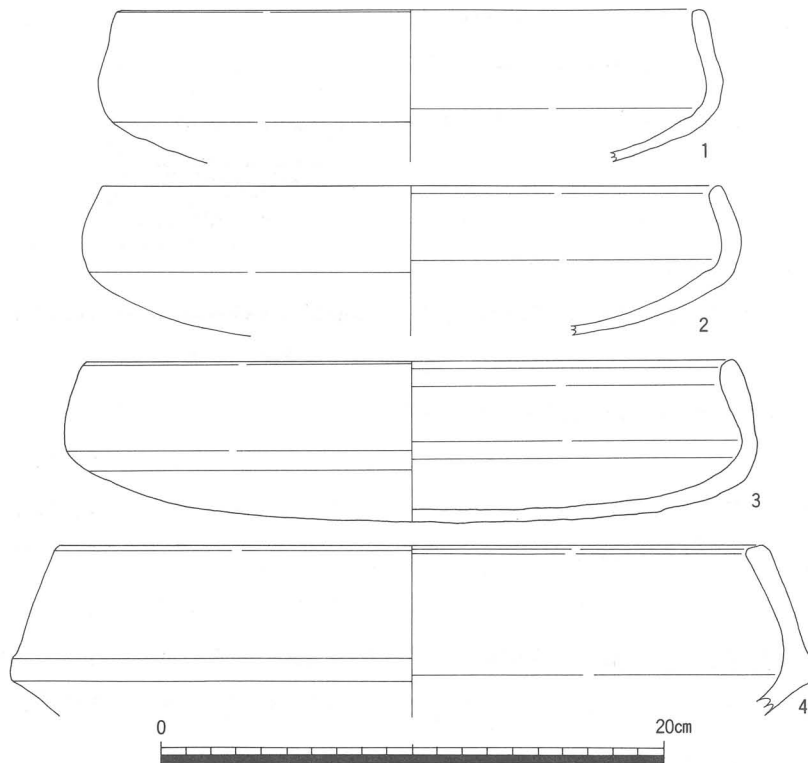
第83図1~4は、土師質土器焙烙である。1は、口径(推)23.4cmを測る。2は、口径(推)24.6cmを測る。3は、口径26cm、器高6.4cmを測る。2・3は、口縁部外面に煤が付着している。4は、口径(推)28cmを測る。1~3は、口縁部から底部にかけて、丸みをおびて屈曲するタイプである。いずれも、口縁部内外面は横ナデ調整、底部内面はナデ調整、底部外面は未調整で離れ砂がみられる。4は、口縁部が直立し、口縁部と底部との境目がはっきりしているタイプである。口縁部内外面は、横ナデ調整、口縁部外面と底部外面との境目を面取りしている。

第84図1~3は、瓦質土器である。1は、獣足である。火鉢の脚部と考えられる。脚高は、12.1cmを測る。直径0.9cmの穿孔を有する。2~3は、火鉢である。2は、脚部を有し、内外面にドロキラが残存する。3は、口径30cmを測る。口縁部内面に煤が付着する。4は、三ツ巴文軒丸瓦である。瓦当部径14.3cm、連珠数13個を数える。

出土遺物から概観すると、17世紀後半から18世紀中葉頃までの時期と考えられる。

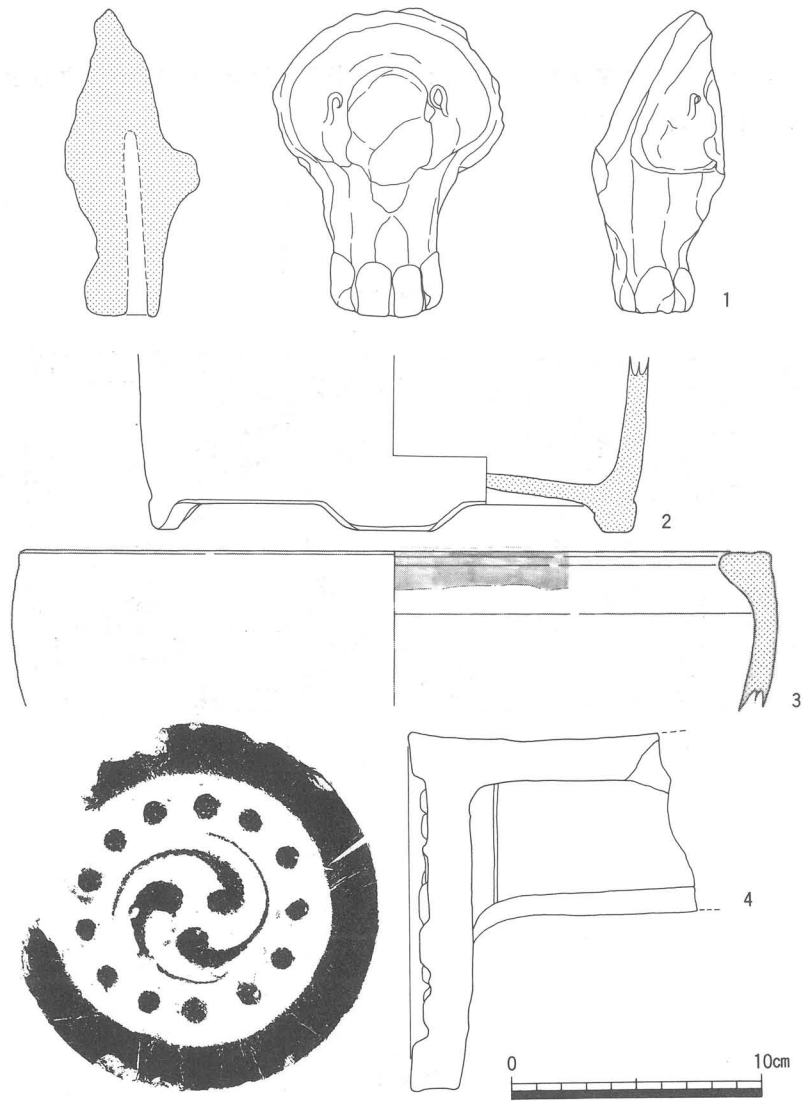


第82図 II-B区SK114出土遺物(2)



第83図 II-B区SK114出土遺物(3)

以上の遺構はいずれも、1次面のものである。また、地山を直接掘り込んで土を採集したらしい土取穴の遺構を検出した。約500cmの正方形プランを示し、その中には掘形に杭を打ち、外側に壁の崩落をふせぐために板をうちつけたものも見られ、地下室の可能性も想定される。これらは、いずれも土取りをした後、しばらくして暗灰黄色粘質土で一時期に埋められている可能性が高い。



第84図 II-B区SK114出土遺物(4)

6. III区の遺構と遺物

基本層序

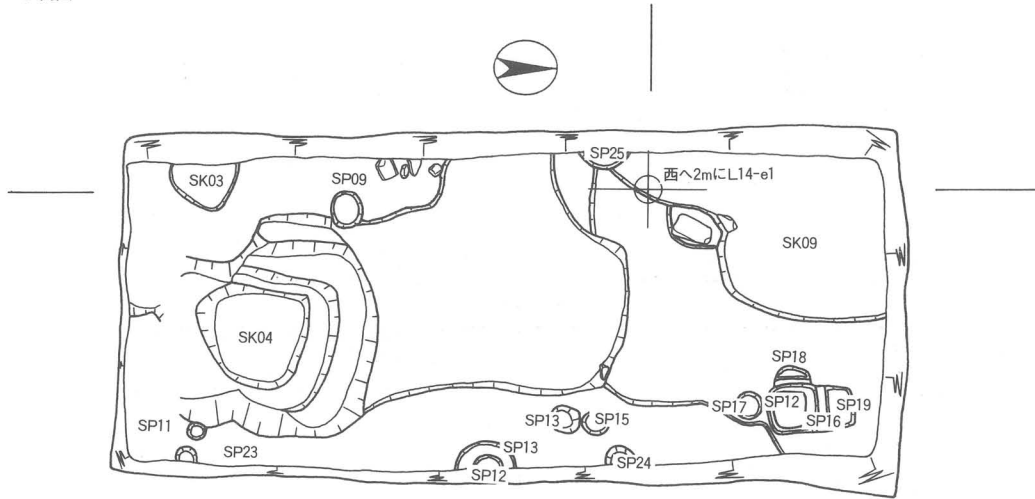
この地区は残存状況が良く、調査面積に比して遺構が密集していた(第85・86図)。III区では、土間の張り変えが比較的容易に観察し得、3回の張り変えを確認した。さらに、地山より直接掘り込んだ遺構も検出でき合計4面の遺構面を確認した。

土層断面を観察すると(第87図)、第1次面は、現地表面より下方に20cmで検出し、5cmのカーボン混じり粘土を盛って土間としている。第2次面は、1次面より下方15cmで検出し、5cmのカーボン混じり粘土を1次面同様盛って土間としている。第3次面は、2次面より下方に25cmで検出し、5cmのカーボンを大量に含む粘土を2次面同様盛って土間としている。第4次面は、3次面より下方に15cmで検出したが、1～3次面とは異なり粘土を張った土間は存在せず、地山より直接掘り込んだ遺構面である。地山面は、O.P.=17.200mを測る。

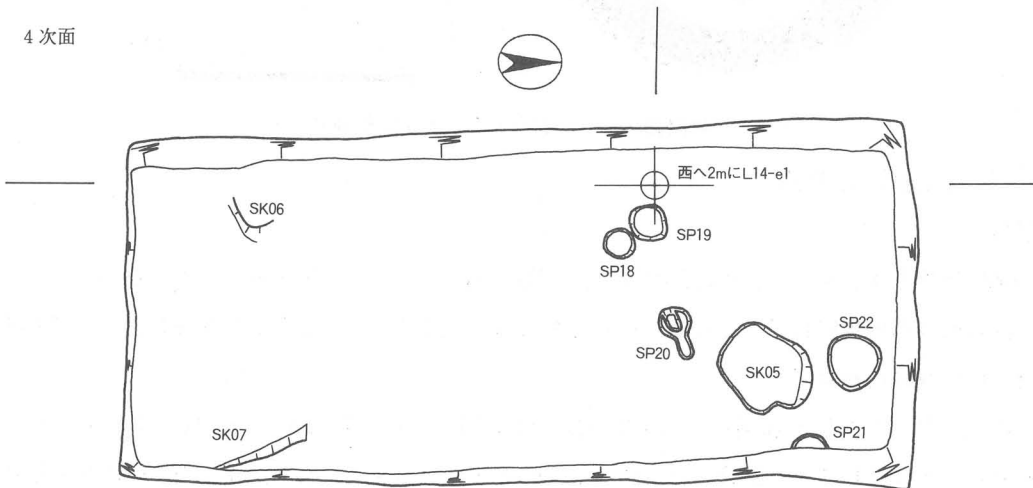
次に各面での遺構の様相を記す。1次面では、礎石1カ所と土壇1カ所を検出し得た。2次面では、発掘区の西側に6カ所の柱穴を検出した。いずれも径約30cm前後を測る。SP06南側の土間直上より完形の土師質土器灯明皿が出土した。3次面では、発掘区の北側に9カ所、南東部に2カ所、南西部に土壇2カ所・柱穴1カ所を検出した。多くは、2次面同様約20～30cmの円形柱穴であるが、その中でSP12が興味深い。4

次面では、地山から直接掘り込む土壌 5 カ所・柱穴 6 カ所を検出し得た。いずれも遺物は全く出土せず、時期不明である。土間は確認し得なかった。

3 次面

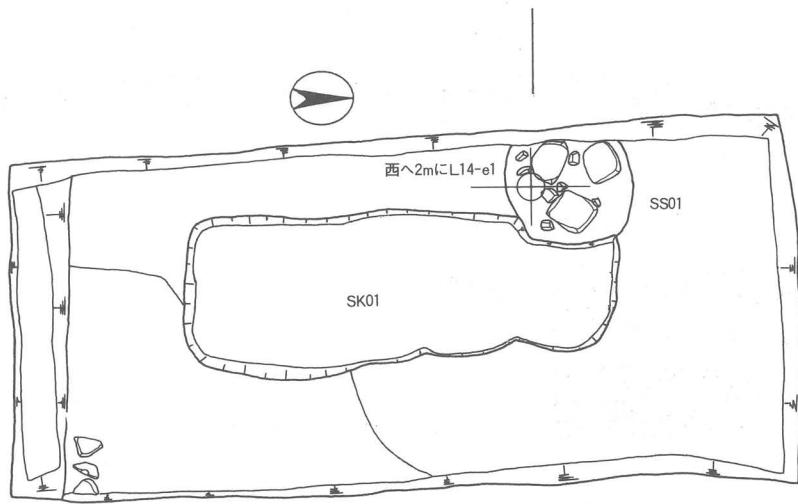


4 次面

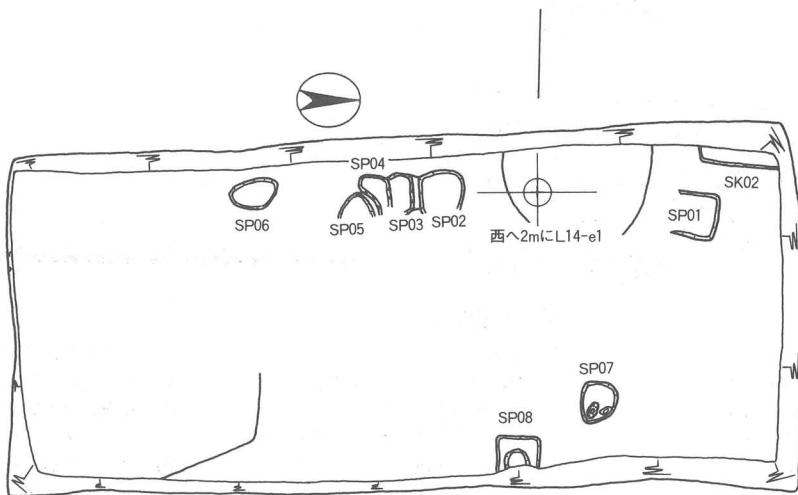


第85図 第45次調査Ⅲ区第3・4次面遺構全体図

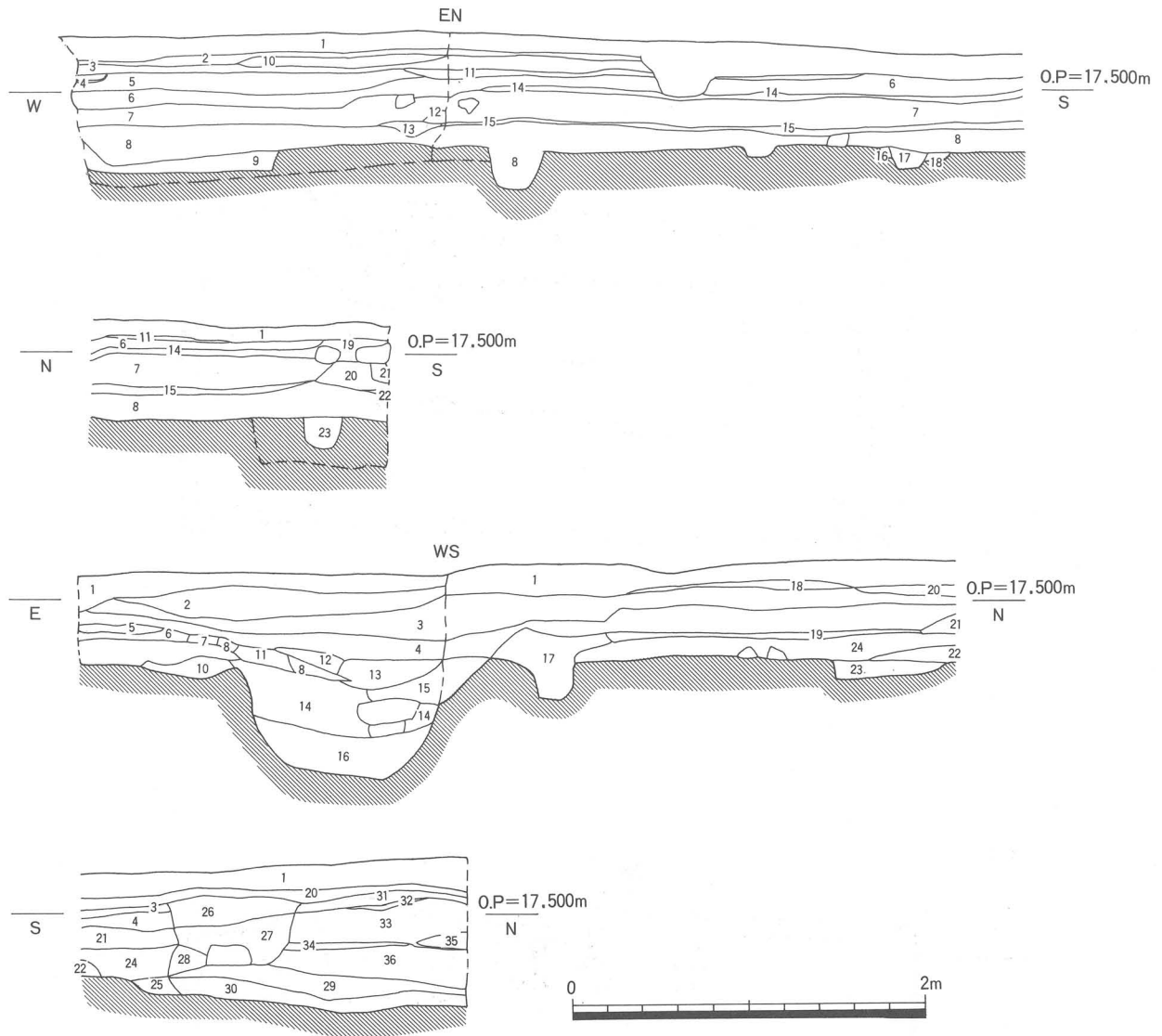
1次面



2次面



第86図 第45次調査Ⅲ区第1・2次面遺構全体図



東壁・北壁土層

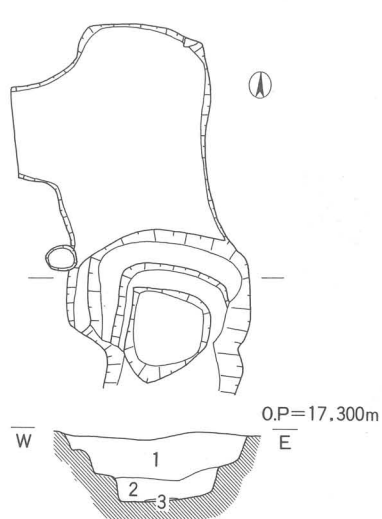
1. 攪乱
2. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
3. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
4. にぶい黄色土層 2・5 Y6/4
5. 褐色砂質土層 10Y R4/4
6. 黄褐色砂礫層 2・5 Y5/3
7. にぶい黄色砂礫層 2・5 Y6/4
8. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
9. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
10. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3
11. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3
12. オリーブ褐色粘土層 2・5 Y4/6
13. 黒褐色炭化物層 2・5 Y3/2
14. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
15. 褐色粘質土層 10Y R4/6
16. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
17. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
18. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3
19. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
20. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
21. にぶい黄色砂礫層 2・5 Y6/4
22. にぶい黄色粘質土層 2・5 Y6/4
23. オリーブ褐色粘土層 2・5 Y4/6

西壁・南壁土層

1. 攪乱
2. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4
3. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
4. にぶい黄色粘質土層 2・5 Y6/4
5. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
6. にぶい黄色砂礫層 2・5 Y6/4
7. 明黄褐色土層 2・5 Y6/6
8. 黄色粘質土層 2・5 Y7/8
9. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
10. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
11. にぶい黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4
12. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8
13. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
14. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/8
15. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
16. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
17. にぶい黄色粘質土層 2・5 Y6/4
18. 黄褐色砂礫層 2・5 Y5/4
19. 橙色粘質土層 7・5 Y R6/8
20. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
21. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6

22. にぶい黄橙色粘質土層 10Y R6/4
23. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8
24. 明黄褐色土層 2・5 Y6/6
25. にぶい黄褐色粘質土層 10Y R5/4
26. 黄褐色土層 2・5 Y5/6
27. 褐色粘質土層 10Y R4/4
28. にぶい黄橙色粘質土層 2・5 Y6/4
29. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
30. 黒褐色粘土層 10Y R2/2
31. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
32. にぶい黄色土層 2・5 Y6/4
33. 黄褐色砂礫層 2・5 Y5/3
34. にぶい褐色粘質土層 7・5 Y R5/4
35. にぶい黄色砂礫層 2・5 Y6/4
36. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4

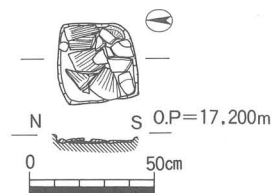
第87図 III区北壁・南壁・東壁・西壁土層図



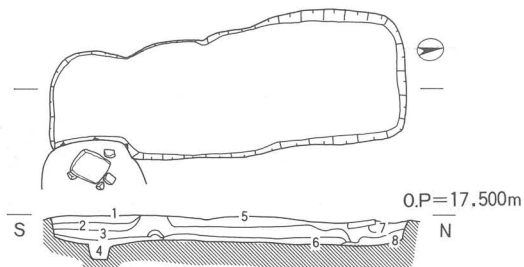
1. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8
2. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
3. オリーブ褐色泥質土層 2・5 Y4/4



第88図 III区SK04遺構図



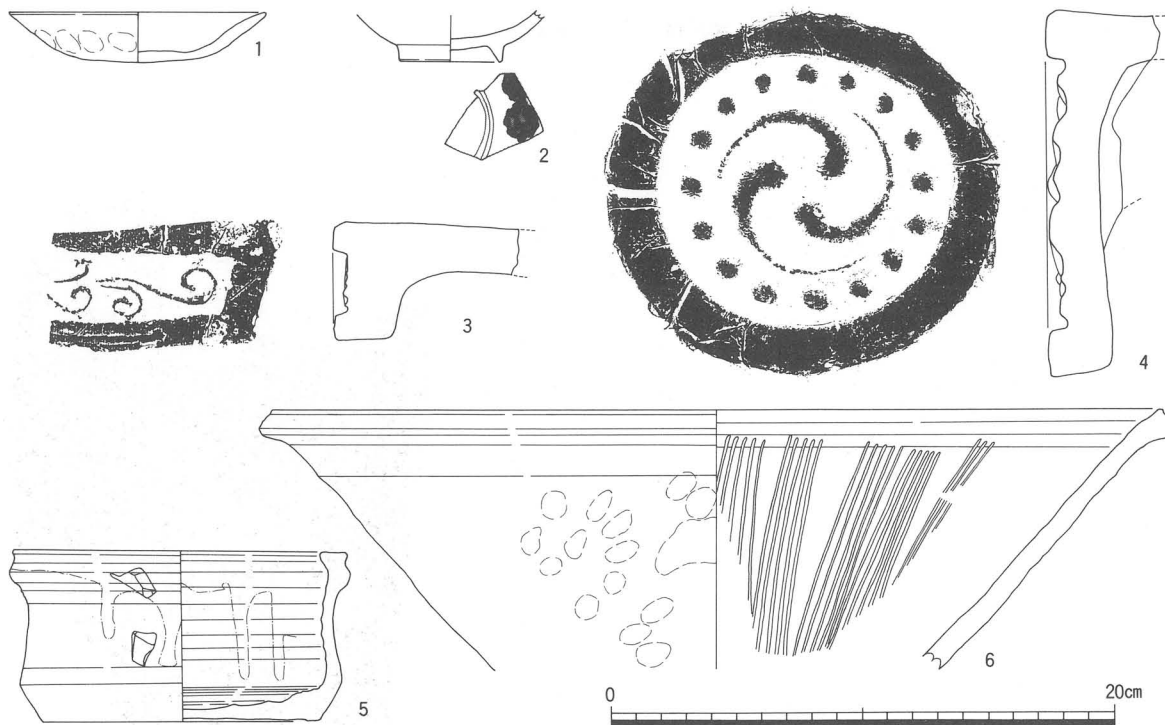
第90図 III区SP12遺構図



1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
2. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8
3. 橙色粘質土層 7・5 YR6/8
4. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6
5. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6
6. 褐色粘質土層 7・5 YR4/6
7. にぶい黄色砂質土層 2・5 Y6/4
8. 褐色粘質土層 10Y R4/6



第92図 III区SK01遺構図

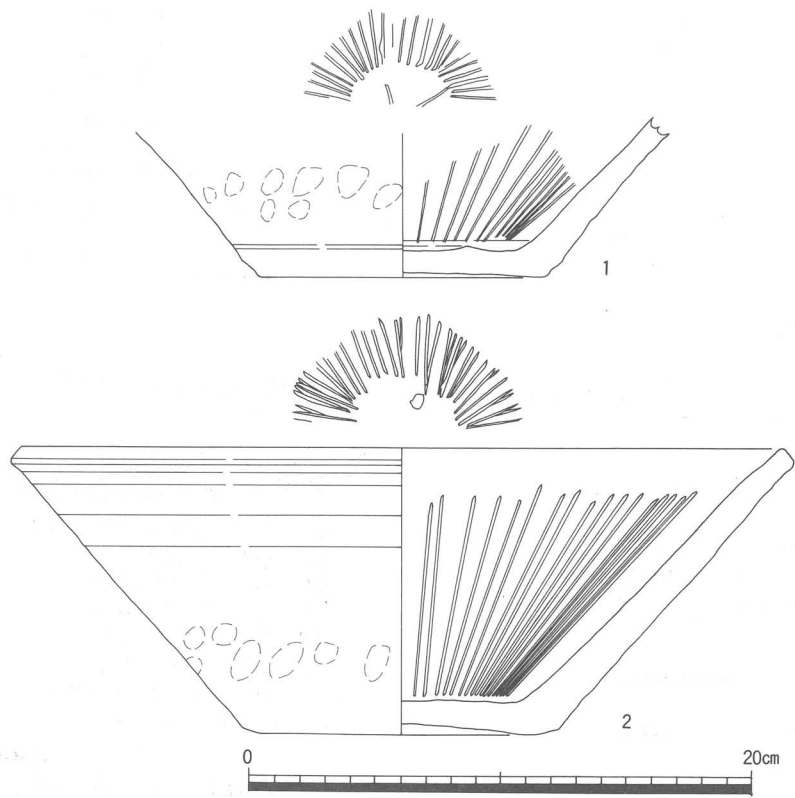


第89図 III区SK04出土遺物

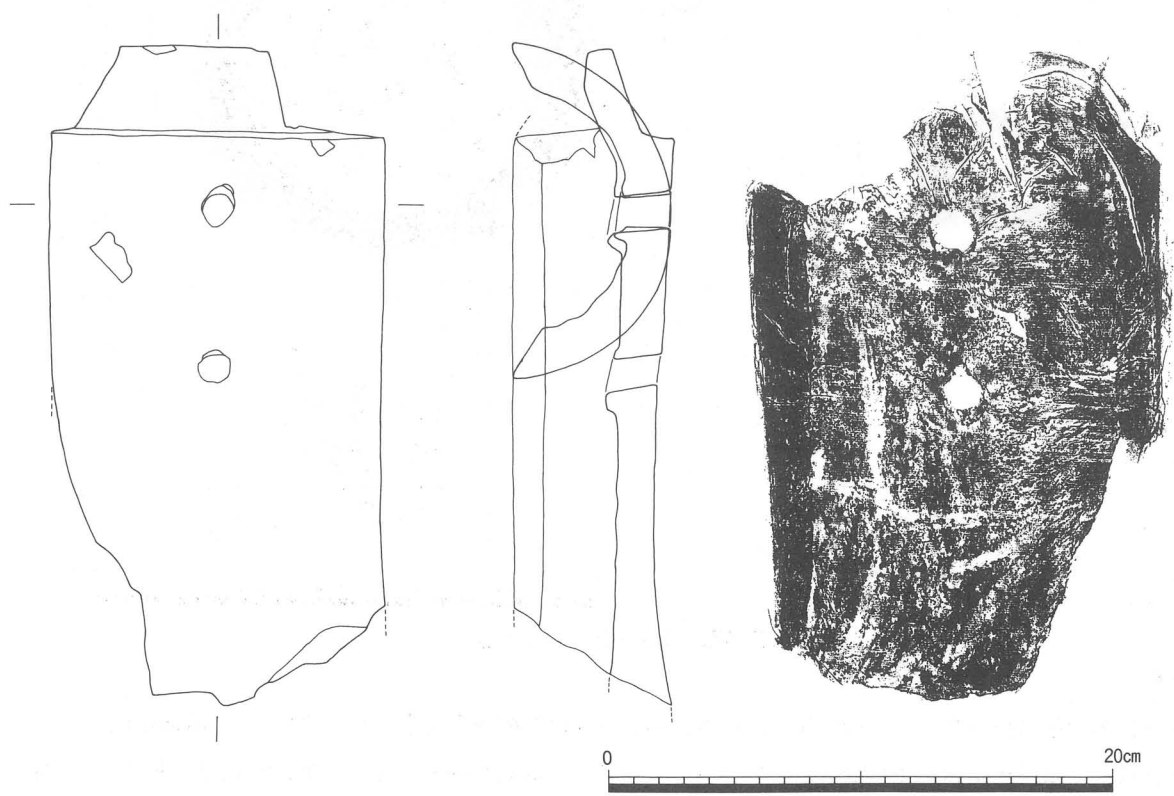
SK04

調査区の南端に位置し、140cm×120cm、深さ50cmを測り段状の掘形をもった土壌である（第88図）。

第89図-1は、土師質土器皿である。口径（推）10.2cm、器高2cmを測る。淡黄色2.5Y8/3を呈し、口縁部内外面は、横ナデ調整する。体部外面に指頭圧痕がみられる。2は、肥前磁器染付碗である。菊花のコンニャク印判文を施す。3は、唐草文軒平瓦である。高さ4.5cmを測る。4は、三ツ巴文軒丸瓦である。瓦当部



第91图 III区S P12出土遗物



第93图 III区S K01出土遗物

の直径14.6cm、連珠数16個を数える。瓦当部全面に煤が付着している。5は、丹波焼鉢である。口径13.2cm、器高6.8cm、底径11cmを測る。外面に把手がついていた痕がみられる。6は、丹波焼播鉢である。口径（推）35.4cmを測る。播目は5本のクシ描、体部外面に指頭圧痕がみられる。大平 茂氏の編年によるとIII型式（17世紀前葉）に属する。

出土遺物から概観すると、17世紀前半から17世紀末頃の時期と考えられる。

SP12

SP12は、一辺約32cmの正方形の柱穴で14cmの柱痕跡を確認し得た（第90図）。基底部には、丹波焼播鉢・瓦を敷いており、柱の沈下を防いでいる。

第91図—1・2は、丹波焼播鉢である。1は、播目が1本びきで、体部外面に指頭圧痕がみられる。2は口径30.4cm、器高11.4cm、底径12.6cmを測る。播目が1本びきで、口縁部が台形を呈する。体部外面下半に指頭圧痕がみられる。口縁部はロクロナデ調整されている。長谷川 真氏の編年によると（参考文献7）、I A₁類（16世紀後半）に属する。

SK01

280cm×100cm、深さ20cmの長方形の土壌で中から大量のカーボンと共に17～18世紀頃の肥前磁器碗・皿、瓦を出土している（第92図）。

第93図は、軒丸瓦の丸瓦部である。全長（残）26.3cm、幅13.4cm、玉縁部長3.3cmを測る。直径1.3cmの釘穴が、2カ所穿孔している。凹面丸瓦部には、コビキB（鉄線引き）痕がみられる。

礎石1

約70cmの円形の堀形を持ちその中に約40cm大の方形の扁平な石を3個据えている。堀形の基底は地山にまで達し、2段積みである。SK01を切っている。

第3章 結 語

今回の調査では、従来知られていない、いくつかの新しい事実が判明した。以下箇条書きにして提示する。

1. I-A区では、遺構の残存状況が良くなかったが、若干のIII期の遺構を検出した。それらは、いずれも、19世紀前半頃に比定される。さらに、地山面が、西に行くに従って下がっていくことが判明した。当該区の北に隣接する法巖寺境内には、土塁の一部が現存するが、調査区域内では、基底部分などの痕跡は検出できなかった。
2. I-B区では、2面の遺構面を検出した。部分的に土間と3面の遺構面を確認した。
3. I-C区では、当時の家一軒分の敷地を推測する遺構を検出した。S D04・05・06で、東西10m・南北5m以上を測る空間が区画されたものである。年代は19世紀後半頃のもので、昭和まで継続して使用されたものと考えられる。S D04は、既に2次面の19世紀前半で成立しているが、第2図で示す天保十五年絵図の屋敷割線と整合する。
4. II-A区では、「三軒寺」前東西道路に平行する屋敷境塀の基礎S A01・02と排水溝S D03をそれぞれ等間隔で約8mごとに検出した。東の南北道路に入口をもつ家並であることが判明する。
5. II-B区では、18世紀後半頃にS K113のように地山を直接長方形に掘り込んだ遺構が検出され現地説明会時には水田の可能性を指摘したが、S K113真ん中の掘り残し部分を屋敷境と考え、今回は、土採り穴の後にごみ捨て穴に利用したと考えたい。
6. 17世紀初頭頃に宮の前地区中心であった町屋が17世紀半ば頃には、南北道路沿いに既に南方にも遺構が拡散していた。
7. II-A区のS K80やIII区の焼土層が、遺物の時期から想定すると、18世紀前半頃であり、中少路村から北之口町へかけ439軒が消失する大火があった記事や元禄元年に井筒町から出火し160軒が消失するとした記事と整合する可能性がある。

参考文献

1. 大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社 1989年
2. 大平 茂「下相野窯址—近世丹波焼の調査—」『近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XVII』兵庫県教育委員会 1992年
3. 川口宏海・前川 要『岡城跡・伊丹郷町II—JR伊丹駅前市街地再開発に伴う発掘調査報告書』大手前女子大学史学研究所 1992年
4. 嶋谷和彦「堺環濠都市遺跡発掘調査報告—宿院町東4丁S K T14地点・調御寺跡—」『堺市文化財調査報告 第20集』堺市教育委員会 1984年
5. 白神典之「堺摺鉢について」『堺環濠都市遺跡(S K T79)発掘調査報告 堺市文化財調査報告第37集』堺市教育委員会 1988年
6. 梶崎彰一編「丹波」『日本陶磁全集11』中央公論社 1977年
7. 長谷川 真「丹波系播鉢について」『中近世土器の基礎研究IV』日本中世土器研究会 1988年
8. 森田克行他『摂津高槻城本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1984年

第4章 付 編

元禄七年伊丹郷町絵図からみた検出屋敷地の性格

前川 要

この節では、今回の調査で検出した屋敷地の性格を考察してみたい。

第3章では、屋敷境の溝が天保十五年絵図と整合することを示したが、この絵図には残念ながら職業が記されていない。ここでは、屋敷地の大きさから階層的な差異をグルーピングして検討し、検出屋敷地の性格を推定したい。

1. 絵図データの入力方法

まず、元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町解説図（以下、『元禄絵図』と略称）を使い、街区毎にAからXまでとaからcまでとで、分割してさらに1番から順に内番として長屋をひとまとまりとして番号をふっていった（第1図）。長屋一戸ずつの間口は、同じ大きさとみなして等分して数値を割りふった。柱間寸法を1間京間6尺5寸として、データ入力した。ソフト・ウェアは、(株)管理工学研究所『桐・Ver4.0』を利用した。

区分項目のAは本百姓、Bは屋敷主、Cは半役百姓を示す。間口、奥行、職業が不明なものは空欄にしてある。データ件数は500件あった（第2図）。

2. 数値データ、散布図データから判ること

『伊丹市史』第2巻では、町場の職業構成について、同じく『元禄絵図』の数量的分析から、1多くの村々において四割を越える家が日用（日やとい）で生活していること。2後家はほとんどが糸引き（糸つむぎ）を職業としていること。3その他酒造関係、米・綿・木綿の取引関係、馬借関係の職業が多いこと。などが挙げられている。

第2図は間口の大きい順に屋敷を並べたものである。第1位から第20位まで見れば、20位の仕立やを除外して全て、寺・庄屋・町代・年寄・医師である。逆に、第343位の1間=1.95m以下では、大半が日用・糸引である。

次に、第3図は、それぞれ職業別の屋敷地規模の散布を示したものである。1は日用、2は糸引、3は庄屋である。1の分布は、間口が1間と2間にある程度かたまり約1から8m、奥行が12間半にピークをもって約4から50mと広がっている。2の分布は、間口が約1から6m、奥行が約10から30mと1の分布よりもさらに小規模になっている。1や2に対して、3は、間口が約8mから21m、奥行が約24mから40mと全く異なる大規模な領域を示す。

図示はしていないが、伊丹郷町特産の酒作りは、第63位、第100位、第195位とあまり大規模ではない。これは、酒蔵をもった大きな屋敷割りのものは大半がこの絵図の領域外に存在し、特に東側南北道路に沿っていたと想定されるからである。

3. 検出屋敷地の性格

それでは、今回の調査で検出した屋敷地はどの程度の階層であろうか。

I—B・C区で検出した屋敷境の遺構とII—A区中ほどII—B区西端で検出した屋敷境の遺構は、いずれも19世紀代であり、百年以前の18世紀初頭の『元禄絵図』と階層構成が異なっている可能性もあるが、ここではその点を捨象して分析する。

前者の大きさは、推定間口が約6.20m、奥行が約17.40mを測り、後者の大きさは、間口が約7.60m、奥行



第1図 元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図地区割図（『伊丹古絵図集成（本編）』に加筆）

柳沢吉保領伊丹郷町絵図

地区	地区内番	名前	間口	奥行	職業	区分	
1	X	2	牛通天皇	117	146.25	寺	
2	E	1	長兵衛 喜兵衛	35.82	7.11	神子	
3	a	13	牛通天皇	29.25	54.6		
4	N	14	大進寺	25.71	27.3	寺	
5	S	4	伊兵衛	24.7	23.76		
6	I	7	庄左衛門	24.03	34.125		A
7	N	15	正善寺	23.4		寺	
8	U	3	二郎左衛門	21.45	21.45	庄屋	A
9	J	27	善兵衛 佐兵衛	19.5	18.525	町代	B
10	K	7	二郎右衛門	18.525	5.52		A
11	K	2		17.4	49.83		
12	G	3	七左衛門	15.96	53.37	年寄	A
13	R	13	久左衛門	15.96	31.2	庄屋	A
14	d	5	加右衛門	15.8	19.5	年寄	A
15	b	1	八幡	15.8	11.7		
16	J	8	与右兵衛	14.97	21.12		A
17	L	7	三郎右衛門	14.73	25.35		A
18	X	1	久兵衛 善三	14.25	20.58	医師	B
19	R	19	行善寺	13.68	19.86	寺	
20	J	1	与兵衛	13.65	32.82	仕立ヤ	C
21	a	14	若宮八幡	13.65	27.3		
22	Z	2	三郎兵衛	13.65	19.5	田圃割ケリ	A
23	J	19	久兵衛	13.65	16.27	番ヤ	A
24	S	1	彌兵衛	13.65	9.75		A
25	J	1	惣左衛門	13.65		神子自度	C
26	C	3	与右衛門 仁左衛門	13.03	31.74	本茶ヤ	B
27	E	9	三郎右衛門	12.875	55.575	年寄	A
28	R	6	久右衛門	12.45	27.66		A
29	a	1	吉兵衛	11.7	44.85	備かいヤ	A
30	N	8	新兵衛	11.4	23.4		A
31	N	2	彌兵衛	10.83	19.5		A
32	M	4	又兵衛家	10.725	35.1	糸引	
33	M	4	手塚	10.725		小間物ケリ	B
34	T	1	長次郎	10.17	15.18		A
35	a	4	善兵衛	9.75	44.85	年寄	
36	b	5	善一右衛門	9.75	41.925	庄屋	A
37	d	3	久兵衛	9.75	29.25		A
38	a	9	大右衛門	9.75	19.74		A
39	b	5	庄左衛門	9.75		小間物ケリ	
40	N	7	太郎右衛門	9.8	22.89		A
41	I	8	善右衛門	9.8	21.45		A
42	N	4	久左衛門	9.8	19.5		A
43	U	5	市郎右衛門	8.775	380.25		A
44	Z	5	作右衛門	8.775	46.8	日用	
45	b	6	字右衛門	8.775	39		A
46	S	3	五兵衛	8.775	23.4		A
47	Y	8	三郎右衛門	8.775	22.65	庄屋	A
48	Z	5	彌兵衛	8.775		日用	
49	W	2	与次右衛門	8.4	25.35	米ヤ	A
50	a	12	船左衛門	8.34	33.51		A
51	G	6	二郎右衛門	8.22	28.92		A
52	b	4	与右衛門 久兵衛	8.16	43.62	日用	A
53	K	5	市右衛門	8.16	21.45		A
54	d	4	善一郎家	7.8	50.7		
55	a	11	二郎右衛門	7.8	31.2	年寄	A
56	J	9	吉兵衛	7.8	24.84		A
57	J	15	庄右衛門	7.8	23.4		A
58	S	5	忠右衛門	7.8	20.475		A
59	d	4	庄兵衛 市郎兵衛	7.8			A
60	d	6	市兵衛 善市郎家	7.8		糸引	A
61	R	2	忠兵衛 七郎兵衛	7.8		日用	
62	S	8	忠兵衛	7.65	21.99		A
63	Z	13	龜助 庄兵衛	7.5	23.4	酒作り	B
64	Z	14	又兵衛	7.5	10.95	馬持	A
65	K	8	久兵衛	7.49	17.22		
66	R	9	三郎右衛門 妙法	7.47	33.69	蓮心	A
67	G	2	三郎右衛門 太兵衛	7.4	15.6	日用	
68	Y	10	長兵衛	7.27	22.425	兼物ヤ	A
69	Y	10	長兵衛 兼兵衛	7.27		田圃割ケリ	B
70	Y	10	八兵衛	7.27			
71	N	13	長兵衛	7.15	23.4	庄屋	A
72	N	13	作兵衛	7.15		日用	
73	N	13	六左衛門	7.15		たまりヤ	
74	N	13	長兵衛 三右衛門	7.15		古手ケリ	B
75	J	2	清右衛門	6.975	15.6		A
76	J	2	太郎右衛門	6.975			A
77	U	2	市右衛門	6.931	17.515		A
78	c	4	久右衛門	6.825	79.35		A
79	S	2	作兵衛	6.825	27.3	兼ヤ	
80	S	2	彌兵衛 吉右衛門	6.825	23.4	日用	B
81	W	1	久右衛門	6.825	19.5	油ケリ	A
82	T	4	清藏	6.825		日用	
83	T	4	勘四郎 庄兵衛	6.825		日用	B
84	J	10	吉左衛門	6.69	24.84		A
85	N	10	市郎右衛門 六兵衛家	6.66	14.625	糸引	B
86	N	10	市郎右衛門	6.66			A
87	W	6	九右衛門	6.6	22.425	木桶ケリ	A
88	W	7	百兵衛	6.45	22.425	こんヤ	A
89	T	5	庄吉	6.39	26.07	馬持	A
90	b	3	善一右衛門 佐兵衛	6.337	40.95	日用	B
91	b	3	十三郎	6.337		日用	
92	d	1	七兵衛	6.337			A
93	d	1	六右衛門	6.337		庄屋	A
94	d	2	太右衛門	6.337			B
95	d	2	太右衛門 六兵衛 治兵衛家	6.337		日用 糸引	
96	J	12	市兵衛	6.335	33.87		A
97	J	12	市兵衛 六兵衛	6.335		日用	B
98	a	2	清右衛門	6.25	23.4		A
99	Z	10	善右衛門 長兵衛	6.15	23.4	日用	B
100	V	1	惣左衛門	6.15	21.45	番ヤ	A
101	J	3	与右衛門	6.03	21.45		
102	Z	1	太兵衛	5.85	48.75		A
103	Z	4	善右衛門	5.85	46.8		A
104	Z	11	七左衛門	5.85	44.85		A
105	C	1	太兵衛 善十郎	5.85	39	日用	B
106	R	12	庄兵衛	5.85	34.125	年寄	A
107	a	8	六兵衛	5.85	33.15		
108	J	5	平右衛門	5.85	24.375	あらかさヤ	A
109	a	6	庄左衛門	5.85	22.95		
110	a	5	善左衛門	5.85	21.45		A
111	N	3	三郎右衛門	5.85	19.5		A
112	N	11	善兵衛	5.85	15.6		A
113	d	7	御藏	5.85	9.75		
114	C	1	太兵衛	5.85			
115	R	12	庄兵衛 吉兵衛	5.85		日用	B
116	W	5	勘左衛門 太兵衛	5.833		兼物ヤ	B
117	W	5	長右衛門	5.833		ござ盛	
118	W	5	安三衛門	5.833		モメケリ	
119	H	2	九兵衛 七兵衛家	5.775	32.175	糸引	B
120	H	2	十兵衛	5.775		日用	
121	N	9	久右衛門	5.7	23.4	年寄	A
122	N	9	三郎右衛門 五郎兵衛	5.7	17.55	日用	B
123	L	1	長兵衛	5.595	23.07		
124	L	1	仁右衛門 長右衛門 九兵衛	5.595		小間物ケリ	B
125	R	15	太郎兵衛	5.415		日用	
126	R	15	八兵衛 利兵衛家	5.415			B
127	R	15	八兵衛	5.415			
128	J	16	善兵衛	5.363	24.24	年寄	A
129	J	16	作兵衛	5.363		日用	
130	U	4	善右衛門	5.362	39	年寄	A
131	b	2	又兵衛	5.362	29.25		A
132	W	8	又右衛門 作兵衛	5.362	25.35	日用	
133	b	2	又兵衛 善兵衛	5.362		日用	B
134	U	4	勝右衛門	5.362			A
135	W	8	八兵衛	5.362		日用	
136	W	8	新兵衛家	5.362		糸引	
137	W	8	五兵衛	5.362		町代	
138	S	6	清右衛門	5.34	22.71		A

第2図 間口順位表規模(1)

が約30.6mを測る。これを散布図中におとしたのが、第3図1である。これを見れば、糸引の分布域でも理解できるが、むしろそれよりもやや規模の大きい日用とみたほうがよさそうである。

これを第2図の間口規模順位表でみれば、前者が第98位、後者が第63位ということになる。これらの統計は『元禄絵図』から百年の間に屋敷割りの細分 (=長屋化) が進行していた可能性もあり一概に言えない。しかしある程度の傾向は示していよう。

柳沢吉保領伊丹郷町絵図

地区	地区内番	名前	間口	奥行	職業	区分	地区	地区内番	名前	間口	奥行	職業	区分	
139	M	1	七兵衛	5.2	27.3	日商	208	K	1	安右衛門 喜左衛門	3.9	21.45	大工	B
140	M	1	作兵衛	5.2		日商	209	Y	6	利右衛門	3.9	19.5	聖ヤ	A
141	M	1	孝二兵衛	5.2		孝養	210	I	5	豊右衛門	3.9	12.24		A
142	J	23	藤右衛門	5.16	27.3		211	c	1	新左衛門	3.9		小間物ウリ	
143	K	8	久兵衛 六兵衛 七兵衛	5.16	22.425		212	c	1	藤右衛門	3.9		日商	
144	K	4	惣左衛門 喜右衛門	5.145	22.71	日商	213	E	3	普兵衛	3.9		庄屋	
145	K	4	宗左衛門	5.145		惣屋	214	E	5	三郎右衛門 七兵衛	3.9		日商	B
146	B	2	久兵衛	5.055	24.12	日商	215	E	5	半右衛門	3.9		日商	
147	B	2	久兵衛 治右衛門	5.055		日商	216	I	5	治兵衛	3.9		聖ヤ	
148	S	7	五郎兵衛	4.98	23.4		217	J	13	五郎兵衛	3.9			B
149	J	6	久兵衛	4.965			218	O	4	八兵衛 喜衛	3.9		医師	B
150	J	6	長右衛門後家	4.965		永引	219	O	4	市兵衛後家	3.9		永引	
151	Z	8	平兵衛	4.875	42.9	足袋ヤ	220	R	16	まつ	3.9		永引	
152	E	8	三郎右衛門 市兵衛	4.875	27.3	からかさヤ	221	R	16	勇兵衛	3.9		運心	
153	G	7	茂右衛門 作兵衛	4.875	23.4	日商	222	R	16	八右衛門	3.9		日商	
154	U	1	久左衛門	4.875	17.04		223	R	16	藤右衛門 長兵衛	3.9		日商	B
155	Q	1	市兵衛	4.875	14.37	ござ焼	224	H	3	太郎右衛門 利兵衛	3.738		ござウリ	B
156	Z	8	治兵衛	4.875		治ウリ	225	H	3	利右衛門	3.738		古手ウリ	
157	G	7	茂右衛門	4.875			226	H	3	長兵衛	3.738		日商	
158	Q	1	五兵衛	4.875		味噌ウリ	227	H	3	普兵衛後家 勇次兵衛後家	3.738		永引	
159	Q	1	久左衛門	4.875		治ウリ	228	H	3	仁右衛門	3.738		夜番	
160	Q	1	喜左衛門	4.875		日商	229	H	3	七左衛門	3.738		産給	C
161	C	2	五兵衛	4.816	42.57	日商	230	T	3	六兵衛	3.49	27.3		
162	C	2	伝兵衛	4.816			231	T	3	三郎	3.49	24.12		C
163	C	2	七兵衛	4.816		惣屋	232	T	3	加右衛門	3.49		日商	
164	C	2	宗左衛門 市兵衛	4.816		日商	233	J	11	庄右衛門 庄兵衛	3.413	24.12	日商	B
165	N	5	太郎右衛門 与兵衛後家	4.8	21.45	永引	234	J	17	長右衛門 伝兵衛 吉兵衛	3.413	23.94	日商	A
166	E	6	藤左衛門 久兵衛	4.8		日商	235	G	8	三右衛門	3.413	23.4		A
167	E	6	治兵衛	4.8		日商	236	O	5	八兵衛 治兵衛	3.413	7.8	日商	B
168	N	5	太郎右衛門	4.8		A	237	G	8	三右衛門 利兵衛	3.413		日商	A
169	J	18	伊右衛門	4.71	23.64		238	J	11	五兵衛	3.413		日商	
170	J	18	久左衛門	4.71		日商	239	J	17	五兵衛	3.413		味噌ウリ	
171	J	7	五郎兵衛 九兵衛	4.658	24.66	小間物ウリ	240	O	5	久助	3.413		日商	
172	J	7	九兵衛 五兵衛	4.658		日商	241	L	4	太郎右衛門 七右衛門	3.3			B
173	J	7	治兵衛	4.658		日商	242	S	10	六兵衛	3.27		日商	
174	J	7	よし	4.658		永引	243	S	10	十兵衛 治兵衛	3.27		日商	B
175	J	7	治兵衛	4.658		日商	244	S	10	八兵衛	3.27		日商	
176	A	4	又右衛門 治兵衛	4.62	32.46	水茶ヤ	245	S	10	長次郎	3.27		日商	
177	I	2	藤兵衛 喜左衛門	4.62	25.53	日商	246	W	4	又右衛門 市兵衛	3.225			B
178	A	4	孝右衛門	4.62		水茶ヤ	247	W	4	又右衛門	3.225		馬神	A
179	I	2	浦兵衛 祐孝	4.62		医師	248	T	6	芳兵衛 孫右衛門	3.105	7.2	馬神	B
180	A	2	彦右衛門 治兵衛	4.55	23.4	水茶ヤ	249	T	6	清貞	3.105		運心	A
181	R	1	又右衛門	4.55	14.73	日商	250	J	28	太郎左衛門 作兵衛	3.08	20.475	治ウリ	B
182	A	2	藤左衛門	4.55		日商	251	J	28	さく	3.08		永引	
183	A	2	喜太郎	4.55		日商	252	J	28	太郎左衛門	3.08		庄屋	A
184	R	1	太郎兵衛	4.55		行商寺	253	a	3	九兵衛	2.925	44.85		A
185	R	1	九兵衛後家 仁左衛門後家	4.55		永引	254	a	10	吉右衛門 小兵衛	2.925	40.95	味噌ウリ	B
186	Z	12	七郎兵衛	4.5	46.8		255	R	8	喜左衛門	2.925	29.97		A
187	W	3	藤右衛門	4.5	39	米ヤ	256	L	5	普兵衛	2.925	26.79		A
188	W	3	喜右衛門	4.5		日商	257	I	1	四郎右衛門後家	2.925	25.35	永引	
189	H	1	長右衛門 六右衛門	4.44	32.28	治ウリ	258	a	3	伊兵衛	2.925		田圃ウリ	
190	L	2	与一兵衛 長兵衛	4.388	22.425		259	a	10	作兵衛	2.925		馬番	
191	L	2	惣右衛門後家	4.388		永引	260	a	10	庄兵衛	2.925		日商	
192	B	1	喜助	4.387	24.375	日商	261	I	1	喜右衛門後家	2.925		永引	
193	Y	5	五郎右衛門 伊兵衛	4.387		小間物ウリ	262	I	1	妙尊	2.925		運心	
194	Y	5	惣右衛門	4.387		ゴザヤ	263	I	1	治兵衛 久右衛門	2.925		日商	B
195	B	1	彦右衛門 九兵衛	4.387		酒作り	264	I	1	治兵衛	2.925			A
196	O	6	長兵衛	4.23		日商	265	L	5	太郎兵衛	2.925		日商	
197	O	6	小左衛門	4.23			266	R	8	藤右衛門	2.925			A
198	J	14	藤左衛門 吉兵衛	4.17	29.1	治ウリ	267	D	1	基兵衛 久兵衛	2.838	43.44	日商	B
199	J	14	藤左衛門	4.17			268	D	1	太郎	2.838		日商	
200	K	3	藤右衛門	4.125	22.89	惣屋	269	D	1	庄兵衛	2.838		日商	
201	K	3	藤右衛門 七兵衛	4.125		日商	270	D	1	仁左衛門	2.838		日商	
202	R	10	市兵衛	3.99	33.33	日商	271	D	1	喜太郎	2.838		日商	
203	c	10	坂右衛門	3.99			272	N	12	加兵衛後家	2.785		永引	
204	e	1	長右衛門 太郎兵衛	3.9	79.95	小間物ウリ	273	N	12	七兵衛後家	2.785		永引	
205	G	4	彦右衛門 半右衛門	3.9	33.15	日商	274	N	12	二郎右衛門	2.785		日商	
206	E	3	久兵衛 八兵衛	3.9	28.275	小間物ウリ	275	N	12	喜右衛門	2.785		たたまき	
207	Y	1	惣左衛門	3.9	26.325		276	N	12	長兵衛	2.785		日商	

第2図 間口順位表規模(2)

4. 今回の反省と今後の課題

今回、『桐・Ver4.0』を利用して、筆者の最も興味のある屋敷地の大きさと所有者の職業の相関性について調べたが、面積についてのデータを入力していないため、面積比を出せなかった。さらに本来ならば、道路を挟んだ「町」単位で地区割をすべきであったが、町境が不明瞭であったために、街区ごとにしてしまった。「天保十五年分間絵図」を詳細に検討すれば町境を明確にできるはずであったが、時間切れとなってしまっ

柳沢吉保領伊丹郷町絵図

地区	地区内番	名前	間口	奥行	職業	区分	地区	地区内番	名前	間口	奥行	職業	区分
277	N 12	吉右衛門	2.785		日雇		346	a 7	善左衛門 三右衛門	1.95		牛打蒔	B
278	N 12	惣右衛門 善兵衛	2.785		日雇	B	347	Y 2	太郎兵衛家	1.95		糸引	
279	D 2	惣右衛門	2.73	15.27	日雇		348	I 3	藤兵衛	1.95		日雇	
280	T 2	惣左衛門	2.73	15.18	日雇		349	I 3	伊兵衛	1.95		日雇	
281	T 2	伊兵衛 市兵衛	2.73		日雇	B	350	I 3	五兵衛	1.95		日雇	
282	T 2	かみ	2.73		糸引		351	G 5	善四郎 五兵衛	1.913	29.79	日雇	B
283	T 2	伊兵衛	2.73		馬持	A	352	G 5	たけ	1.913		糸引	
284	T 2	利兵衛	2.73		日雇		353	G 5	善兵衛	1.913		日雇	
285	D 2	五郎右衛門	2.73		日雇		354	G 5	勘四郎	1.913		日雇	
286	D 2	秀進	2.73		運心		355	E 2	与一兵衛 惣右衛門	1.865	28.275	日雇	B
287	D 2	利兵衛	2.73		日雇		356	E 2	六兵衛	1.865		日雇	
288	D 2	八郎兵衛 神門	2.73		運心	B	357	E 2	九右衛門	1.865		日雇	
289	L 6	惣右衛門	2.7	26.79	日雇		358	E 2	善兵衛	1.865		小間物ツリ	
290	J 20	又右衛門 忠兵衛	2.7	15.6	織打	B	359	E 2	太兵衛	1.865		日雇	
291	L 8	長左衛門 久兵衛	2.7		日雇	B	360	E 2	彦右衛門	1.865		かしや	
292	L 6	勘蔵	2.7				361	F 1	長右衛門	1.864	40.53	日雇	
293	J 20	五郎兵衛	2.7		織打		362	F 1	久兵衛	1.864		日雇	
294	A 5	惣右衛門 八兵衛	2.67	35.64	日雇	B	363	F 1	藤右衛門 吉右衛門	1.864		日雇	B
295	A 5	七兵衛	2.67		日雇		364	F 1	抄書	1.864		糸引	
296	R 4	佐兵衛 庄右衛門家	2.6	13.92	糸引	B	365	F 1	五兵衛	1.864		日雇	A
297	R 4	佐兵衛	2.6			A	366	F 1	六兵衛	1.864		日雇	
298	R 4	二郎右衛門家	2.6		糸引		367	F 1	宝蔵院	1.864		山伏	C
299	J 22	七郎右衛門 九郎右衛門	2.58	27.3		A	368	S 8	善兵衛家	1.855	21.99	糸引	
300	J 22	七郎右衛門 九郎右衛門	2.58		馬持	B	369	S 8	勘右衛門	1.855		日雇	
301	J 21	治右衛門	2.55	27.3		A	370	S 8	忠兵衛 八右衛門	1.855		日雇	B
302	J 21	治右衛門 久兵衛	2.55		日雇	B	371	S 8	庄兵衛	1.855		日雇	
303	M 2	次郎兵衛 兵左衛門	2.545	25.71	日雇	B	372	S 8	長左衛門家	1.855		日雇	
304	M 3	善兵衛 新三郎	2.545	25.02			373	S 8	庄三郎	1.855		日雇	
305	M 2	市兵衛	2.545		日雇		374	E 10	善兵衛 庄左衛門	1.79	17.55	日雇	B
306	M 2	久兵衛	2.545		日雇		375	E 10	新兵衛 二郎右衛門	1.79		日雇 糸引	
307	M 2	太兵衛	2.545		日雇		376	Y 7	与次右衛門 伊兵衛	1.755			
308	M 2	善右衛門	2.545		日雇		377	Y 7	与兵衛	1.755		養ツリ	
309	M 2	市兵衛	2.545		日雇		378	Y 7	半四郎	1.755		日雇	
310	M 3	勘蔵	2.545			B	379	Y 7	六兵衛	1.755		日雇	
311	M 3	忠兵衛	2.545		日雇		380	Y 7	五郎兵衛	1.755		田楽ツリ	
312	M 3	辰三郎	2.545		小間物ツリ		381	R 7	長兵衛	1.745	29.97	日雇	
313	J 4	辰兵衛 せん	2.49	20.94		B	382	R 7	八兵衛	1.745		日雇	
314	J 4	せん	2.49			A	383	R 7	十兵衛	1.745		日雇	
315	Z 3	五左衛門	2.437		馬持	A	384	R 7	七右衛門	1.745		日雇	
316	Z 3	治兵衛	2.437			A	385	R 7	久兵衛	1.745			
317	K 6	忠兵衛	2.43	21.99		A	386	R 7	十兵衛 八兵衛	1.745		日雇	B
318	K 6	惣兵衛 六兵衛	2.43			B	387	a 7	庄左衛門 長兵衛	1.706		日雇	B
319	K 6	五兵衛	2.43				388	a 7	庄兵衛	1.706		日雇	
320	Y 4	善左衛門	2.275	42.45	兼ヤ	A	389	a 7	八右衛門	1.706		日雇	
321	O 1	庄左衛門 吉右衛門	2.275	23.4	日雇	B	390	a 7	庄左衛門	1.706		日雇	
322	Y 4	三十郎	2.275		日雇		391	J 25	六左衛門 藤右衛門	1.688	27.3	日雇	A
323	Y 4	庄兵衛	2.275		日雇		392	J 25	六左衛門	1.688			
324	O 1	庄左衛門	2.275		大工	A	393	J 25	行違	1.688		運心	
325	O 1	たむ 西念	2.275		糸引 運心		394	J 25	彦助家	1.688		糸引	
326	J 24	彦右衛門	2.25	27.3		A	395	I 4	辰兵衛	1.665	25.35		A
327	J 24	彦右衛門 忠兵衛	2.25		日雇	B	396	I 4	辰兵衛	1.665		日雇	
328	J 24	惣右衛門	2.25		日雇		397	I 4	庄左衛門 長兵衛	1.665		日雇	
329	e 3	四郎右衛門	2.145	79.95		A	398	I 4	七兵衛	1.665		日雇	
330	e 3	長左衛門	2.145		小間物ツリ		399	E 4	九兵衛 源兵衛	1.62	28.275	小間物ツリ	B
331	e 3	四郎右衛門 与兵衛	2.145		小間物ツリ		400	E 4	庄兵衛	1.62		日雇	
332	J 26	市郎右衛門 市兵衛	2.07			B	401	E 4	長兵衛	1.62		日雇	
333	J 26	佐兵衛	2.07		日雇		402	O 2	久兵衛	1.56	23.4		A
334	J 26	六右衛門家	2.07		糸引		403	O 2	久兵衛 五兵衛	1.56		日雇	B
335	J 26	仁左衛門家	2.07		糸引		404	O 2	辰右衛門家	1.56		糸引	
336	J 26	仁右衛門家	2.07		糸引		405	O 2	六兵衛家	1.56		糸引	
337	G 1	伊右衛門 七兵衛	2.058		織ツリ	B	406	O 2	七兵衛	1.56		日雇	
338	G 1	清兵衛	2.058		兼ヤ		407	P 1	市郎右衛門	1.463	35.64	織ツリ	
339	G 1	市右衛門	2.058		日雇		408	P 1	七兵衛	1.463		日雇	
340	G 1	五郎左衛門	2.058		日雇		409	P 1	八兵衛	1.463		日雇	
341	G 1	庄次郎	2.058		日雇		410	P 1	藤兵衛	1.463		兼蔵	B
342	G 1	長次郎	2.058		日雇		411	R 5	善左衛門家	1.431	27.66	糸引	
343	E 7	与左衛門 五兵衛	1.95	27.3	糸引	B	412	R 5	太右衛門	1.431		大工	
344	I 3	七左衛門 七右衛門	1.95	25.71	日雇	B	413	R 5	庄三郎	1.431		日雇	
345	Y 2	五郎右衛門	1.95	19.5			414	R 5	抄書	1.431		運心	

第2図 間口順位表規模(3)

た。

この分析と同様の方法で「天保十五年分間絵図」や伊丹市博物館蔵明治地籍図などと検討して比較すれば、時代ごとの屋敷地の分割や統合のありかたが判るかもしれない。さらに、出土遺物の組成や遺構のありかたなどかなり階層別のありかたが判ってくるであろう。

柳沢吉保領伊丹郷町絵図

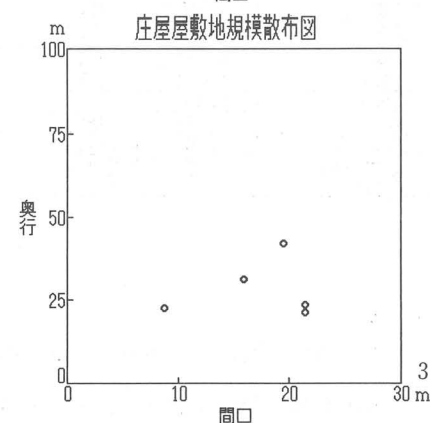
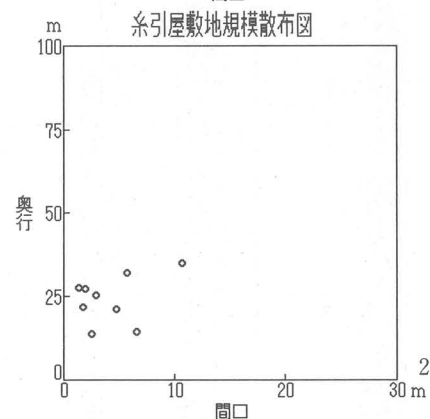
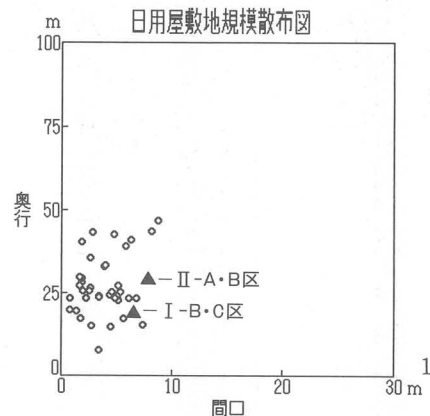
地区	地区内番	名前	間口	奥行	職業	区分
415	R 5	九兵衛	1.431		日用	
416	R 5	長兵衛	1.431		籠ウリ	
417	R 5	善右衛門 惣兵衛	1.431		日用	B
418	Q 4	張七郎	1.421	19.5	日用	
419	Q 4	七兵衛	1.421		日用	
420	Q 4	仁左衛門	1.421		日用	
421	Q 4	善兵衛	1.421		渡番	
422	Q 4	善左衛門	1.421		渡番	
423	Q 4	善次郎	1.421		渡番	
424	Q 4	辰兵衛	1.421		日用	
425	Q 4	直左衛門 加兵衛	1.421		日用	B
426	Y 9	三右衛門	1.41		福門寺	
427	Y 9	七右衛門	1.41			
428	Y 9	千代	1.41		糸引	
429	N 6	久兵衛	1.3	23.4		A
430	Y 3	善兵衛	1.3			
431	Y 3	長兵衛	1.3		日用	
432	Y 3	五郎兵衛後家	1.3		糸引	
433	N 6	久兵衛 九兵衛	1.3		日用	B
434	N 6	善右衛門	1.3		日用	
435	N 6	助右衛門後家	1.3		糸引	
436	N 6	吉右衛門後家	1.3		糸引	
437	N 6	九右衛門後家	1.3		糸引	
438	L 3	庄右衛門 長兵衛	0.83	20.04	日用	B
439	L 3	善兵衛	0.83		日用	
440	L 3	助右衛門後家	0.83		糸引	
441	O 3	三郎右衛門 五兵衛	0.798	23.4	日用	B
442	O 3	長左衛門	0.798		日用	
443	O 3	半兵衛	0.798		日用	
444	O 3	太郎兵衛	0.798		日用	
445	O 3	惣左衛門後家	0.798		糸引	
446	O 3	与兵衛後家	0.798		糸引	
447	O 3	七右衛門	0.798		日用	
448	O 3	与右衛門	0.798		日用	
449	O 3	市兵衛後家	0.798		糸引	
450	O 3	吉兵衛後家	0.798		糸引	
451	O 3	せふ	0.798		糸引	
452	c 2	長右衛門		79.95		B
453	A 3	阿部豊後守後家行所		32.46		
454	N 16	法蓮寺		32.175	寺	
455	C 4	阿部豊後守後家行所		31.74		
456	O 7	六右衛門 市兵衛		24.84	日用	A
457	A 1	阿部豊後守後家行所		23.4		
458	O 8	与右衛門		21.81		A
459	R 3	忠兵衛		13.92		A
460	Z 9	清左衛門 与惣左衛門		8.775	日用	
461	a 1	吉兵衛			櫛打	
462	a 1	八左衛門			日用	
463	a 1	正安			医師	
464	a 1	加兵衛			日用	
465	a 2	清右衛門 萬兵衛			日用	B
466	Z 6	清左衛門			庄屋	A
467	Z 6	御蔵				
468	Z 7	赤惣右衛門			こき売	B
469	Z 9	惣左衛門			製糖	
470						
471	E 9	三郎右衛門 伊兵衛			日用	B
472	E 9	五兵衛			日用	
473	E 9	六兵衛			日用	
474	L 2	太兵衛			日用	
475	L 3	八兵衛			日用	
476	N 1	庄右衛門				
477	N 1	加右衛門			日用	
478	N 1	利兵衛			日用	
479	N 1	六兵衛			日用	
480	N 1	浄蓮			道心	
481	N 1	太兵衛			日用	
482	N 1	惣左衛門			日用	
483	N 1	九兵衛			日用	

第2図 間口順位表規模(4)

<付記>

データ入力には、富山大学人文科学研究科 鈴木和子、富山大学人文学部 大平愛子、同 小野寺克美の各氏に協力頂いた。記して感謝する次第である。

地区	地区内番	名前	間口	奥行	職業	区分
484	N 1	久兵衛			日用	
485	N 1	善五郎			日用	
486	N 1	市兵衛 太郎兵衛			古手ウリ	B
487	N 12	惣左衛門				
488	Q 2	八兵衛			製糖	
489	Q 3	剛達後家			茶ウリ	B
490	R 14	市兵衛後家			糸引	
491	R 14	長兵衛			日用	
492	R 14	太兵衛			日用	
493	R 14	六兵衛後家			糸引	
494	R 14	久左衛門 仁左衛門			日用	
495	R 14	忠兵衛後家			糸引	
496	R 14	妙法			道心	
497	R 14	六兵衛			籠ウリ	
498	R 17	七兵衛後家			糸引	
499	R 18	妙元			道心	
500	R 20	西舟				
501						



第3図 職業別屋敷地規模散布図

(1 日用、2 糸引、3 庄屋、三角印は検出遺構)

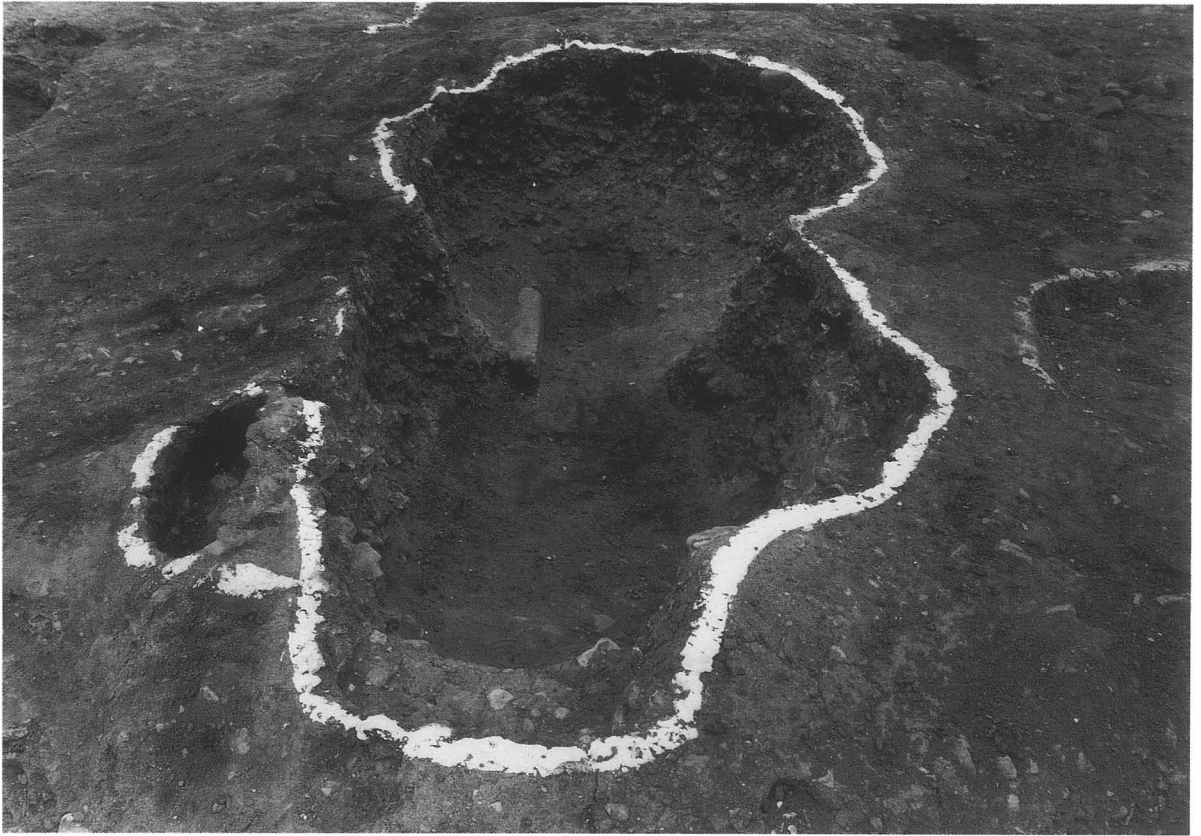
版 圖



1 法厳寺・正善寺・大蓮寺全景



2 I-A区 全景(南より)



1 I-A区 SX01 (南より)



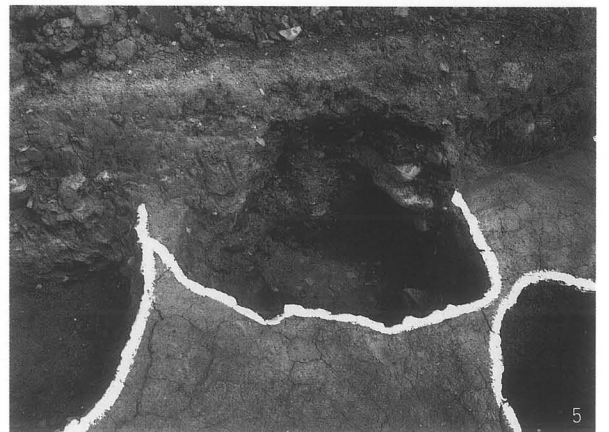
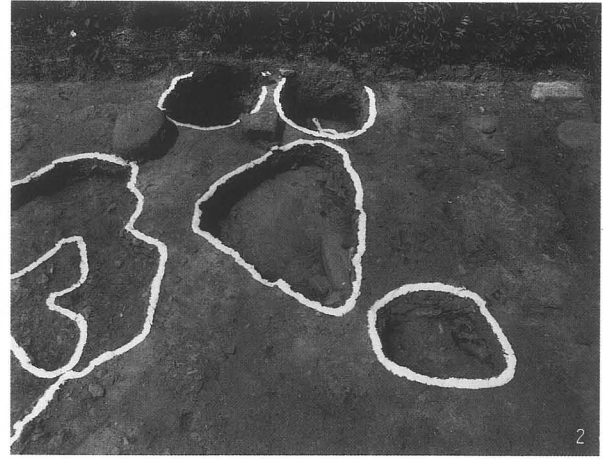
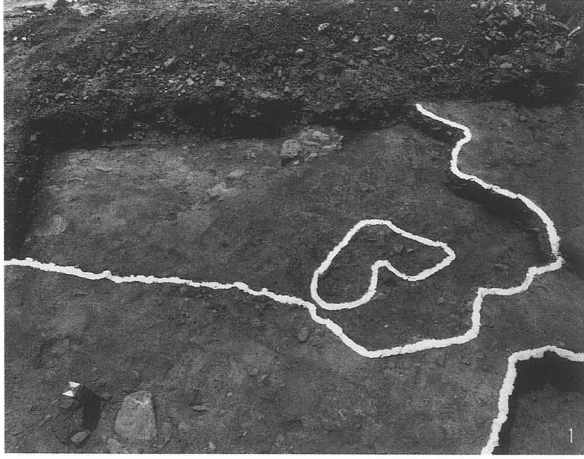
2 I-B区 第3次面全景 (南より)



1 I-B区 第2次面全景(南より)



2 I-B区 第1次面全景(南より)

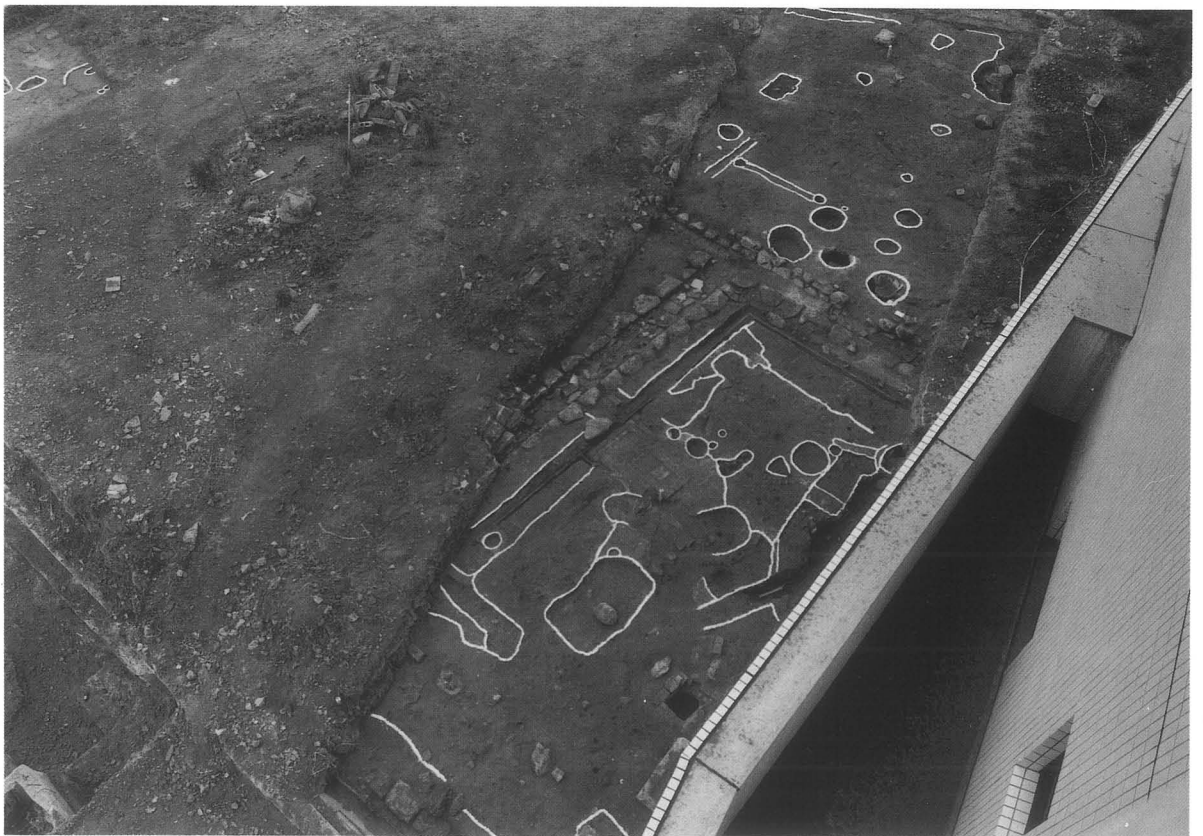


1 I-B区 SK23 (東より)
3 I-C区 第3次面全景 (東より)
4 I-C区 SE04 (東より)

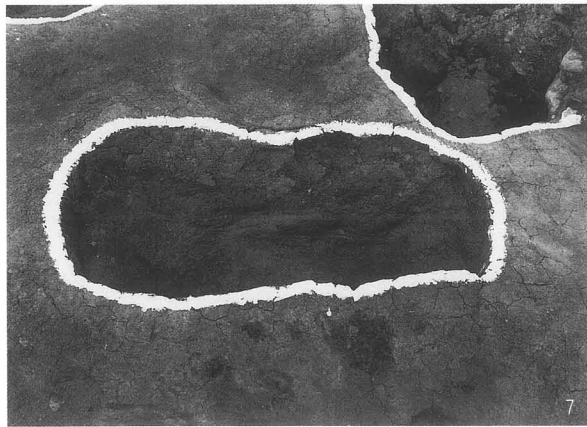
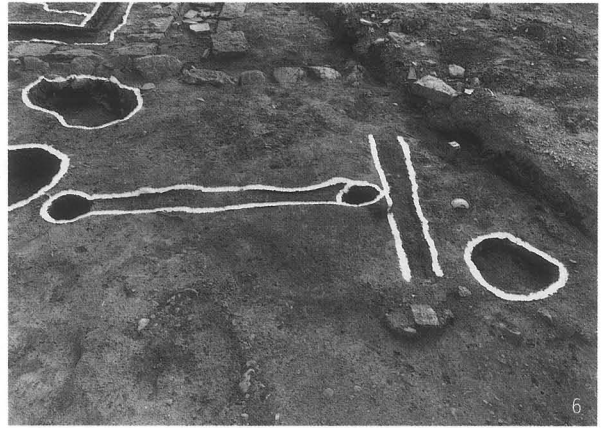
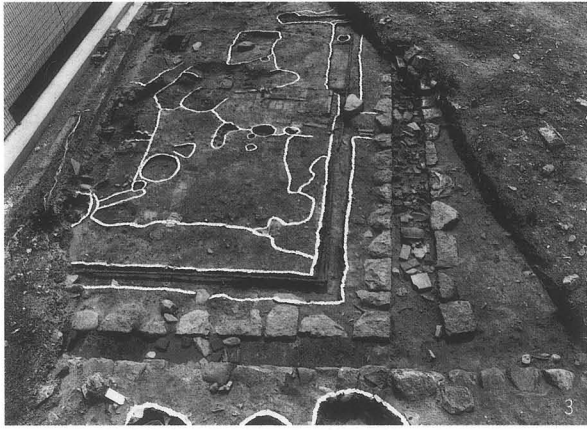
2 I-B区 SK26 (南より)
5 I-C区 SE03 (北より)



1 I-C区 第2次面全景(南より)

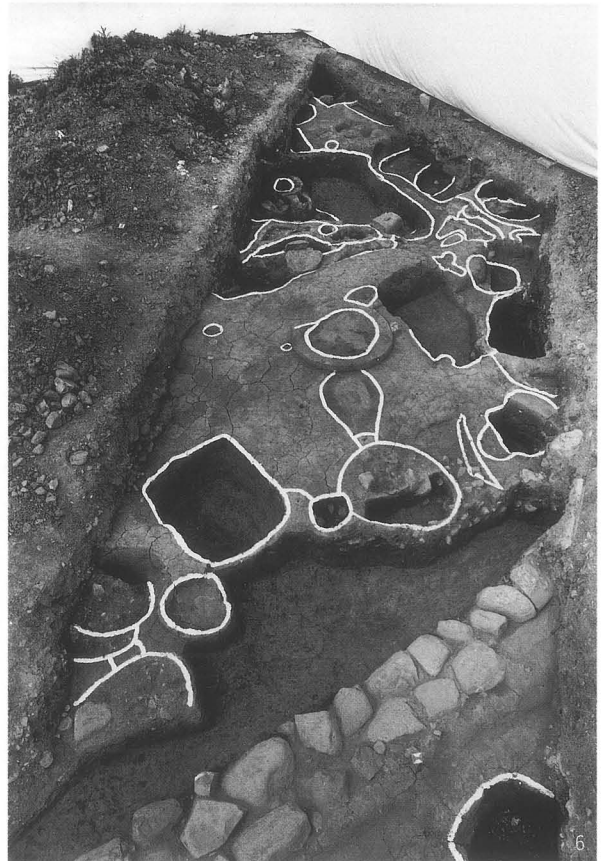
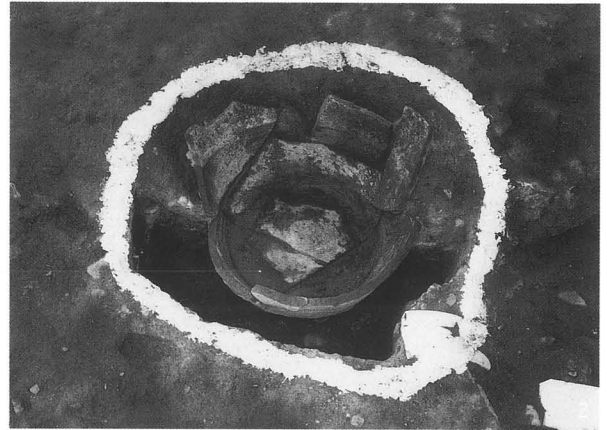


2 I-C区 第1次面全景(西より)



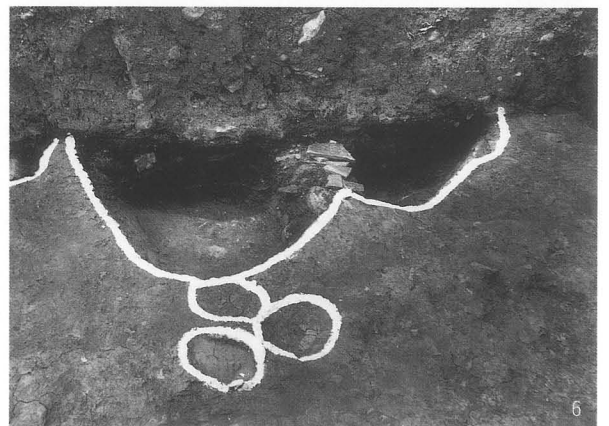
1 I-C区 SK74 (北より)
 3 I-C区 SD04・05 (東より)
 5 I-C区 SD06 (東より)
 7 I-C区 SK60 (西より)

2 I-C区 SK77 (西より)
 4 I-C区 SD04・05 (東より)
 6 I-C区 SD02・03 (東より)
 8 I-C区 SK33 (南より)



1 I-C区 SK38 (西より)
3 I-C区 S I02 (東より)
5 II-A区 第3次面全景 (南より)

2 I-C区 S I01 (西より)
4 I-C区 S I02 (西より)
6 II-A区 第3次面全景北側全景 (南より)



1 II-A区 第2次面全景(南より)

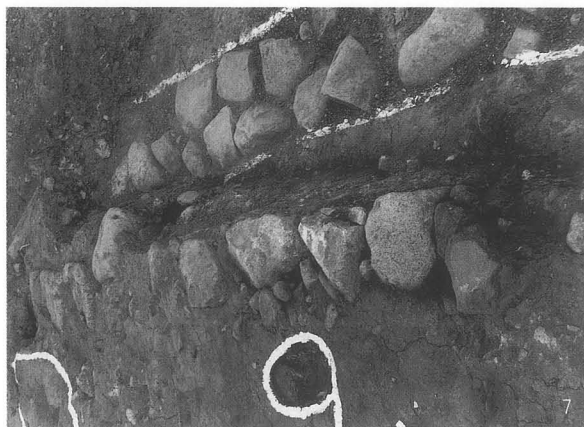
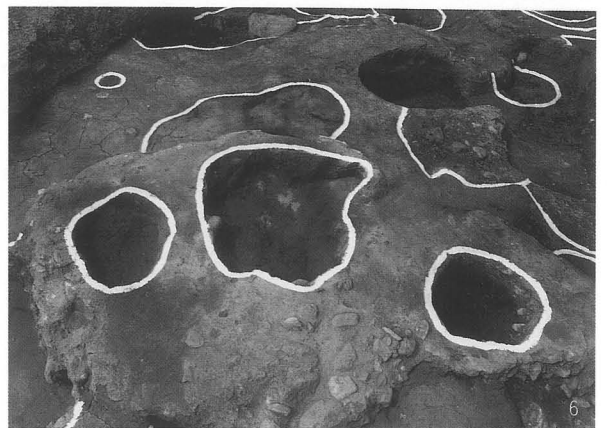
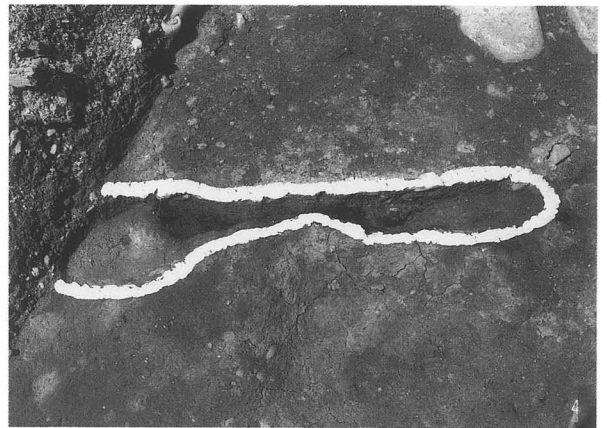
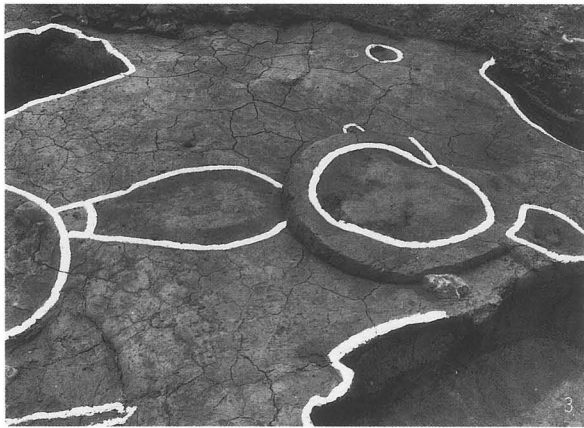
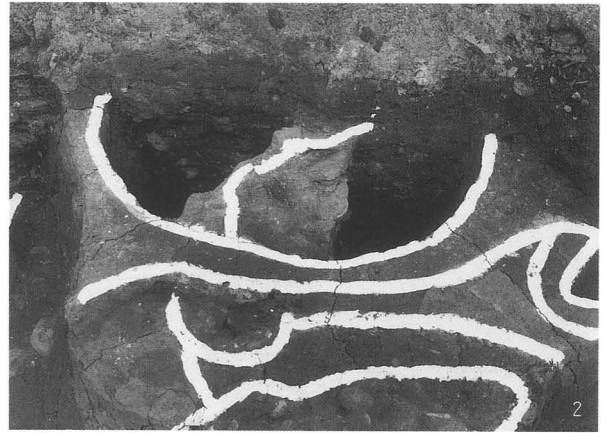
3 II-A区 SA01(西より)

5 II-A区 SD03(西より)

2 II-A区 第1次面全景(南より)

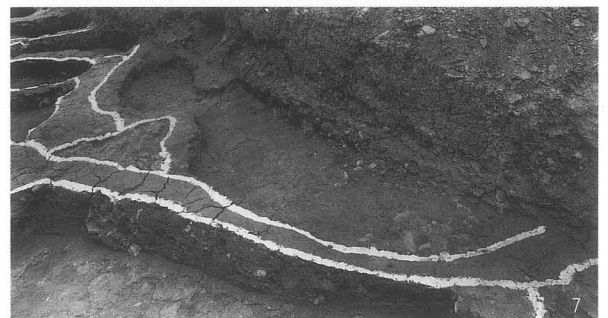
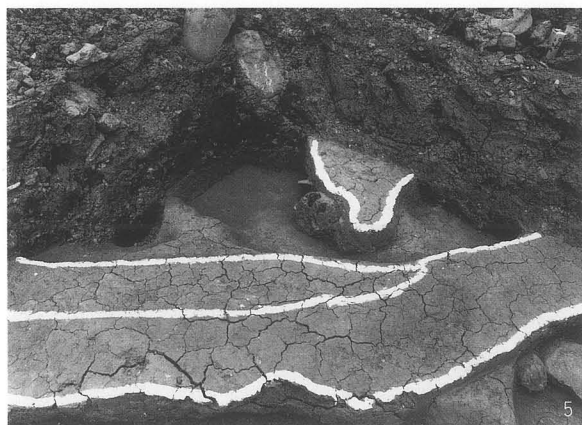
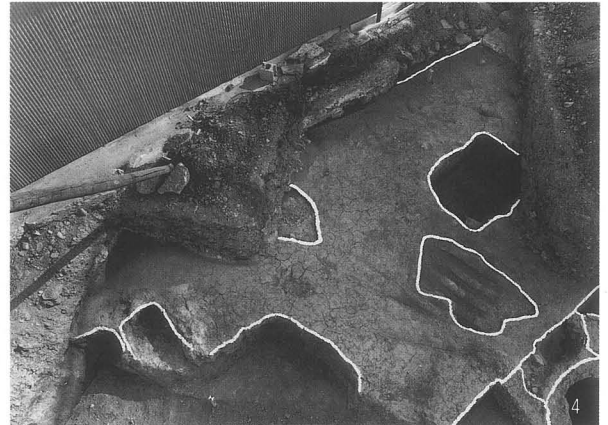
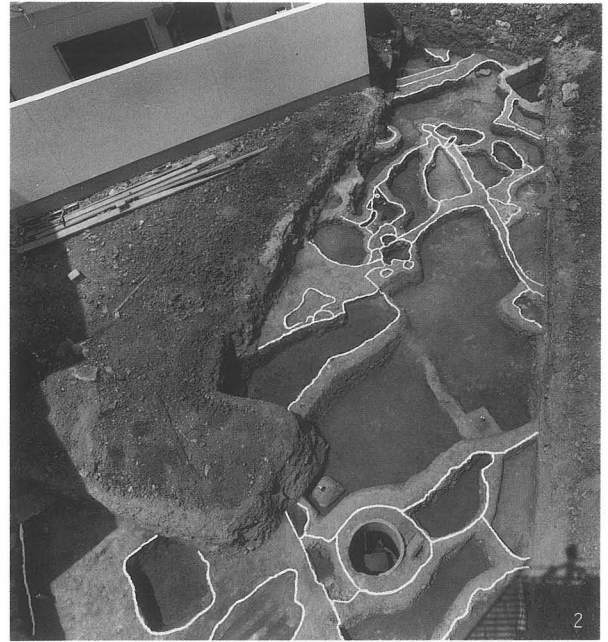
4 II-A区 SE01(西より)

6 II-A区 SK57(東より)



1 II-A区 SK80 (東より)
3 II-A区 SX07・08・09 (東より)
5 II-A区 SK67 (東より)
7 II-A区 SA02 (西より)

2 II-A区 SK83 (西より)
4 II-A区 SD04 (南より)
6 II-A区 SX03・05・06 (南より)
8 II-A区 SK43・44・SX01 (南より)



1 II-B区 第2次面全景(東より)

3 II-B区 SK07(南より)

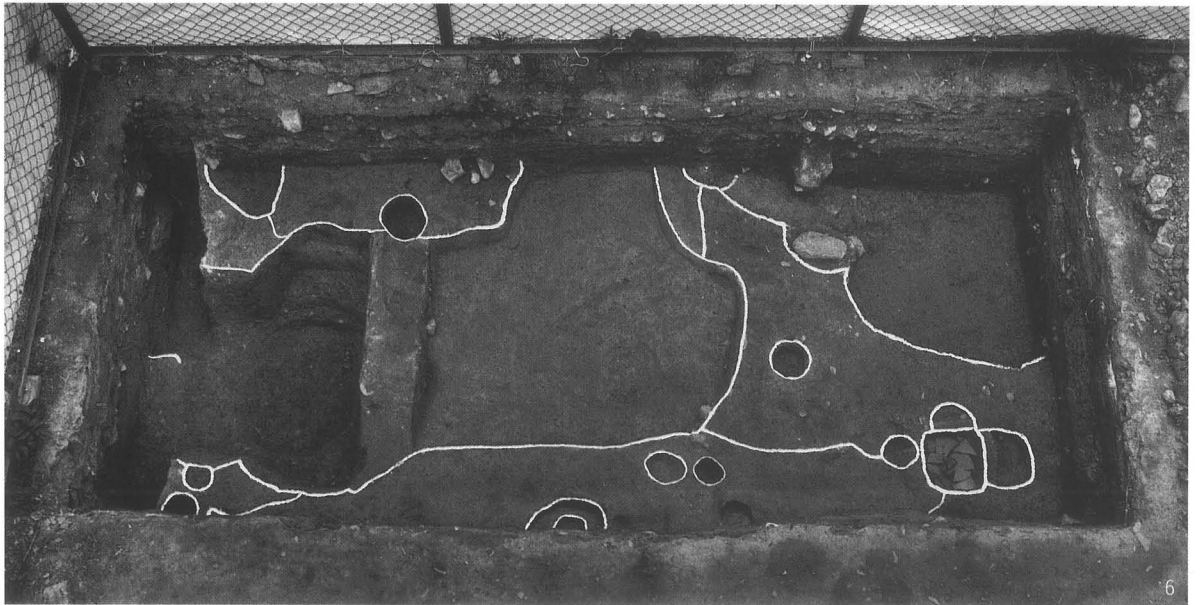
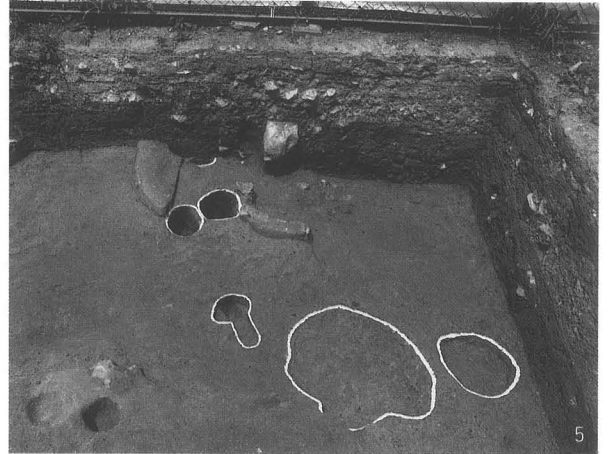
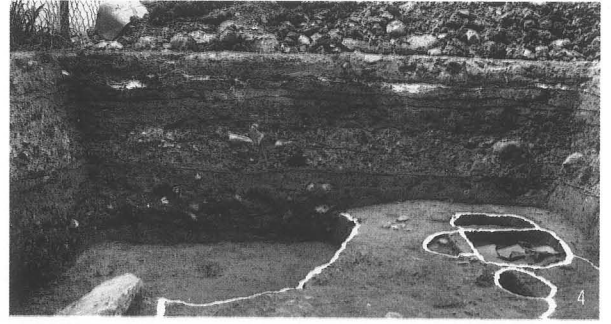
5 II-B区 SK30(東より)

2 II-B区 第1次面全景(東より)

4 II-B区 第1次面南端(北より)

6 II-B区 SK20(東より)

7 II-B区 SK33(南より)



1 II-B区 SK113 (東より)

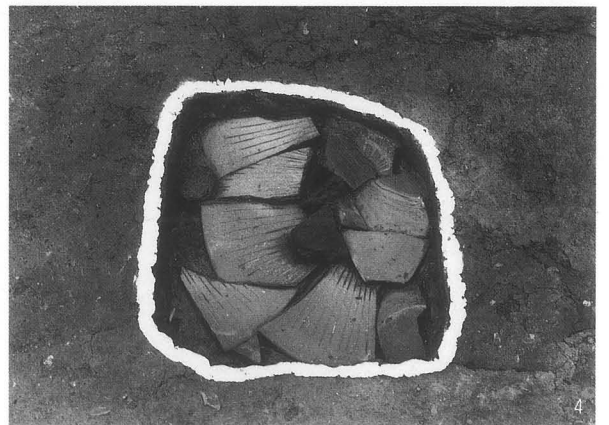
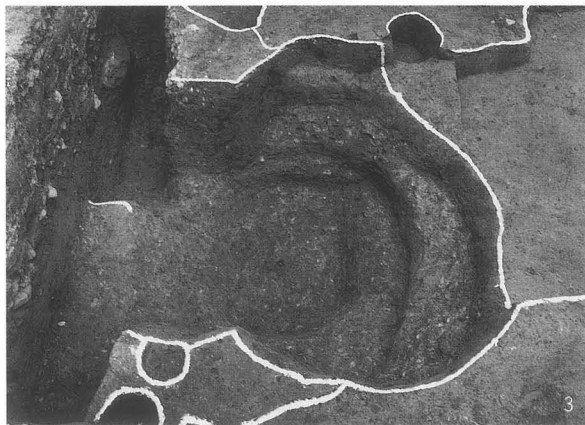
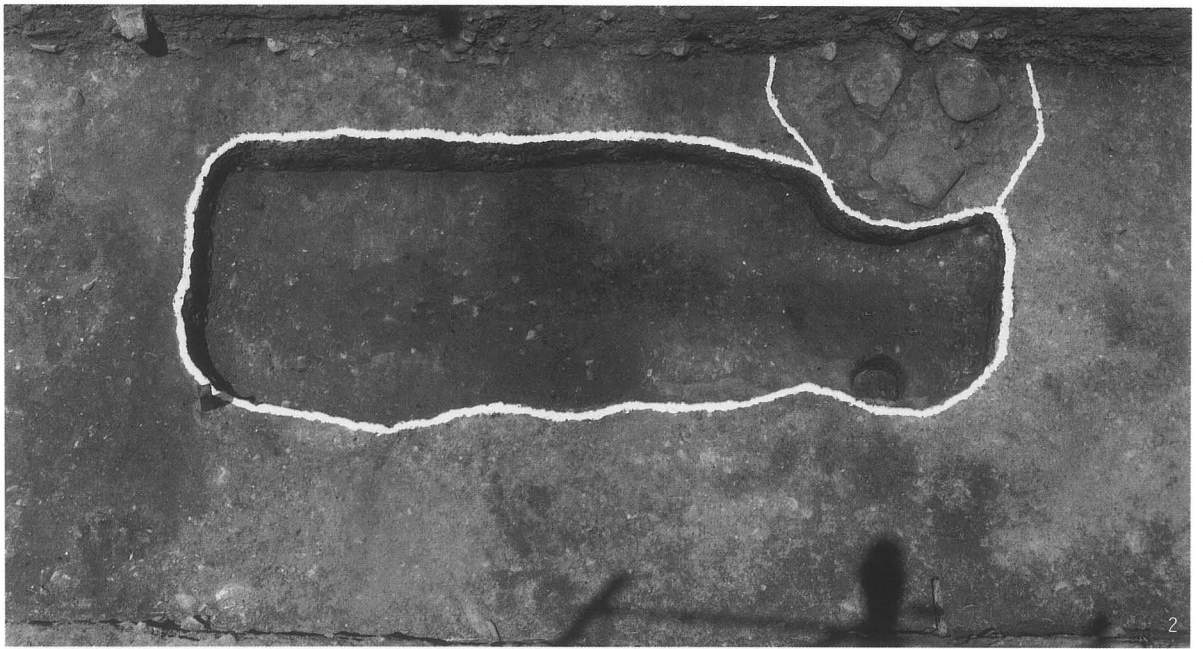
2 II-B区 SK114 (東より)

3 II-B区 SK114遺物出土状態 (東より)

4 III区 北壁 (南より)

6 III区 第3次面全景 (東より)

5 III区 第4次面北側 (東より)

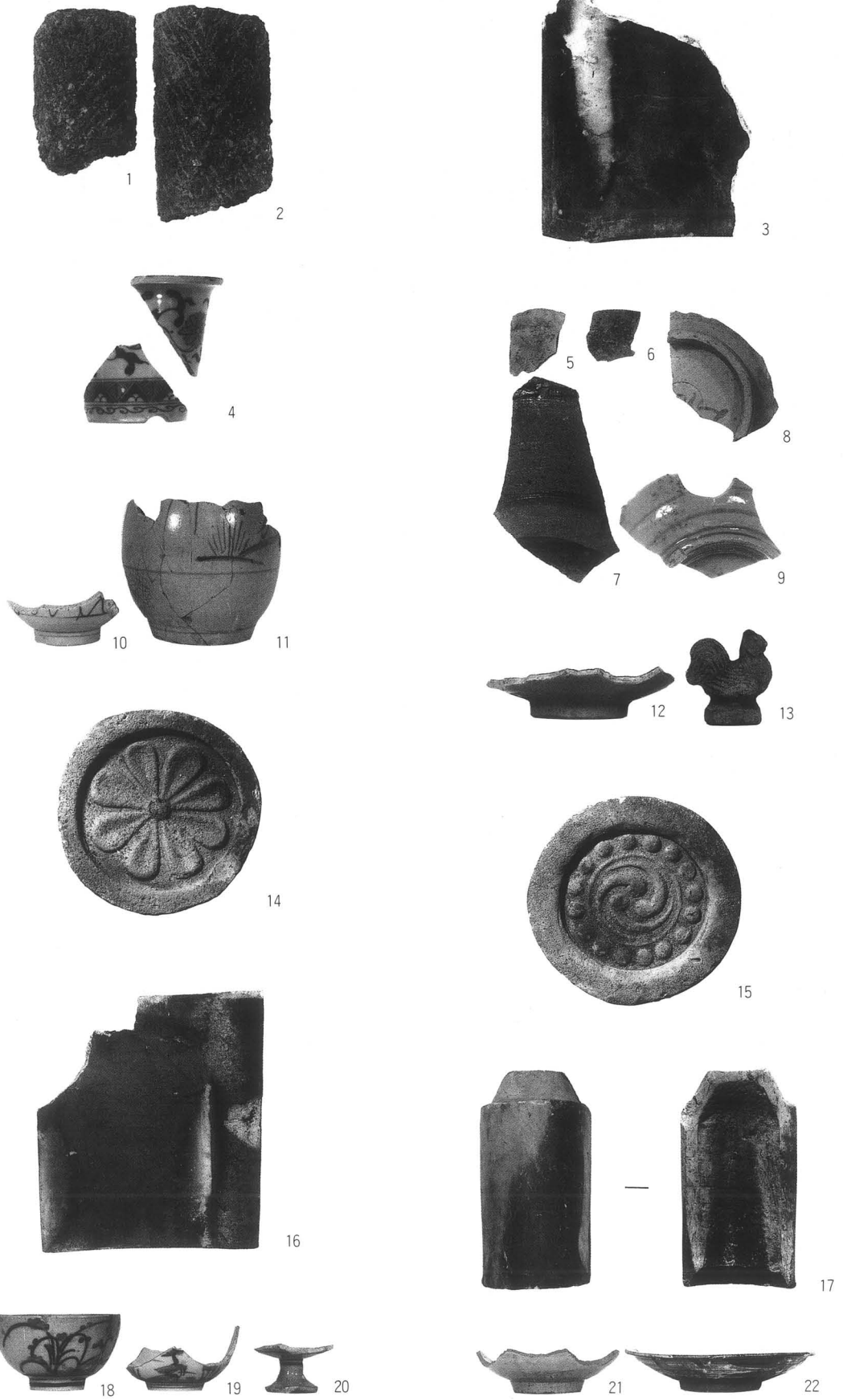


1 III区 第2次面全景(東より)

2 III区 第1次面全景(東より)

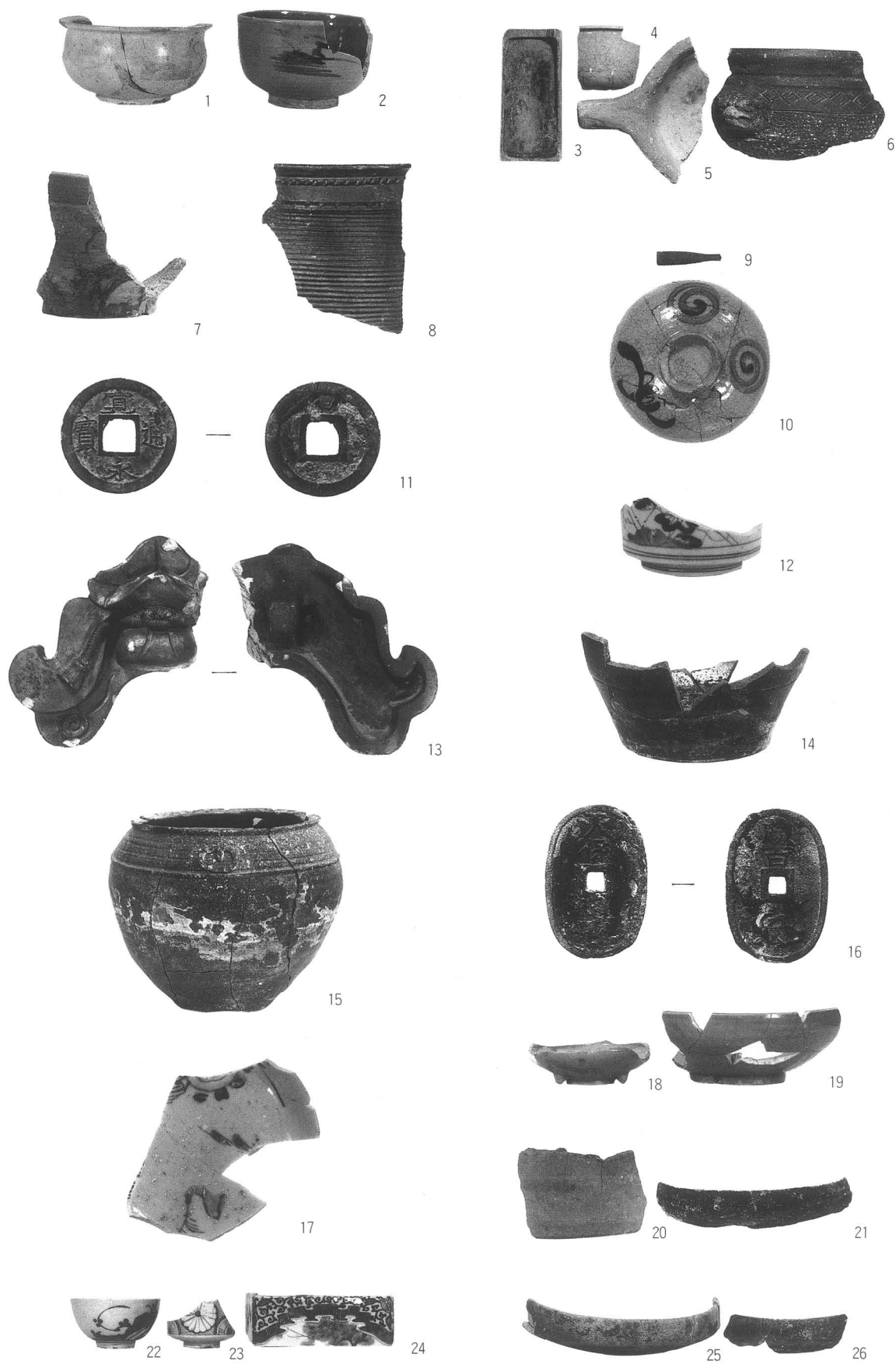
3 III区 SK04(東より)

4 III区 SP12遺物出土状態(西より)

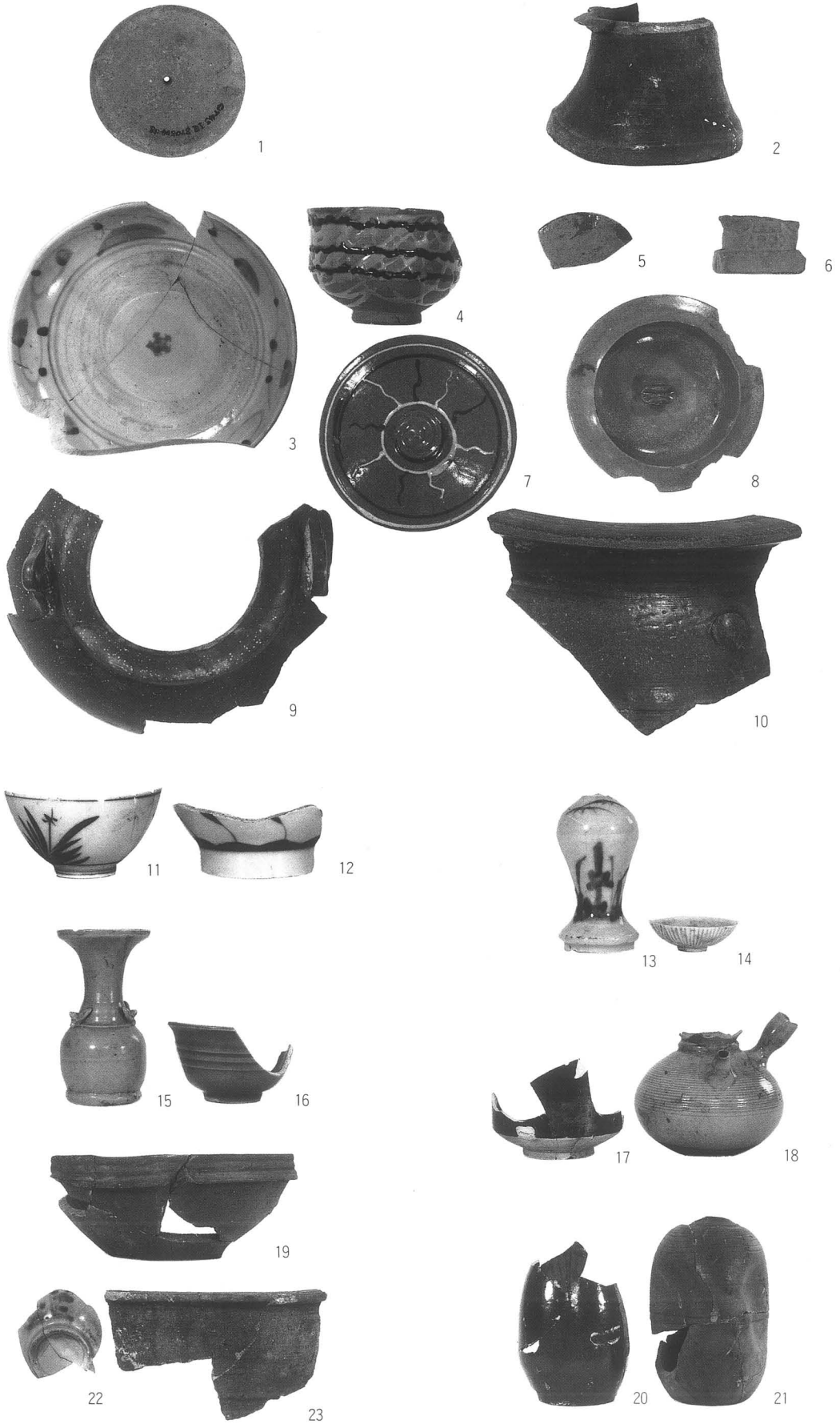


I-A区 SK15 (1~4)、I-B区 SK23 (5~9)

I-C区 SE04 (10~17) · SE03 (18~22)

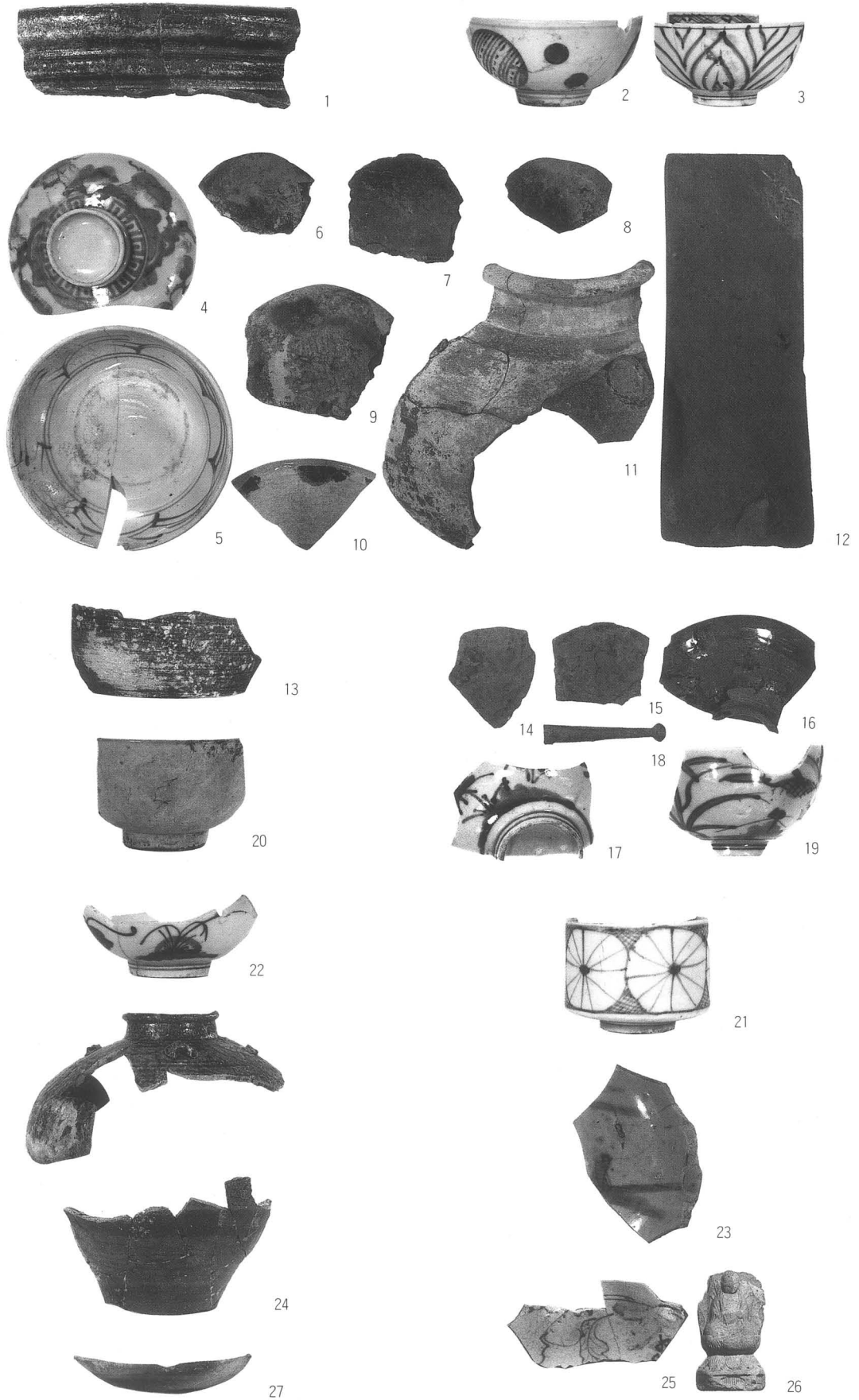


I-C区 SE03(1~8)・SD05(9~11)・SK60(12・13)・SI01(14)・SI02(15・16)、
1次面包含層(17~26)



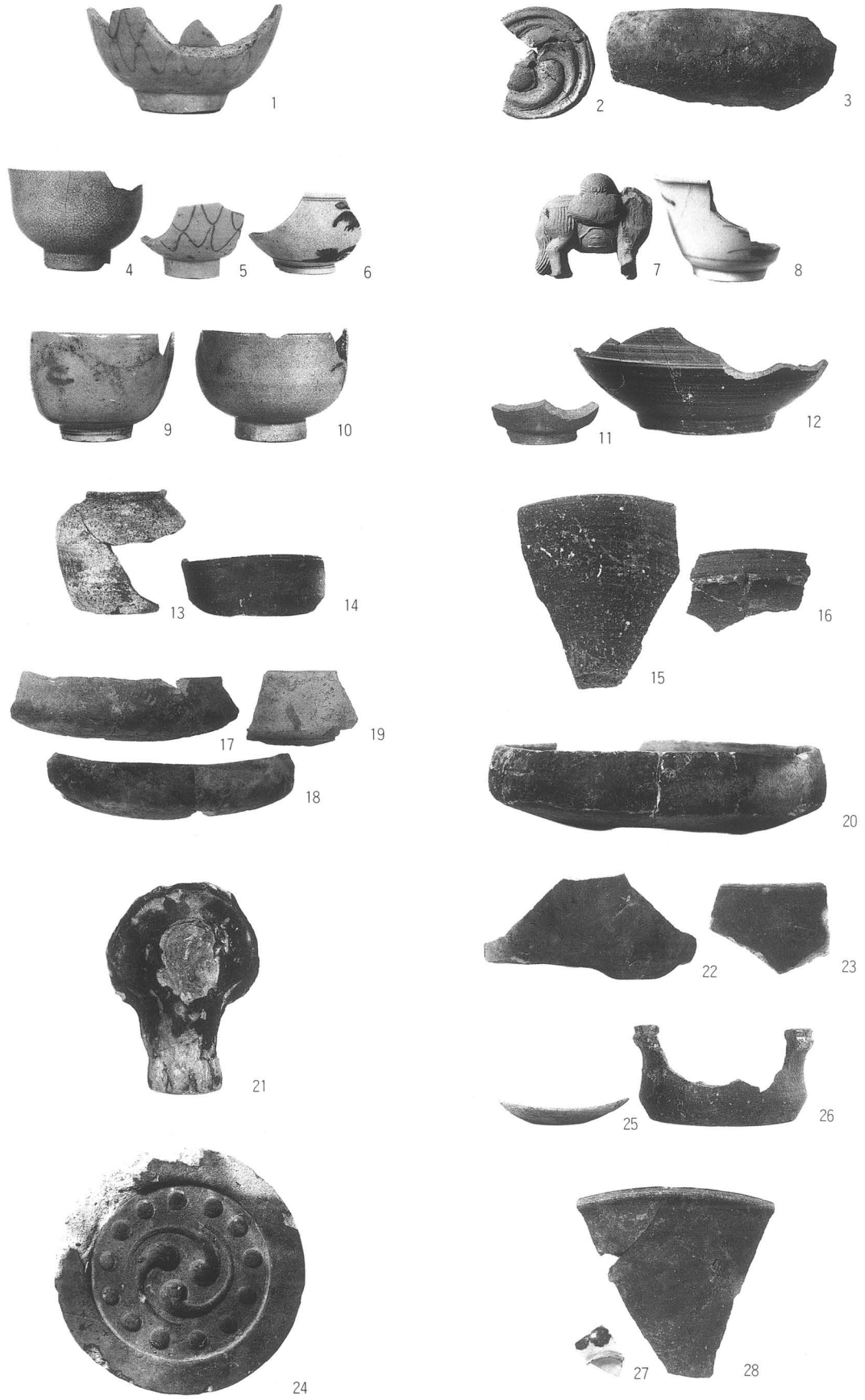
I-C区 表面採集遺物 (1・2)

II-A区 SE01 (3~21)・SK57 (22・23)

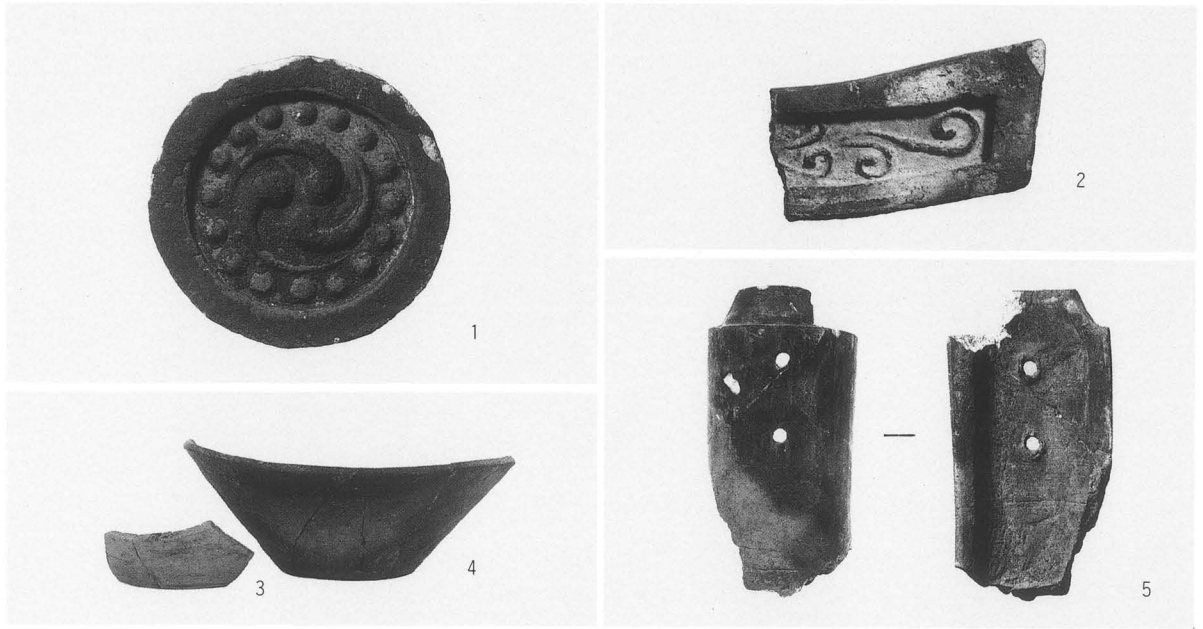


II-A区 SK57 (1)・SK80 (2~13)・SK83 (14~19)・SK86 (20)・SK67 (21)

II-B区 SK05 (22・23)・SK07 (24~26)・SK30 (27)



II-B区 SK20 (1)・SK33 (2・3)・SK113 (4~6)・SK114 (7~24)、III区 SK04 (25~28)



Ⅲ区 SK04 (1・2)・SP12 (3・4)・SK01 (5)

三軒寺前プラザ建設に伴う発掘調査報告書

有岡城跡・伊丹郷町 III

編集 伊丹市教育委員会
発行 〒664 伊丹市千僧1-1
TEL 0727-83-1234 (代表)
大手前女子大学史学研究所
〒664 伊丹市稲野2-2-2 大手前女子短期大学内
TEL 0727-70-6216 (直通)

平成6年3月31日

印刷・有限会社 真陽社
京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL 075-351-6034

